陽堂文庫

特263
218

109

一葉日記集

卷上

樋口一葉全集第四卷

始

170

特263
218

春陽堂文庫
109

一葉日記集

巻上

（一葉全集）

春陽堂

昭和九年
帝國圖書館

目次

道しばのつゆ……一七二
よもぎふにつ記……一七九
同……一九六
同……二〇九
同……二一九

若葉かげ（二十四年四月――六月）

花にあくがれ月にうかぶ折々のこゝろをかしきもまれにはあり。おもふことといはざらむは腹ふくるゝてふたとへも侍れば、おのが心にうれしともかなしともおもひあまりたるをもらすになん。さるはもとより世の人にみすべきものならねばふでに花なく文に艶なし、たゞその折々をおのづからなるから、あるはあながちにひとりぼめして今更におもなきもあり、無下にいやしうてものわらひなるも多かり。名のみことごとしう若葉かげなどいふものから行末しげれの祝ひ心には侍らずかし。

卯のはなのうきよの中のうれたさにおのれ若葉のかげにこそすめ

卯月十一日、吉田かとり子ぬしの澄田川の家に花見の宴に招かるゝ日也。友なる人々は師の君のがりつどひて共に行き給ふもおはしき。おのれは妹のたれこめのみ居て春の風にもあたらぬがうれたければ、いでやともになどそゝのかして誘ひ出ぬ。花ぐもりとかいふらんやうに少し空打霞みて日のかげのけざやかならぬもいとよし。上野の岡はさかり過ぬとか聞つれど、花は盛りに月はくまなきをのみ愛るものかは、いでやその散がたの木かげこそをかしからめといへば、ならびが岡の法師のまねびにやといもうとなる人は打ゑみぬ、さすがに面なくて得いはず成ぬる事もをかし。我すむ家より上野の岡は遠き

ほどにてもたかりければ、また朝露のしげきほどに來にけり。聞けんやうにもあらず、清水の御堂の邊りこそ大方うつろひたれど、權現の御社の右手の方など、若木ながらまださかり也き。さと吹く朝風のひやゝかなるにぬれたる花びらの吹雪と斗散みだるゝはいとをしくて、おほふ斗の袖もがなといはまほしけれど、例のと笑はれんがうしろめたくてやみぬ。澄田川にも心いそげばをしき木かげたちはなれて車坂下るほど、こゝは父君の世にい給ひし頃花の折としなればいつもいつもおのれらともなひ給ひて朝夕立ならし給し所よと、ゆくりなく妹のかたるをきけば、むかしの春もおもかげにうかぶ心地して、

山櫻ことしもにほふ花かげにちりてかへらぬ君をこそ思へ

心細しやなどいふまゝに、朝露ならねど二人の袖はぬれ渡りぬ。山下といふ所よぎりてむかし住けん宿のわたり過るほど、よの移り行さまこそいとしるけれ。まだ八とせ斗のほどに、下寺といひつるおきつち所は鐵の道引つらねて汽車の通ふ道とは成ぬ。其車とゞむる所を始め、區の役所、郵便局など、其頃思ひもかけざりしものあまた所出來にたり。わがはらから難波津ならふ頃、その師のがり行とて常にこのあたり行かよふほどやがてはかくならんなど人の語りて聞かせつれど、其はいつのよの事なるべき蜃氣樓のたぐひにこそと打笑み草にしたりしも、よの事業の俄かなる早くも聞けんやうに成りたるを、おのれらこそあれ其折に露たがはず何仕いでたる事はなくて徒にとしのみ重ねたるよと打なげかれぬ。このほとりより車ものして角田河までは行たり。枕ばしといふより車はかへしにき。散もはじめず咲ものこちぬ花の匂ひいとこまやかに、遠くのぞめば只一村の雲かと斗うたがはれ、近く見渡せば梢につも

る雪かとのみ見ゆめる。まだ人々少なきほどゝて花のかげを我が物にしてみありくほど、まこと小蝶に身をかへたらん心地ぞする。秋葉、しら髭のわたりよぎりて梅若の塚までも花を探りき。このあたりには人のかげもなきがいと嬉し。かへさには長命寺の櫻もちゐ求めて妹に渡しぬ。こは母君にまゐらせんとて也。おのれは三めぐりのほとりにて袂わかちぬ。かとり子ぬしの家はその御社のそがひに高くそびえたる三階がそれなり、おのれより先にみの子の君、つや子の君おはしき。例のざれごといひかわすほどに、今日は大學の君たちきそひ舟ものし給ふとては木ま〳〵にこぎいで給ふも折からいとうれし。遠眼鏡ものして見渡せば、此高どのゝしたこぎ行やうにぞみゆる。赤しろ青紫など組々にて服の色わかち、おのがじゝ漕きそふさま水鳥などのやうに心のまゝ也。堤にはその友だちの君なるべし、赤よ白よなどおのが引方を呼はげまして心もとなげに舟とともにかけ給ふもいといさまし。みの子の君うらやましげに見居たまひて、かち給はゞさもこそ嬉しからめとの給はすに、おのれもまけたまはゞさもこそくやしからめと打うめきて笑はれにき。かゝりしほどに師の君も友だちの君たちも來給ひぬ。龍子の君、靜子の君はきそひ舟見にまねかれ給ひてこなたのむしろには後にこそつらならめとて出行給ふ。難陳なども よふすほどまことに心や空にあくがれけん花のかげ斗みえてそゞろにすぎぬ。折から花火のあがりぬれば師の君

花にはなびをそへてみるかな

とかき給ひて此かみつけ給へと伊東の夏子ぬしにしめさせ給へば、君たゞちに、

思ふどちまとゐするさへうれしきを
とかいしるし給ひてさしおき給ふさま例ながら優にうるはしうこそ。更にみの子の君句のしもかき給ふ、

蛙の聲ものどけかりけり

おのれにかみをとすゝめたまふに打おどろかれて、かの花かげにあくがれありくうかれ心呼かへすなどまことにあわたゞし。時うつるとせめられて、

おもふどちおもふことなき花かげは

といひたらんやう成しがうつしごゝろならねば覺えず。猶君たちの玉の言の葉いとしげかりしもみな忘れにけり。この事終りて後久子の君が引すさび給ひし琴のねは心なきおのれさへ松風のひゞきともやいふべからんと思はれ侍りき。いでや日もくれなんとすなるを御ことのねに心はひかるゝものから、花かげのくらくならんもいとをしければと師の君のの給ふ折しも、龍子の君もしづ子の君も歸り來給ひぬ。あるじの君今しばしとも、の給ひしかど、まかり申して出ぬ。供なる男子ども、酒など給ふほどなれば後よりこよとて、師の君はじめ十三四人して堤には來たりぬ。折しも日かげは西にかたぶきて夕風少し冷かなるに、咲あまりたる花の三つ二つ散みだるゝは小蝶などのまふやうにみえてをかし。醉しれたる人の若き君たちにざれ言などいひかくるぞうがはしくもいとにくし。やう〳〵日の暮行くまゝにそれらの人はかげもとゞめずなりたれば、今は心安しとて花の木かげたちめぐり、おのがじゝざれかはすほどにいつしか名殘なく暮はてゝ、川の面をみ渡せば水上は白き衣を引たるやうに霞みて向ひのきしの火かげ斗かすかにみゆるも哀れなり。いでやまかりなんよ、月だにあらばよかるべきよなんめるを中中にうしろめたければと師の君のの給ふも實にことわり。若き君たちのみなればなり。今しばしともいはまほしけれど、供の男子なども來てそゝのかせば、いとをしけれど木かげ立はなれて車ものする折から、春雨少し降そめぬれば別れの涙にこそとの給ひかはす。枕ばしまではもろとも成しが、こゝよりおのがじゝ行別れ給ふさままことに殘りをしげなり。まことに春のうちの春ともいふべき日なりと思ふにも、今しばし空の晴なましかばとおもはるゝはかの蜀をのぞむとかいへる人心にや。

十五日　雨少しふる。今日は野々宮きく子ぬしがかねて紹介の勞を取たまはりたる半井うしに初てまみえ參らす日なり。ひる過る頃より家をば出ぬ。君が住給ふは海近き芝のわたり南佐久間町といへるなりけり。かねて一たび鶴田といふ人までものすること有て其家へは行たる事もあれば、案内はよくしりたり。愛宕下の通りにて何とやらんいへる寄席のうらを行て突當りの左手がそれなり。門くゞりいりておとなへばいらへして出きませしは妹の君なり。此方へとの給はすまゝに、左手の廊下より座敷のうちへと伴れいるに、兄はまだ歸り侍らず今暫く待給ひねと聞え給ひぬ。誠や君は東京朝日新聞の記者として小説に雜報に常に君があづかり給ふ所におはせば、さもこそはひまもなくおはすべけれと思ひつゞくるほどに、門の外に車のとまるおとのするは歸り給ひしなりけり。やがて服など常のにあらため給ひて出おはしたり。初見の挨拶などねんごろにし給ふ。おのれまだかゝることならはねば耳ほてり唇かは

きていふべき言もおぼえず、のぶべき詞もなくて、ひたぶるに禮をなすのみなりき。よそめいか斗をこなりけんと思ふもはづかし。君はとしの頃卅年にやおはすらん。姿形など取立てしるし置かんもいと無禮なれど、我が思ふ所のまゝをかくになん。色いと良く、面おだやかに少し笑み給へるさま誠に三才の童子もなつくべくこそ覺ゆれ。丈は世の人にすぐれて高く、肉豐かにこえ給へばまことに見上る樣になん。おもむろに當時の小説のさまなど物語り聞し給ひて、我思ふに叶ふべきは人好まず、人このまねば世にもて遊ばれず、日本の讀者の眼の幼ちなる新聞の小説といはゞ有ふれたる奸臣賊子の傳或は奸婦いん女の事跡の事をつゞらざれば世にうれざるをいかにせん、我今著す幾多の小説いつも我心に厭としてかきたるものはあらざるなり、されば世の學者といはれ識者の名ある人々には批難攻擊面も向けがたけれど、いかにせん我は名譽の爲め著作するにあらず、弟妹父母に衣食させんが故なり、其父母弟妹の爲めに受くるや批難もとより辭せざるのみ、もし時ありて我れわが心を持て小説をあらはすの日あらんか甘んじて其批難を受けざるなりとの給ひ終はつて大笑し給ふさま誠にさこそと思はれ侍れ。猶の給はく、君が小説をかゝんといふ事譯野々宮君よりよく聞及び侍りぬ、さこそはくるしくもおはすらめどしばしのほどにこそ忍び給ひぬ、我師といはれん能はあらねど談合の相手にはいつにても成りなん。遠慮なく來給へといとねんごろに聞え給ふことの限りなく嬉しきにもまづ涙こぼれぬ。物語りども少しする程に夕げしたゝめ給へとて種々ものして出されたり。まだ交もふかゝらぬものをと思へばしば〳〵辭すに、君、我家にては田舍ものゝ習ひ舊き友と新らしきとをとはず美味美食はかきたれど箸をあげさせ

參らするを例とす、心よくくひ給はゞ猶こそ喜しけれ、我も御相伴をなすべきにとあまたゝび聞え給へば、いろひもやらでたうべ終りぬ。かゝりしほどに雨はいや降に降しきり、日はやう〳〵くらく成ぬ。いでや暇給はりなんといへば、君車はかねてものし置たりのりてよとの給ふ。歸さにしたゝめ置たる小説の草稿一回分丈差置きて君が著作の小説四五册を借參らせて出ぬ、君がくまなきみ心ぞへの慕しく八時といふ頃にぞ家に歸りつけり。

廿一日夜　野々宮君吉田君參る、野々宮ぬしが役にて園遊會のもよほし有とやらんにて其時持參らせ給ふ景物樣のものゝ相談せばやとて來らせ給ひし成き。同夜十一日頃歸宿さる。此日先の日の小説の續稿成りたるをもて明日は桃水師のもとへまからんとて其夜清書すべかりしも、五回斗かきたる程に、母君のあまり夜のふくれば明日の事にせずやとの給はすまゝにやみぬ。

二十二日　例の午後よりなから井うしをとふ。種々のもの語りなど聞えしらせ給ひて先の日の小説の一回新聞にのせんには少し長文なるが上に餘り和文めかしき所多かり、今少し俗調にと教へ給ふ。猶さまざまの學者達をも紹介し參らせんなれどいさゝかさわる所なきにしもあらねばやみぬ、されど吾友小宮山卽眞居士は良師ともいふべき人なれば此君のみには引合せ參らせんなどの給ひ聞ゆ。昨夜かきたる丈の小説の添刪給へとて差置たるまゝ此日は早々歸りぬ。人一度みてよき人も二度めにはさらぬもあり、うしは先の日ま見え參らせたるより、今日は又親しさまさりて、世に有難き人哉とぞ思ひ寄ぬ。

廿四日　までに草稿名殘なくしたゝめぬ。あすは小石川の稽古日なり。其夜は中々にあわたゞしから

き。其夜郵便して草稿は半井うしに送り参らせぬ。

廿五日　雨ふる。つとめて小石川に行く。ひる頃より空名殘なく晴て日かげ花やかに差入りぬ。今日は何となく物の手につかぬ樣に覺ゆるは何故成しやおのれもしらず暮々に歸宅す。其夜桃水師のもとより消息あり、小說の事にもの語りあり、かつ先の日約し置きし卽眞居士への紹介をもなすべければ、さわる事なからんには、明日午前より神田の表神保町俵とかやいへる下宿までもうこよとなり。母君にも斗り参らするに、行ねとの給ふ。今宵は何となくむね打ふたがりて、ねぶるべき心地もせざりき。

あけの朝早く起出てみれば空はいつのまにか黑きくもておゝはれはてぬ。今日は雨にこそと、打わぶれば、母君降なましかば行かでも有なんとの給へど、私の用なるを空しくまたせ参らせんやは、つよく降なばそは詮なし大方ならば必らず参らんとて支度する程に、雲の切間みえ初ぬといふ、うれしくて家をば出ぬ。田町といふほとりより、又くろき雲おびたゞしく出來て、雨俄に盆をかへす樣に成ぬ。今更に歸りなんか同じことぬれぬべければ、志す方へとて、此ほとりより車ものしてゆく。小川町の治集館が南の方へ新らしく開きたる土地の下宿屋なり。おのれこのとしまでまだ下宿に人をとひたる事なければ、何となく心おくして入もえかねたれど、はつべきならねば、ねんじて半井うしやおはすといひ入たり。はしたあやし氣の面もちして誰君にやと問ふ、我名を通ずれば、此な方へと伴ひ入られぬ。少やかなる間幾間かしらず數多かり、うしのいませしは二階下の座しきにて、一間に住居給ふかとみゆるに、簞笥などの並べあるは手廻りたる事よと心には思ひて座につくほど、君は手紙したゝめ居給へりき。暫

し免させ給へとてかき終り給ふ。今日は洋裝にて有たり。やがて例のいとおだやかに、昨日はあまりよき日成しものから今日の雨をば心づかで手紙参らせたるはいとあしき業なりき、實は小宮山君も俄に腦の病ひやしなはんとて、此明日かま倉地方へ赴むかれたるをとていと〳〵う氣の毒がり給ふ。小說の事につきてもねんごろに聞えしらせ給ひて、此次ぎはかゝるも書み給へ、おのれかねてよりかゝんの心組み有しかども暇を得ずして日頃過ぬとて、かく〳〵してかくせばをかしからんなど物語り給ふ。それより先に今日はまづ君に聞え置度事ありてとの給ふ、そは何事にかと問ひ参らすれば、いなとや餘の事にもあらず、余やいまだ老果たる男子にもあらず、君はた妙齡の女子なるを交際の工合甚だ都合よろしからずと、君眞に迷惑氣にの給ふ。さもこそあれとかねて思へばおもて火の樣に成ておのが手の置場もなく只恥かわしさをもておほはれたり。猶の給はく、よりて吾れ一法を案ぜり、そは外ならず、余は君を目して我が舊來の親友同輩の青年と見なして萬の談合をもなすべければ、君は又余をみるに青年の男子なりとせで同じ友がきの女子と見給ひて隔てなく思ふ事の給ひねと聞え給ひて打笑みたり。我が家の貧なるをも君しろしめし給ふものから、もし差つかゆることもあらば何にても言ひおこせよ、我身に應ずる事は心の限りなしてんなどの給ひて、君が貧困の來歷など殘るくまなくつげ給ふにもさま〴〵思ふこと多かり。ひる飯又君がもてなしにあづかりて家にかへる。師がの給ふ所をきけば、吾が家のまづしきは未だまづしとすべきにあらず、君の經來り給ひけんこそ中々にまさり給へれとぞ覺ゆる。

五月二日　小石川稽古なり。空めづらしく晴渡りて一村のくももなければ、來給ひし人々いと多か

り。師の君の給はく、いかで今日過さず植物園のつゝじ牡丹みてこんはいかにとうながしたまへば、人人いとよき事なんめりとてみな〳〵うれしと思ひたり。三時頃より十三人して行。師の君例の直なる道は行たまはであやしう傳通院うら藪めきたる所を分おはす。行ども〳〵其道ならねばゆかるべくもあらず、里の子の草村に遊び居たるを呼びてとひたるにいとよく教へくれたり、見にくき子成しかども可愛かりき。五時といふを限りに人は入ぬなりといふを十分ほど前なりしかばあわたゞしく切符もとめて入ぬ。中のけしき人〳〵のさまは詞たるまじく、餘日記しぬべし。六時頃みな〳〵かへる。

八日　桃水君をとふ。をしへをこはんとてなり。此日は風あらくして天氣好かりき例の時に趣き侍りぬ。君やがて歸宿したまひて小説のことに付て種々ものがたりどもあり。例のねんごろにをしへを給ふ、今日ぞ小宮山君に紹介いたし侍らんにしばし待給へよ、今社よりの歸さにこゝへ寄給ふべければとなり。少し有て日かげやゝ落ぬべき頃に即眞居士は參られたり。君はよはひ卅四斗桃水ぬしに二つのこのかみにおはすとか、たけたかやかならずこえ給はず人がらいとおだやかにみうけ侍り、ものがたりすゐほど例の夕げのむしろ開かせ給ふ。我身は久しう有ぬべからんもうしろめたければしば〳〵暇たまはらんといひて出ぬ。み心ぞへの車して歸る、夜八時。

十二日　ぬしのもとよりふみあり。麹町平河町といへるに屋轉りしたまひしのみしらせなり。かつはものがたり度事侍ればまみえられべくやとなり。やがてかへししたゝめておくる、十五日にまからんとて、申す。

十五日　ひる過るほどより契りしやうに半井のうしを平河町にとふ。こたびの家はいとめでたき所なりけり。行てのちしばし有て歸らせ給ふ。何等のみ用にやとゝひ參らするに、いなとよ我がしる大阪の書しにて雜誌をこたび發兌せんとする小説かく人世話し給はれと申しつれば君をこそと物語りおきつるなれ、さるをあやにくに露國太子殿下の急變にて俄に用事出來たりとて今朝しも汽車にて歸阪なしたり、斷りまゐらせんともおもひたれどはや及ばじとおもひてさしおきぬ、百罪ゆるし給てよと詫給ふも心ぐるし。此日はものがたり少しして歸る、日没前成し。

廿七日　前約の小説稿成しをもて桃水ぬしにおもむく。今日は我れ例刻より遲かりしをもて、君既におはしき。種々我爲よかれのものがたりども聞えしらせ給ふ。歸宅し侍んとする時に、今しばし待給へ、君に參らせんとて今料理させおくものゝ侍ればとまめやかにの給ふを、例のあらくもいろひかねて其ままとゞまる。やがて料理は出來ぬ、こは朝せん元山の鶴なりとなり。さる遠方のものと聞くにこと更にめでたし。たふべ終れば君いでや歸り給へよ、あまりくらく成やし侍らんなど聞え給ひて、今日もみ車たまはりぬ。かへりしは七時。

卅日　殘りの原稿郵便して送る。此日は磯河の稽古なり。

卅一日　みの子ぬしの發會三番町の萬源にて催しあれば、おのれは早くより趣く。會主としばしものがたり居るほど師の君もまた來給ひぬ。來會する人卅人斗おはしき、五時といふ頃人々歸る。おのれは七時頃にや有けん家に歸る。

つぐの日　朝まだきにみの子ぬしに文參らす。手ならひども少しして、夫より小石川の師の君昨日いたくつかれ給ひつるやう成しが心にかゝれば、み樣子みんとてとふ。さしたることもおはさゞりき。ひる頃歸る。

二日　あす半井うしへまからんとてふみ參らす。

三日　空少しく曇る。例刻より桃水うしをとふ。君近きほとりの友がり行給ひきとてはしため迎ひして歸り給ふ。此次の趣向ものがたりて君が說をとひ參らすに、思ふふし多殘なくいひ聞せ給ふ。やがて雨少し降初ぬ、暇ごひ參らすれば今しばしなどの給ひて、あやし君來給ふ折には必らず雨天なるも、しかし今日は雨降ぬべきことこそあれ、いつになく今朝三時といふに朝床はなれつるはとの給ひて、いたく笑ひ給ふ。さもや侍らん此後我身まうでん時にはかならず朝寢し給ひてよとざれごといへば、君いとまおもてにして、うけたまはりぬとの給へしはいとおもなかりき。門の戸いづるやがて車ものして歸る。家に入る頃より雨いといたく降る。はやく暇申してよかりきなどかたりかわす。

六日　小石川稽古なり。人々におくれてみの子ぬしと二人手ならひする。歸路くら子ぬし我家へ來給はんとあるにいなみかねてともなふ。夜八時頃歸り給ふ。頼まれたる針仕事遲くまでする。

七日　よべの殘りの仕事ども早くよりして十時頃出來る。それより机にむかふ。

八日　今日は灸治に行ばやの心ぐみ成しも空もやう少しあやしければやめにす。午後より晴る。夜十二時床に入る。

九日　快晴。今日は濠河の月次會なれば、早朝より支度などせばやとて、四時頃起出づ、十時頃至る、來會者廿人斗、散會は五時頃成き、おのれは少し殘りて名古屋の禮子ぬしに送るべき各評の名先などしたゝめて、歸宅せしは既に日暮て後成し。今日の床かざりは水府立原某が畫きたる竹に鶴の掛ものに古さつまの花瓶に夏菊と姫百合の投入も優にやさしかりき。小笠原家よりマキノーリヤとやらん名はこちたけれどうるはしき花送られたり、もと我國のものならねば趣はことなりたるものから中々に見所多かり、葉はゆづり葉に似てそれよりはうらの色薄く、花はふやうに類したれど中のしべことなれり、名殘なくひらけばさし渡し六寸位にはなれりとか、名のうるはしからぬ爲歟によまれぬこそくちをしけれ、此花のみならずかゝる類ひいと多かり。

十日　朝より空くもる。みの子ぬしとゝもに今日は圖書館に書物みに行んの約成しかば、序をもて灸治にも行かばやとて、ひるより家を出て、下谷に行く。二時頃よりみの子ぬしと共に圖書館に行く。六時歸宅す。

一日師の君のもとに小集有り時坐中の男女の年齡比べせんといふ人あり、夫をかしからんとて師もの給ふ、男は六人にて女は十四人有り、負くべきにはあらずとおもへば、文雅堂のあるじ伊豆田一渡りみ渡して數をとる、鈴木重韻うしは七十八との給ふ、これ斗にても女子の方の四人振は有るよとて一同笑ふ。梅村のりをぬし七十、加藤安彥うし七十二、はや二百の數をこえたり、江ざし恒久君七十、木村正鑒君少し下りて四十九、水野忠敬子四十、合て三百七十九との給ふ、女の方は師の君四十八、伊東延子

ぬし五十九、みの子ぬし三十五、とよ子ぬしも同じく、かとり子ぬし四十七、小川ぬし四十五、これら少しは數のうちながら、殘るはいづれも〳〵口をしきまでに若し、高田不二子ぬし廿三、前島きく子ぬし廿、田邊靜子ぬしもおなじく、伊東の夏子ぬしも同じくといへば、師の君雷同し給ふにはあらずやとの給ふ、小笠原のつや子ぬし十六、廣子ぬし十九、中む田恒子ぬしの十三などいふこと更に口をし、おのれは廿といへば師の君あまりの掛直なり、まけじだましひかと笑ひ給ふ、誠のことなるものからいつまでも若き樣に思ひ給ふもをかし、かぞふれば四百十九なり、あなうれしや四十斗のかちにこそとみなみなどよむほどに、小出粲ぬし來給ひぬ、すはや味方の一人ふえたるよとて男方又色めいてみゆ、君はいくつ〳〵とせめとへば、おもむろに戸籍改めにや拙者は當年六十歳との給ふ、まことにはおはすべけれど空言にやと斗にくし、決をとればこなた廿のまけに成ぬるぞ限りなくうらめしきや。

十一日　今日も空曇る、入梅なりといへればさもや有べし。今日の新聞上に小舟町二丁目石崎廻漕店所有汽船石崎丸小樽より東京へ向て出帆し、四日の夜なるべし銚子の沖合に差かゝる折しも如何になしけん脆くも沈沒を爲て乘組五十餘名殘りなく溺死したりとか、同五日の朝銚子の濱邊に一片の救命標流れつきたりしより漸く人の知る所と成しに、やがて隨時に屍體小荷物など漂着したりき、さても何故にかかゝる難破船の有し事と、豎臺局は申に及ばずしるべ絶えてあらざりしやといふに、救命の汽笛の燈臺局に達ざりしをみれば海邊を去ること三里以上の沖合にて沈沒は爲したるなるべしと也、大方は犬吠岬の西南長崎浦の前面邊りなるべしや、このあたり暗礁多き所なれば也、誠や當夜は東風つよく吹あれ

波浪高くことに濃霧さへ海面を閉たる夜也とか、とにも角にも涙ぐまるゝ物がたりにこそ。

十三日　今日は小石川稽古也。朝七時頃より行。師は今しも起出給ひし所也き。みの子君より乙骨まき子君の手紙を受る。石田農商務次官の紹介を以て大島みどり君入門す。伊東夏子君より依田學海君著作の十津川の物語少し聞く、人々の歸り給ひし後例の通りみの子君と二人習字をなす。歸宅の時師の君より四つ入單物一反賜はる。

十四日　雨天。今日はみの子君と共に圖書館へ行約束成しも、さはり有て行難ければはがきにて其旨を斷る。國子關場君へ行て書物ども少し借てくる。うちに學海居士の十津川もありき。昨日風説を聞てひそかに欽慕したりしに不斗見る時をうるもいとうれし。

十五日　まさ子君への返事出す。午後より秀太郎來る。今日も終日雨天成りし、半井君を訪はんの心組成しも俄に心病ましければやめにす。

十六日　朝より雨天。早朝三田の兄君より書狀來る。午後秀太郎遊びに來る。日沒後半井うしより書狀來る。物語り度ことあり明日か明後日來よと也。例の小説の事なるべしとおもふに胸つぶ〳〵と鳴こちす、何となく心にかゝりて夜一夜いもねず、夜もすがら大雨成し。

十七日　朝まだきはまだよ半の餘波の雨雲立おほひて晴ぬべきけしきもさらにみえざりしを、ひるつ方より少し雲の絶まある樣に成ぬ。いでや今日こそ半井うしをばとはめとて俄に支度どもして午後二時といふ頃より出なんとするはしに、奥田の老人來るさらば諸共にとて出ぬ。奥田の媼とは眞砂町にて別れ

たり。かなたの家近く行ほど、こゝかしこ軒提灯ひまなくかけつらねたるは今日なん日枝の祭禮なるべし、おぞや心もつかでとおもひぬ。やがて例のおとなへばはしため出來ぬ、導かるゝまゝ例の座敷にまう昇りて、御歸りはいまだにやととひつるに、少しいぶかしげの面持して君は今日は郵便は給はせざりしにやといふ、いなとよ妾よりは參らせず昨日うしよりみ消息有て今日あたりこよとの御仰成しかば成とこたふれば、さらばやがて歸り給はん今朝家を出給ふ時今日は會議の有べければ歸りは例より遲からんなど仰給ひしかばといふに、さらば今しばし置給てよ、さても歸らせ給はざれば又こそ參らめなど物語るはしにかう子君歸り來給ひぬ。まさなごといひかはすはしに五時も過たり、いよ〳〵歸らせ給はぬにやあらんさらば日の暮ざらんほどに暇申さめと思ふ折しも、例の夕げのあるじまうけし給ひぬ、いなみ申さんもさすがにてしばし物して終りしほどに師は歸り給ひぬもの語りどもいと多かり。小宮山ぬしの深き御慮例のうしの情深きなどかたじけなしともかたじけなし。されど筆にまかしてかいしるさんもかつは我身づからやましきこともあり、よく爲し得べき事にあらぬか、今しも思ひわきがたければこはおのづからあらでのちに昔し語にもならばいとうれしけれと今はもらしつ。暇乞申して出る頃日はやうやう西にかたぶく頃成し。今日は道かへて湟端を歸る。夕風少し冷かに吹てみほりの水の面て薄暗く、枝さしたるゝ松の姿伏したるも起たるもさま〳〵にいづれ千とせのこもらぬもなく、老てます〳〵さかんなりなどいふはかゝるをやなどおもはる、み返れば西の山のはに日はいりて赤き雲の色のはたてなどいふにや細く棚引たるも哀なり。行かふ人の無きにはあらねど市路ならねばいとさう〳〵し。堤の

柳の絲長くたれてなびくは人もかく世の風にしたがへとにやいとうとまし。引かへて松のひゞきのたうたうとなるは高きいさぎよき操のしるべ覺えて沈みし心も引起すべくなん。秋の夕暮ならねど思ふことある身にはみる物聞くものはらわたを斷ぬはなく、ともすれば身をさへあらぬさまにもなさまほしけれど、親はらからなどの上を思ひぬれば我が身一つにてはあらざりけりと思ひもかへしつべし。あゆむともなしにいつか九段の坂上には成ぬ。こゝよりはいとにぎはゝしく馬車など音絶えずはせ行ばあしもとなどもあぶなげなり、猶おもひつゞけてうつむき勝にくる樣のいかにあやしかりけん、道行人のおもてさしのぞく樣にするもいとつゝましく、人わろければさしもみえじと思へど猶おのづから色にもる成べし。家に歸りたるはくらくなりて成けり。

十八日　朝より晴なり。めづらかにと嬉しく、人より茄子苗の若やかなるを貰ひて母君植る。

十九日　今日も晴なり。朝とく庭前の梅の實をおとすみそこしといふ笊に一ツありたり。あやしう蟲ばみたるなどもあれば正味は夫より少なかるべし、こは先の日こゝの家差配の大方おとしてもてゆきたる後なればにや、殘らずにては二升の餘なるべしなどいふ。ひろ過るほどより、今日も圖書館へ行く。先の日の約も有ればみの子君を誘ひつるに君待つけて共にとの給ふ。六時頃までみてかへる。

廿日　朝戸明てみれば空名殘なく曇りて今にも雨降ぬべき氣色なり。あなうしや今日は稽古日なるを打うめかれぬ、と斗有て雨こぼれ來ぬ。家を出る頃にはます〳〵降にふる。さればにや來給ふ人も少なかりける。師の君は昨日よりあやしく心常ならずおはすとかや、例の過度に腦をつかひ給ひし故なる

べし、さは今日は靜かにやすませたまはんこそよけれとて、人々をばみの子ぬしとおのれとにてあづかり申て稽古などす。ひる頃よりひのかげやうやくみえ初めて歸路はいとよく雨晴ぬ。今日しも始めて川越の中島ぬしが嫁の君に逢まゐらせたり、動物詠史といふあやしき詞聞たるもをかしかりき。結髮の歴史めきたるもの語も有たり。近き頃の

いてふ髷わりからこ　ちご髷
かつらひたぢ　今まれにはゆふ人あり
島田くずしかたはづし　茶せん
このうちにて今もゆふ髷もありされど大方今は
いてふがへし　こは大人となくこどもとなくゆふむすびがみといへるものなるべし。儀式の折などゆはぬかみ也。
たう人髷　こは十年より十四五までゆふ也。されどまれ〳〵は十九廿位にてゆふ人もあれどみな貴嬢のみなり。
高島田　これは此頃のはやりにぞあめる。十六七より廿四五まで島田といへば大方これ也。唄女の樣なるものさへこの頃はこれのみなり。
桃わりいてふ　品のよき髷にて一時いたく流行して都の中の女といふをんないはぬはなかりしをしばらくにしてすたれたり。
ばちがたしま田　唄女などの者からぬがゆふなり。素人にても少し年寄はゆふ、總て品は宜しからず、意氣といふ方にやあらん、三十年の唄女いはゆる姉さんと云ふ樣は大方是れなり。
お初丸髷　島田より丸髷にうつる時にはこの髷によく似合へり。人の好みながら赤き切れかけたるも可愛氣なり。
束髮は前がみを切て眉の上まで下げたる童などのまだ長からぬ髮を赤き切してゆひ下げたるこそこ

よなくうつくしけれ。

廿一日　終日ふる。其夜十一時頃大雷、跡にて聞ば淺草久右衞門町へ落たるとかや。

廿二日　晴。午後より師の君の御樣子見んとて小石川へ行、師と共に中村君の家見に行。明日君は歸京し給ふなりとか。今日は國子のたん生日なり、いさゝかいはひなどす。

廿三日　晴。早朝より灸治に行、圖書館へ行、辨當などして行て午後二時歸る。西村君來給へり。

究竟は理卽にひとしとぞきく、入りなんとする昔の迷と覺めはてぬる後の悟とそれ大方は似たるべし。此わか葉かげそも迷夢のはじめか悟道のしをりか、かれ木の後に見る人あらばとて、

なほしげれくらくなるとも一木立

わか草

（二十四年七月―八月）

山家如春

冬籠る山した庵は大方のよのはるよりものどけかりけり

雪中待友

契りてはおかぬものから初ゆきのふる日は友のまたれぬる哉

草瀬宵

冬がれしこぞのふる葉の中よりもやゝ青みたる垣の若草

歸雁入雲

のどかなるとこよの春に歸るらん雲路に消る天つ雁がね

月にのみかゝるとおもひしうき雲にかげかくれ行春の雁がね

花間蝶

うらやまし春の小蝶はねぶるまも花の木かげをはなれざりけり

夢とのみ消るをみてもたのしきはうきたる舟の花火成けり

西宮と云内親王對面の時に總角の者は着す半臂汗衫、下襲、表袴、玉之帶等を、

うらやまし世の風しらぬ谷かげにちよをしめたる松も有けり

夕がほのみになるをのみまつやどのかきねにをしき花の色かな

つのくにのこや何といふ花ならんながむる軒の日ごとしげるは

七月十七日　みの子ぬしが月次會なり、ひろ少し前より家をば出づ。道しるべにとて母君も出立給ひぬ、高等中學の横手の坂下るほど雨少し降來ぬ。空は薄墨の樣なるくもやう〳〵立重なりてやがて夕立しぬべしなど道行人もいひぬ、眞下まき子の墓谷中なれば母君と共に墓もうでする程、空いよいよくらく成て雨いよ〳〵降にふる、こゝにて母君に別れ參らせ、みの子ぬしの家は直其むかひの道なればやがて行ぬ、集會者は十人斗成し。

七月廿日　今日は土用の入とぞいふ、土用三郎とかや、この三日のほどの天氣は作物にいとよいたくかる所ありとて、人々空をあふぎて思ひわづらふに、朝よりかきくらし打くもりてひる過るころより少わしこぼれ來ぬ、さし當りては何ごとも覺えねどことわざいとわづらはしうこそ、そのけにや今日は風ひかやゝかにしていと暮しよし。

廿一日　朝より雨降る。晝少し過より稻葉君參る、いよ〳〵落はふれにしかば車引かばやと物語ら

る、かなしきことといと多かり、五時頃歸る、其夜地震す、五分間斗にて止む、夜に入ては雨いよ〳〵降る、此夜新聞號外來る、蜂須賀君貴族院議員に成り富田鐵之助君府知事と成る。

廿二日　朝來雨天。今日の新聞に下田歌子君加納君のもとへ輿入せられたる事あり。午後一時師の君のものより端書來る、縫物の依頼なりければ直に行く、單物を持來る、夕刻まで縫物をなす、暮てより國子ともに買物に通りまで趣く、今宵はびしやもんの縁日成しかば雜沓いと夥し、女郎花朝顔などの植木もいと多くみえたり、歸宅後雨やゝ降增る、久保木より魚少し貰ふ、今日釣に行たるものなりけり。

廿三日　朝より空晴て日のかげいと暑し。午前の内に裕衣一枚縫終りぬ、午後より上野伯父君參らる、晝飯を出す、種々の物語りあり、四時過に歸宅せらる。夜に入りて野々宮君、吉田君參らる。野々宮君は試驗休みなるよし、十一時歸宅せらる、今宵は夜業なしにて終る。

廿四日　晴天。午前にかいまきの綿入をなす。午後より西村君、菊地のお政君參らる、西村君は三時、奥方は四時ごろ歸宅せらる、菓子折をもろふ。日沒針仕事終る。此夜一時に床へ入る。

廿五日　晴天。今日は礫川稽古なり、よべ仕上たる縫ものに火のしなどして出たつ、田町より車を取てゆく、今日は少し遲刻なりけん、最早五人斗來給ひたり、ひる頃みな〳〵歸宅せらる、二人三人のこりて今一題よみかはす、三時頃歸宅す。頭いといたくてせんかたもなく苦しければ今宵は十時に床へ入ぬ、夢におそはれておびえなどす、かしらのあしければなめり。

廿六日　不忍の蓮、入谷の朝顔、此頃花盛りといふ。

廿八日　晝は晴、夜に入てより雷雨いとおびたゞしく、十一時頃には屋の上打貫樣にふる、更てや止けん。

廿九日　空名殘なく晴渡りて、少し風さへ吹そはりつ、いと暮しよき日なり、晝後母君神田へ行給ふ。其頃より又空曇り來て大粒なる雨降來ぬ、歸らせ給ふ頃には又晴ぬ、夜十時頃より雷雨おびたゞしくす。

卅日　今日の新聞によれば一昨夜横濱の大雷雨成しといふ、東京のみにはあらざりしなり、地方出水の模樣あり、おどろ〳〵しきことゝやいとおぼつかなし。今日は春木座の棟上式なり、午後より先生裕衣縫ふ、夕がた大方出來上る、三枝信君來る、母君例の土産物をくるゝ。夜に入て又雨降る。

卅一日　晴天。裕衣縫上る。午後より書もの、明日小石川稽古なれば此夜一時まで起居る。

八月一日　晴天。朝六時半に宅を出て小石川に行、未だ誰も來たらざりし、師君としばし物語りして菓子など給はる、此次の仕立物頼まる、友達の君は八時頃に揃ふ、大方は避暑に趣き給ひつれば來集者も多からず、十人斗成き、題二ツ、午後二時頃諸君歸る、後にて又しばしもの語りして三時頃かへる。前島君より小説本十二册借る。(むら竹及涙香の小説)、此日佐々木君代岡村來り、師君に貸置たる吸入器の催促成けり、所在不分明にていたく當惑し給ひけり、きね女暇を乞ひて郷里へ歸るといふ、去れども師君はさまで不自由を憂ひ給ふ樣子なし、吾宅へ歸りしは三時過成し。例の小説氣違ひとて此夜十時ま

で取付限りにて十册計讀みぬ、しれたる樂成や、國子今日關場敬に反物を賣ふ、幾度となく取出しては打眺めたるは嬉しさになめり、此夜山下次郎來る、直一君大病のよし、夜具仕立賣度とて成けり。

二日　晴天。母君山下の見舞に行給ふ、九時頃稻葉君來る、午後山下信忠君參らる直一君病氣に付母君に相談にてもあるやと思はれたれど留守なればしば〳〵依賴して歸らる。母君は四時頃歸宅さる。

三日　晴天。稻葉君參らる。姉君來る。母君岩佐へ參らる。午後母君近邊の子供に物をやる大悦びの事、國子當時蟬表職中一の手利に成たりと風說あり、今宵は例より酒甘しとて母君大いに醉給ひぬ。國子と兩人湯島へ買ものに參る、山加に切を買ひ、中島屋に紙を求め、かね安にて小間ものをとゝのふ、日暮てかへる。

四日　早朝稻葉君押かける、正朔君を伴ひ來たりて預りくれよといふ、されば今日一日はとてあづかる。午後母君山下氏の見舞に參らる。朝小雨ふる、やがて晴天。

五日　稻葉君來る、正朔を今夕迄預りくれ度しとて依賴す。午後江崎牧子君より郵書來る。國子と共に安達君へ暑中見舞に行腦病の物語りをなしたるに、伯父君はくれ〳〵讀書作文等をなさゞる樣にと物語らる、腦は神經の集合する所なれば患はこゝに止まらで餘病を引出すこともあり、又は充血して不測の禍を生ずることも有るべければ、小患の中によく養へよとて自身をたとへに引て諫められ、承はりて歸へる、夕飯したゝめゆけなどいひつれど、しのばずの蓮見ばやとて早々歸る、しのばずの記は別にしす、歸路は池の端をめぐりて大學を通抜てかへる、五時過成し。此夜稻葉氏又來たる、明朝まで正朔置

賣度よしいふ。

六日　晴天。早朝より運動にとて近邊を散歩す、歸りて我の廻りを掃除す。

七日　晝晴、夜に入而より雷雨す、土用明といふ、この夜徹夜。

八日　早朝師君より手紙來る、一兩日は暇かたるにて腹痛たえがたければ今日一會休むべきよし成けり、依賴の裕衣も出來上りたるをもて直ちに見舞に行く、さしてのことにもあらずといふ、又綿入を仕立くれよとて一枚たのまる、歸宅せしは九時頃成しかば、これより圖書館へゆかばやとて出づ、空は一點の雲なくて憂樣なる太陽の光り烟かとみゆる大路の砂ほこりなど暑しともあつし、大學を拔て池の端へ出づ、茅町のほとりより蓮の清き香遠くかをりて心地もすが〳〵しく成ぬ、ひろごりたるはにくしと清少納言がいひけん夏の柳岸になびくかげもすゞしく、まして水の面みえぬ斗咲みちたる紅白の蓮明渡る風に葉うらのかへりてみゆるもをかし、蓮根取の舟つなぎたるこれのみはあらずもがなとおもふ、競馬の埒結びたるいとみにくゝあいなかりしが、ふるびて所々こはれなどしぬれば少し氣色なほりし樣におもふもひが心にや、東照宮の石の段のぼる程さと吹おろすかぜに杉の下露のこぼるゝも涼し、こゝのみはさらに夏と覺えぬよ。圖書館は例のいと狹き所へをし入らるゝなればさこそ暑さもたえがたからめとおもひしに、軒高く窓大きなればにや吹かよふかぜそゞろ寒きまでなるいと嬉し、いつ來たりてみるにも男子はいと多かれど、女子の閲覽する人大方一人もあらざるこそあやしけれ、それもそれ多くの男子の中に交りて書名をかき號をしらべなどしても行にたれば、違ひぬ。今一度書直しこよといわるれば、

おもて暑く成て身もふるへつべし、まして面みられさゝやかれなどせば心も消る樣に成て、しとゞ汗にをしひたされて文取しらぶる心もなく成ぬべし、今は代言試驗も近付し頃成とかにて法律書取しらぶる人いと多かりき、思ふまゝのふみ借得てよむとよむ程に長き日もはや夕暮に成ぬるべし、園の梢に日ぐらし聲高うなきて、入合のかねかすかにひゞき、窓にさし入る夕日のかげ少し薄く成ぬ。おどろかされて室を出れば大方人も歸りにけり、書をかへして門を出ればからすの打むれてねぐらへかへるかげさへみえ初ぬ、母君の今日は早くかへりぬ、よべよすがらねむらざりしに身もつかれなばかひなからんとてかへす〳〵仰られしを忘れしならねど、いと〳〵おくれにけり、いざや近道をとりて谷中より歸らんとてくる、西日やう〳〵かげろひて紅の色を斗殘してあすも晴よとうなひ子がうたふ聲も道いそぐ身にはあわたゞしく聞えぬ、床机といふもの表へならべてあらひたる裕衣ののりこわげなるをきて團扇もてむねのあたりあふぎみるは、今行水とりたるなるべし、十斗の女の子がしろいもの所まだらにつけて、三つ斗の子の汗ぼなど出來たるにやかしら斗いとしろくしたるをせをひありくもをかし、片町といふ所の八百屋に新芋のあかきがみえしかば土産にせんとて少しかふ、道をいそげばしとゞ汗に成て目にも口にもながれいるをはんけちもてをしぬぐひぬぐひして、はては少しいたくさへ成ぬ、日は薄くらく成たれど人のみるらんわづらはしくて傘はなほかざしたり、空橋のした過る程、若き男の書生などにやあらん打むれてをばしまに依かかりてみおろし居りたり、何事にかあらんひそやかにいひて笑ひなどす、しらずがほして猶いそぎにいそげばひとしく手を打ならしてこちむき給へなどいふ、何の心にていふにや書のかたは

しをもよむ人のしわざかとおもへばあやしくも成ぬ。家に歸れば母君は外に出て待給へり、妹は夕げのもうけいそがわしくし居たり、只今まかり歸りぬなどいふはしに、いざ帶とけよ、衣ぬげよ、あつかりし成べし、つかれつらめ、湯もわきてあればあびてこよと、殘る方なくの給はするに、かたじけなくもうれしくも覺えて、汗の麻衣ぬぎ捨てゆあみて上れればあらひ衣の白きを出して、留守のまにこれあらひて置きぬ、着かへよとの給ふ、妹は姉君み給へ、君が好ませ給ふものにておき侍りさつまゐりもこしらへ置ぬ、夕げいざとてすゝめらるゝに、すきたるはらの長き道を廻きぬればいとゞしくうゑたるにはいづれも美味ならぬはなくて打くつろぎてたふべ終りぬ。

九日　江崎牧子君へ返事を出す、甲府伊庭氏並に北川秀子君へはがきを出す、國の帶を一本仕立、畫後植木屋用聞に參る、依て建仁寺垣結べき樣申付く、明日より參るべくとてかへる。洋傘二本張換へさす、一ッは甲斐絹二重張、一ッは毛繻子の平常持也、双方にて一圓十錢といふ。

十日　早朝より植木屋參る。

筆すさび

（二十四年七月—九月）

日日にみる所聞ところ思ことさま〴〵にこそあれ、行雲のごと流るゝ水のごと過ぎはてなん年月ののち立歸りてむかしをしのぶくさばへにもと、筆の行まゝ心の赴くまゝ富士の烟のぼりたる際のことこそしらね、ふもとのちりのはかなごとをそゞろにかいしるし置なり。

春はあけぼのといふものから夕べも猶なつかしからぬかは、日ねもす遊びし花の木かげやう〳〵くらく成ほど、かねのねかすかにひゞきてねぐらにかへるからすのこゑなどものどかに聞えて、

大治二年崇德の帝の御時殿上御修法どもする夜居の僧阿闍利の衣など盜人ありてはぎたりとか、折柄朝家の衰へしさましるくこそ。

鴨長明が四季物語七月の部にいへることあり、月情の愚なる鷄牛犬馬よりおとれるなり、日夜世話につかはれて惑のうちに醉をなし、醉のうちに死をなす、約せしが如く、誰も〳〵やがて靈と成べきを、

我も人を祭り又祭らるゝ道理をしらずといへり。

世の人耐しのぶといふことこそ萬の寶にもましてめでたけれ。またをりくゞりけんかん信履をさゝげし張子房などを始めとして猶其ためし多かるべし。心におもはぬにはあらねど身におこなふことの難きはいかなるにか。夏のよは更也多も猶ともし火のもとにふみどもまなぶほどねぶたさのいとたへがたければ、氷の樣なる水かしらよりあびてしばしまぎらはすほどやがてこそあれ、身うち少しあたゝまり手足の常にかへる頃にははやいつか文の上にうつぶし居るこそあやしけれ。母なる人にこやなど呼さまされて始めて夢覺ぬるもはづかし。いでやこたびこそはとひたすらに念じて、ふたゝびふみ取あげて一ひら二ひらは少しおぼえあれど、夫より後は又同じ樣也。いふかひなく口をしくて父母の遺體とてひちりはの給ふものから、もろこしにも其ためし有事よ、いかにしてかこのねぶさ覺してんと我もゝのあたりに錐の先少し突たてつれば、其いたさはいとたへがたし。それも又しばしにてこゝろのこゝにあらねばにや、眼はみひらきながらよむ文はふとも覺えぬぞ心ゆかね。父君などのおはせし時昔し語りを聞けば子に伏し寅に起るとかや、いにしへの二時今の四時間いぬればよきもの也といへるを、我計かくねむきはいかなる故ぞも、こは病のなすわざにやともおもへり、おのれ十四計のとしまでは病ひといふもの更に覺えず、親もはらからもみな腦の病ひにくるしむなるを我は一人かしらいたきなどいふことふつになく、さればにやいときなきより物學びなど人よりはならひとること早くて忘るゝこと少なしなど、其

頭の師もの給へりし、みづからが心にも一たび學びたることいかに年月ふとも忘るゝてふこと有べきならずと常におもへりしほどに、やゝ大人び行まゝにこゝにかしこに病ひ出來て、こと更にかしらいたみ肩などのいたくはれなどすれば物覺ゆる力とみにうせて、耐しのぶなどいふは更に出來うべくもあらず、昨日聞たるを今日忘るゝ夫はまだよし朝聞たるは夕に忘れ今學びたるを今のまに忘れぬ、かく成行てはて〳〵はいかにかならんとすらんとおもふに、今より心細き事こそ限りなけれ、さはれ猶命の有なんほどは耐へもしのびもして學ばゞやとおもふもみのほどしらぬえせごゝろなるべし。

所替れば品かはるとやら人情風俗の異なること雖波と伊勢の遠からぬさへあるを、ましてこれは左もこそあれと思ふもの語りを聞たるまゝかいしるす也。

倫敦人と巴里人との相違せること

巴里人は街道を行時右に倚り、倫敦の人は左による、巴里の人は兵營の樣に廣く大なる家に數家の人すめり、倫敦にては尋常なる家に一家族すめり、巴里にては集會をするに珈琲店にて催し、ろんどんにては倶樂部に會合す、巴里の人は寢室屋壁の上部にあり、倫敦人は室の中央に寢床を設く、巴里人は一日二食に過ざれど、倫敦人は三度四度の食事をすとか、巴里の麵包は其形長く、倫敦のは四角也、巴里人は珈琲をのみ、倫敦人は茶をたしむ、巴里人は食事の間に頻に話をなすとかいへど、倫敦にてはさることなし、巴里の職人は其友を呼ぶに君如何とよび、倫敦のは傍輩どうだといふ也とか、或人のものがたられしなり。

水戸の人は大方酒をたしむ人多き樣也。我師の背の君林忠左衞門君などのことを聞に、常に夕げの折に三ますづゝをものし給ふとかや、それはまだことにもあらず、友など有ての時には一斗をも辭し給はずとなん、ある時山岡鐵太郎ぬしと共に一斗の酒ものし給ひて後、高足駄にて箱根の山こし給ひしこともありきとぞ、さはれ猶醉給ふことは無きにや、師の君は遂にさる顔し給ひしを見ずに終りしとかたり給へりし

馬琴が模稜案にいはく、暗き所には神明これを鑑み明き所には王道これを正す。

上田秋成がつゞら草子に西行法師をかけるうちに、鎌倉の右府仰たまふ、汝が遠つおやの秀郷といひしは世にいみじき弓の上手となん聞ゆる、傳へたることも有べし、かくこそと覺ししみぬることは忘れずこそ有らめ、事一ことにても教へ承るべく、こはます〳〵おそれある御とはせなり、御物語のはてはてはつはものゝ道しばしも怠らせ給はぬみ心より、野山を住家のやせ法師にだにものとはせ給ふことのかたじけなさよ、むかひ奉りてはをこがましく家の傳へなりなどとて聞えや奉るべき、まして有難き大宮仕へをいなみたてまつり、みおやたちのいつくしみをさへあだなるものにとしわづかに廿五にして家を出たるいたづらものゝ弦引一つだに心にとゞめしことも侍らず、たゞ一言の忘れがたきは賞を重くし罰を輕くせよといひしも、任ずるものをはづかしむればあやふしといひし有難さよ、士卒の疵を病めるを吮ひしは人の心をよく買なすといへども、誠の情よりとも覺え侍らず、かまどを減じて人をあやふきにおとしいるゝは將帥のさかしきにて、國を治め天下をしるべき君の御心にあらず、軍を出し給

へることのあやしきまでかしこくませるをよそながら見聞奉るには此方の御とひゆるさせ給へとて額を板じきにすりつけて申すしか〳〵。西行後にこの事を人にかたりていふ、右府は誠にねぢけたる君なり、口に蜜し給へど心には針のおはするぞ、漢高の大度曹孟德の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中にいれられたるは我佛の冥福といふことを生れえさせ給ひけん、只悲しむべきは神の御末の此後やう〳〵をとろえさせ給はん世の姿なるはとて、涙とゞめがたくしてもの語りしとなん。

馬牽が青砥模稜案の内牛裁判の批にいへらく、美女の細腰白刃を藏む房中此を以て轉た爲仇、奸夫の胸脇爪牙鋭し、暗裏人食ふこと如虎彪、兄弟垣に鬩ぐ腰越狀、貝公指を拾ふ玉龍の湫、驚くことなかれ窮達塞翁が馬、世間斯の如き有牽牛。

同じく模稜案

牝鷄晨すれば其家安からず、招嫁の鹽梅婦人に成る、親を棄て他を養ふは皆其聘物の多きが爲なり、一ト度名を權るゝ時は勢ひ禁ずべからず、鏡岱霞惡遺書を請ふ時老醫も治し難し、一家の難み獨庵滑稽句讀妙也、潤平いかでしるべき上梁の詞、南人の佳瑞とする所北俗は不吉とす、飛土太婆々を賊して婆娑榮園を暴す、李下に冠を正さゞるは必賢者、瓜田に沓を入るゝも偸兒にあらず、禍の倚る所は禍の始、禍の伏する所は福の基、足をしらざれば禍を招く、得まく欲すれば咎を致す、意馬を卻て心術に糞し、痴牛を牽て桃林に隱れよ、一人寡欲なれば一國羞を知らん、さはれ齊東野人の言、

和にあらず漢に非す、綴れども語をなさず、詩にあらず歌にあらず韻を嗣ぐによしなし。

夢は一事を以てその虚實をおすべからず、これを史傳に考ふれば神日本磐余彦神武天皇は夢に天照皇大神武甕雷神と謀りて劍を下し給ふと見て丹敷戸畔者を誅し給ひ、活目入彦五十狹茅尊則垂仁天皇は御諸の山の峯に昇りて四方に繩を絙粟食雀を逐と夢みて帝嗣に定らる、殷の武丁は夢に依りて賢臣傅說を擧用ひ、周の文王は夢に依りて九十九の齡を知れり、この餘詩書禮經に載する所枚擧に遑あらず。

二夫川の善吉夜仇をさけて山中の廟に隱るゝくだり、破簷月を引て燈明に換ゆべく驢魚雨に朽て梟を栖まするによろし、風は木の葉を誘て囊錢を散らす如く、狐踪蹟を印して落花を畫くに似たり、神祠ありといへども敬せざれば威をますによしなく、旅店なしといへども憩はざれば疲れを補ふにたらず、物おもふ身のいとゞしく仰げば月も傾きて丑三はとはや過たり、且くこゝに明さんとて古廢の中に進み入り、大山祇の冥助を祈りて厄難消除と念ずるに、秋の夜なればいと長くて曉る樣にてまだ明けず一夜を千世とまつの風山河の音凄まじく岩堰く水と我胸と碎けて落る涙には片しく袖をしぼりあへず、思ひつかれて身を倚る壁にもたれてぬるともしらず憂時はまどろみたる夢に。

佛國の探偵秘傳に、分り難き犯罪の底には必ず女あり。

よみ人しらず

あらはれは
なとり川瀨々のうもれ木あらはれはいかにせんかと逢ひみ初けん
うち橋の中絶

わすらるゝ身をうぢはしの中絶て人もかよはぬとしぞへにける

賴氏日本外史引用書　二百五十八種

天地萬物逆旅　光陰者百代の過客。

謂濱の波面にたゝみ商山の月眉にたる。

干將の刃も持人から。

留春　春不駐、春歸寂寞、獸風風不定、風起花簫索、

閉閣　只聞朝暮鼓、上樓　空覽往來舟、

落葉賦

霜白樹頂老、雨晴山影醉、

紅授褒賞下賜　　明治二十四年七月廿日　賞勳局にて下賜せらる

島根縣石見國邑樂郡日貫村大津千代太妻　山本しげ

明治廿四年六月十二日本村室田種平家宅失火の節同人妻咲の焔烟中に陷り死に瀕するを認め自己の危難を顧みず婦女子の身を以て猛火の間に冒進し爲に體重傷を被むるも屈せず遂に之を救濟す其義勇洵に奇特とす依て明治廿年七月勅定の紅授褒賞を賜ひて善行を表彰す

露國皇太子殿下大津に　逢難事件費　二萬四千四百十二圓三十五錢四厘

十八史略　拔書

肅宗明皇帝、名は紹、幼にして聰慧なり、一日父帝問て曰く長安近きか日近きか、紹曰く長安近し、但使者長安より來るを聞く日遠より來たるを聞かず、帝其對を奇とす、其後群臣と談之に及ぶ、又問ふ、答て曰く日近し、帝愕然として何ぞ前日と異なると、曰く頭を擧れば日を見る、長安を見ず、帝益〻これを奇とす。

後趙の石勒自ら韓信彭越に比す。

うたておなじ師の君に學びておなじ樣にとし月を重ぬるものから、人は追風に帆上げたる舟覺えていとゞ進みにすゝむを、しれものは只坂にくるしむ車のやうにてともすれば下りがちなるがいと恥かはしきに、手などは生えてふつゝかにして詠草などかきたる我ながらいとあさましければ、かまへて人にみせ參らせぬをあやしう物はぢする人よとて、みの子の君ものつゝみの君とつけて笑ひ給ふに、こと人もいつしかさなんいふ。文月計例のまとゐに夏子の君詠草みばやとの給ふを、例の引かくせしかば、打笑

筆すび

ひてやみ給ひにき、しばし有てたとう紙にかく書つけたまはす、うへにはものつゝみの君へとて、

袖をもてよしおほふともたぐひなき玉の光りはかくれざりけり

いとゞ汗あゆるこゝちして物も覚えねど、

あらはれん光りなりせばこと更に狭き袖には何つゝむべき

中々恨めしきまでなる御言葉哉、今はゆるさへ給へと泣ぬ計にいふほど、又みの子の君、

女郎花などこと方にそむくらんおなじまがきのうちに咲るを

かへし参らせん言葉もしらねど、

咲まじる花のにほひのまばゆさにそむく心を哀とぞみよ

猶ゆるさへ給へといへば、人々いとゞ打笑ひ給ふ。

一日例のまとゐに風前薄といふ題給はりぬ、おのれかくなむ、

野邊みれば薄の外の色もなし千草の花は風にかくれて

師の君披講の折の給ふ、此題生死に關する文字一つあり、猶考へみよとの給ふ、あまたゝびみもてゆけどえみしるべくもあらず、さての給ふ、結句しかれてとはなといはぬ、かくいはゞいとめで度かるべきをとなん。

のべみれば薄の外の色もなし千種の花は風にしかれて

其折小がさ原君あらく吹風にはいとゞみだれけりとよみ給ひしに、さては實際に違へりとて證歌あげ

給ふ。

一方になびき揃へてしの薄あらき風にはみだれざりける

となむの給へりし。

家に畠作りていさゝか野菊など植ばやとて母君苗を買給ひしに、胡瓜成りとてとりたるもの生たつまにさまことなりたる様なれば、相知りたる人にとひなどするにこの夕顔成るべしといふにいとうれしくて、いかで花をみばやとたのしみ居たるにやがて咲くをみれば黄なる花成りけり、あやしくて又とふにさはへちまといふもの成るべしといふ、へちまならば水とらんなどおもひまうけてみに成るをまてりしに多瓜といふもの成ければ、おこに成て師の君にかくなんと聞えつるにいでやよはみな其たぐひぞかし。

我と思ふ子は蒿に成り、鼓と思ふ人は鶯と成るらん世のならひ成けり、これに依てかれを思へば得る所また少なからじとの給へりし、達人のの給ふことは何事にもかならず說有けり。

ことし春の頃より都わらべのうたふをきけば、かにしてくんねへやせるはへとなんいふ、かくて國會なども開けて歳費節減とかや何とかやいたくかしらいたため給し人もありしとよ。さるを又此秋頃はかくなんうたふ、出來たかへ本當だよ、御飯がにえるかへ本當だよ、南瓜がと、或人はいへり、かならず豐年の兆なるべしと、誠いつはりはしらず聞けるまゝを。

筆すさび

家にある茶の樹にはふ蟲のまゆを作りたるいとめづらかなりとて、妹の取たるをみるに、たゞ絹の綿

もてつゝみたる樣にいとうつくしくゆゝしげにもあらざりけり、こをもて猶製作せばかならず有益のものならめなどいふものから、其道のことしらねばせんなし。

蟬は

あぶら、日ぐらし、つく〳〵法師、朝戸出の袖すゞしく吹風に軒ばの栁の露散て鳴出る日ぐらしの聲いとゞさまし、夕日のかげ消る山のかげにさゝがにのいとかくる軒ばをながめてものおもふ折しも鳴出るはいと淋し、すさまじかりし夕立の雨晴過て雲のあしきるゝやがてあぶらぜみのかしましく鳴はにくし、夏の暮方より秋にかけてをし〳〵と鳴たる、なれも同じ心にとおもふにかなしくもうくもつらうもさまざまにていと哀也、されどいそがしがほなるはいとにくし。

或人大隈重信君の書を得まほしとてこゝかしこに請たれどもいまだ得ることをえずとなんかたる、おのれの師の君は交りも深くものし給ばいさゝかの書はおはしますべしおのれより願ひ參らせんとてうけがひぬ、やがてとてなんいとせちにのぞむ人侍り哀一ひらにまれ得させ給へとこひつるに、師の君もいまだ更にみ參らせたる事あらずとなんの給へりし、いぶかしうてそれより猶こゝかしこ君に親しき人につきてこひ參らすれど何方にも〳〵同じやうなるはいかなるにかいとゞいぶかしうこそ。

葉月廿日の頃例の師の君のもとにて歌よむこと侍りしに、其日雨降ければ新秋雨涼といふ題成けり、

にはの面をみ渡せば櫻の葉の色付てはら〳〵と散るさまふとめにつきて、

ふる雨に櫻の紅葉ぬれながらかつちる色に秋ぞみえけり

といひ侍りしに、師の君の給へり、此眼前の景なるものから猶實にのみよりてはよみ難きものぞかし、打まかせて櫻の紅葉といふべきなるはあらずとて、

そめ出し櫻の下葉ふる雨にかつ散る秋に成にける哉

櫻の直衣　面白裏赤花。
柳は　面白裏青。
紅梅は　面紅裏紫。
青朽葉は　表青丹裏青。
ふたあいは　赤花と青花もてそむる。

筆すさびは　かみを白くしてすそを紫にてもこくそめし也。
まごは　おもてしろくうら青夏の衣也。
卯花は　おもて蘇芳うらもえぎ。
紫苑は

萩は　おもてすはううら青し。
黄朽葉は　七月より九月まで着す。
藤は　おもて紫うら薄紫
山吹は　おもて朽葉うら黄。
朽葉色といへるは青丹の事かなほ考ふべし。

二本紀抜書

無狀あぢきなし、顧眄、可以爲、木の親、句々廼馳、草の親、草の姫又野繼、至貴を尊といひ、これよりあまるを命といひ、並に美擧といふ。

勞褒

花月草紙にいへることあり、何にまれ花さへ實さへはじめよりなんとてはいかで得ん。

天子詔、上皇宣旨、皇太子　令旨、將軍　御教書。

九月はじめの七日計母君淺草なる三枝殿におもむき給ふ、よからぬことゞもかさなりてこゝろざすことはならず、顧はしきことは遠くていとせんなきに家はいやまづしにまづしく、妹は日頃なやましうして

打ふし居るなど、取つゞくるにてこがね少し計からばやとて成けり、ひるすぐるも歸らせ給はず三時なるにかへらせたまはぬはなぞの故ぞ、花につく世のならひなるにかく落はふれてかゝることといひ行たりとて誰かはものかたらひ合せだにやはする、いふかひなさにいづくをか猶もとめ給ふにやなど思ふもいとむねいたし、とあるにつけかゝるにつけ身のいとかひなきなんなげかはしくて、いづらなその身は女といふともはや廿とも成れるを老たる母君一人をだにやしなひがたきなんしれたりや、我身ひとつの故成りせばいかゞいやしきおり立たる業をもしてやしなひ參せばやとおもへど、母君はいといたく名をこのみ給ふ質におはしませば、兒賤業をいとなめば我死すともよし我をやしなはんとならば人めみぐるしからぬ業をせよとなんの給ふ、そもことはりぞかし、我兩方ははやく志をたて給てこの府にのぼり給ひしも名をのぞみ給へば成けめ、さるを兄君うせ父君ゆき、やう〳〵人にはあなづられ世にはかろしめらるなどいかゞ心くるしかるべきことをと思ふもかなしう思ひつゞくる程に、四時といふ頃歸宅し給ひぬ。いかゞ彼方にてはととひ參らすれば兒よよろこべよ世に人鬼はあらずとよ、信三君の仁俠なる、あなことごとしや其れ程のことになどわび給ふ、猶の給へおのれとりかへ參らせんとて心よく卅金かしてくれぬ。伯母君はいといたくやせのみゆるに鰻とらんくひ給へとて其馳走にも成たるよとていとうれしげに涙おしぬぐひ給ふ。人の情のかたじけなきにもいとゞ我がみはづかしうて其方に向て心のうちにはふしをがみぬ。其次の日の事成けり、小柳町なるもち月にて赤子のいたう病むてふを見舞てこんと母君の給ふ、其前の日にも見舞たれど猶いと心細く成しかばとて赴き給ふ、夕ぐれ方かへらせ給て、さて夏よ我

筆すびさ

みはいとあしきことして來にけり、なにしからられぬべく思ふぞよとの給ふ、何事にかおはします、身にはゞかりは侍らずかし、猶の給へととひ參らすれば、さは聞よ、もち月がり行て我みるに赤子はいたうやせさらばひてよも生くべくもみえざるに、家いとまづしうて今日の暮の米のしろ覺束なげに打なげくめる、とし寄のえうすぐしがたうて昨日よ所よりかりたるこがねかすべきにはあらざりけれどちと計かして來ぬ、いかゞゆるせよとの給ふに、なぞの御はゞかりぞそはいとよくもせさせ給し哉、情は人の爲ならずとかや、俗の詞も侍るものを、こゝにて成る丈のことにあらば、何ごとにまれめぐませ給へ、いとよき事をといへば、さいはるれば心おちゐぬとて打笑ひ給ひぬ。

六月の末成けり、半井うしより敎へをうけてさはなしうべきや何やしらず。

圖書館はしのぶが岡の西のすみ成るべし。音樂學校はむかひにて、美術學校は其むかひなり。

谷中へ通ふ大路を少し右へ入て櫻木病院のむかひがはにぬりたる塀高くしなして、門は此頃あらためたればにやまだいと新らし、入ての右より敷石つらねて玄關へ通路一筋、左は花だんにて秋草をかしうしなしたり、北の方にはぬりごめふたつあり、そが右の方はくれ竹のませさゝやかに結ひて、咲こぼれたる花どもいとをかし、山あいはかきの外にたけ高うたちて、萩は半ふしながらさけるもよく、薄はい

まだなびかぬものから、秋の姿はいちじるくみゆ、女郎花はとくうつろひて枯梗に色をゆづり、をしろいとかいふ花の人めかぬものからなつかしう咲るかたへにかひざいくの作り出たる樣に咲たる、取立ていはんもいとこちたし、中庭は梅の老木の半うつろに成て空おほふ樣なるもめづらかにをかしく、枝ざしをかしき松もあり、高野まきのさゝやかなるもいとよし、つくばひはよしありげにて、燈籠も無下の石にはあらじかし、折まがりたる廊のあたり、板敷のつやゝかなる、槇柱もより居まほしげ也、水亭の風鈴かすかにおとなひてしのぶの露のかゝる夕べ例の君の打とけたるあされ姿にて團扇手まさぐりして打ながめ給らんさまよ、いかなるらんいとみまほし。

花圃女史田邊龍子君はことし廿四斗成るべし。

故の元老院議官今金鷄の間祗候太一ぬしの一人娘におはしまして、風彩容姿淸と洒をかね給へるうへに學は和漢洋の三つに渡りて今昔しのをしへの道あきらにさとり給ひ、書は我師の君いつの高弟にてあいよりあをしと師はの給へり、和歌は天びんと故伊東祐命うしもたゞえ給へりしとぞ、文章は筆なめらかにしてしかも餘ゐんにとませ給ひ、俗となく雅となく世の人もて遊ばぬはなし、其名の世に聞え初しは君が廿一許の頃藪の鶯となんいふ小說あらはし給ひしより成けり、其後都の花に八重櫻といふをものし給ひ、よみ賣新聞におだ卷物語を草し、ことし小說くさむらに萬歲の善作あり、又女學雜誌の特別記者として小說に紀行に高名なるいと多し、さるからにいさゝかもほこりがなどのけはなくて、打むか

ひ參らす折はをかしき滑けいものがたり洒落の談話のみせさせ給ひて、人のおとがひをこそはとけ恐ろしなどおもはするけはいさゝかもおはさゞるこそいと有難けれ、おのれは當時の淸少納言の心のうちにはおもひね。

天野瀧子ぬしは文學士爲之君の室にして、前橋孝義君のいもうとにこそおはしけれ、優柔の御心さま溫雅の性はいとよくおもてにあらはれていとなつき安かりけり、學おはせどもあらはさず、文長じ給へども世にしらさず、折ふし、われどちのふみのうへ猶ざりの文章くらべなどにてはかくはおはしましけれといとたふとし、なかんづく奇才にたけ給へらんなんいとうらやましき、御子は今二方おはします、文子の君はろうたくふくよかにめゝしく、今より生先いとたのもし、武君はおの子にしおはしませばましていか計すゑは山松の大空までやおひのぼり給はんずらむ、かく方々の御母君ともなく君はいとわかうおはします、廿六七許にや、み參する所はいとわかげ也。

片山照子ぬしは工學博士東熊君の室にて同じ博士田邊朔郎ぬしが姉君なり、龍子ぬしにはいと子にておはしませば、面やうは少し似給へる樣なり、ことしは三十あまりにや、み參らする所はいと若かり、書と和歌は君が特技におはします上に手げいにたけ給へるなん人の及ばぬ所にこそ、家政をいとよくをさめ給ひてみ心ひとつに萬思し靜めたるさまこそうれしけれ、君も人にの給はぬことかゝんはいとくるし、有がたきも心ばへにこそ、みの子ぬしこそ猶風流の方はすぐれ給へれ、花顏柳姿いにしへゆかしがる人も多かるべし、かりそめにの給ふことも艶にけしきあるは只人の及ばぬ所なるべし。

萬はさし置ていふにもあまり筆にもえたらぬなん伊東の夏子ぬしぞかし、あでやかなるものから艶めかず、まめなるものから打やはらぎて、げに女とはみゆ、書はすがたに似てやはらかに歌はとゞこほる所なくして故人の後をふまず、實景をよみ給ふになん及ぶ人なかりき、かど〳〵しき學文の方はいと世にもてかくしてしられじとのみし給ふものから、薄ものにつゝみたる玉の樣に光りはおのづからもるゝぞかし、大方人がらのかう〳〵しうなごやかなるに、心ばせなんさすがにおもふこと人にことならせ給ひて、やまとごゝろのいとをかしきぞいわでおもふぞなるべし、君が境界よいかにせんいとくるしうもおはします哉、さはれ財には富たまへり、都大路廣しといへども君が家ほどの財もてる人は少なかるべし、母君も誠のにていとすこやかにおはします、打みる所は何ごともあらざめるをなどさはと問參らせんもいとかなしう涙こぼれにこぼれてえもかきやらぬをかつは人のつゝませ給ふことえもらさじとなり、としはおのれと同じこと、廿にことしは成給へりき。

學びの友いと多かり、信友多く益友多かり、いづれをいづれといふべきならねど、この君たちこそおのれの爲には姉君達にて、つかへまつるべきよしおはしませば猶更にいとなつかし、猶島田政子ぬしの麗質なる、乙骨牧子ぬしが風流洒落なる、鳥尾廣子君の行末頼もしき筆力、高田ふじ子君の艶美なる容貌、前島きく子ぬしが一ふしある和歌の體、橋本花子ぬしがむかし戀しき人がら、田邊靜子ぬしが無邪氣なる、清水田鶴子君の計り難心中、小がさ原つや子君はよく父兄の君の教へを守りて今樣めかせ給は

ぬ、水野銓子君は誠に諸修と覺ゆる容儀をさなけれどもいとよくとゝのひ給へり、中村とし子君はきはめて美にして、長齡子ぬしは沈着不替に、おさなき人には中牟田常子君行末今より思ひやる、伊澤の夏子君きわめて今様の才にたけ給へるなど取たていわんもいとおこなりや。

別れこそ何ごとにつけてもいとかなしけれ、師の君のもとにかひたる猫子をうみぬ、四つ有つるうちのふたつははやう人にやりて殘りのなんいと中よくて抱き合てふし居たるなどをかしかりしが、島田の政子君ひとつ得まほしとの給ふまゝに送り參らせんとす、龍子君おのれがもて參らんとていかゞしめし給ふ、師の君のことにめで給しの成ければ少し心引かれてとかくまぎらはしつるほどに、いざ給へよおのれはまかでんとすなるをとの給ふ、さはせめて首輪をだにかへさせてとて眞紅のひも褪たる結びかへ給ひぬ、母君も見ておかせ給へみなもみよや、ものだにくわせてやらんとて魚少し手に置てくはすればかほ打守りてとみにもくはず、哀やなむしがしらすのなめりとてかきいだきて打ながむれば、にやう〳〵となきてえりのあたりにひたと抱きつきぬ、今一ッ伴ひ出てみすればふたつながら悲しげになく、引もはなしがたけれど、はつべきならねば龍子の君いだきてやをら出給ひぬ、えんのほとりに今ひとつはつひ居てなきもえせず、うつしごゝろのなくなりたる様にてふしたるなごりもいと哀なりし。

定家卿

苔のしたにうづもれぬなを殘すともはかなのみちや數しまのうた

小出の大人はいと人ににくまるゝ人成りけり、みの子ぬしのもとをとふて例のこにくき筋など引かけつゝ物語りどもするうちにわが師の君久子茂子ぬしなどをもみな只呼ずてに呼つゝいふ、みの子ぬしがりかゝり居る書生のいと聞にくゝわびしく成て、歸りて後なぞあの翁の傲慢なる今日はおもてよくみ覺えぬ、やみの夜に四つ辻に立ておもひのまゝに打こらさばやといふ、みの子ぬしをかしがりてさなまがましくの給ひそ、いとよき歌よむ君ぞかし、今日もの給へりし、

雨晴て名殘しめれるあさ庭はこほろぎ啼て萩のはな散る

かくなんあるとかたり給へば、こはよき歌かな、さはゆるすべしといへりとなん、天地をうごかし給やあらずや、書生の洋杖はのがれ給へりとておのれとかたりて笑ふ。

筆すび

一日背面美人といふ題給はれり、人々をかしがりて笑ひなどするに師の君それよいとをかしき物語こそあれ、祐命がまだ若かりし時のことぞかし千樹の君おのれなどしたしき人二人三人して墨田川に花見る時、先に行女のうたのねにいにしへのものがたりにいとよしとかきたるもいかでかくぞなどそゞろに床しがりて、あまた人をおし分つゝはしり出てふと面をみしに、いかにぞや桑を取たるむかしの人の樣に宿癖はいかゞ成けん猶其類なりければ、あなや二度驚きぬと高くよべば、かの女づとはしりかゝりて祐命が脊を手いたくたゝきて、これにて三度や驚き給ひけんといひしなんいとどしく興をそへていみ

じき笑草にせしぞかし、才たけたる女なりしよとて笑ふ。

心くるしきもの

實よりは名の高く成たる、さすがに其位置しをしければ才ひきゝをしられじとするに、詞も常におもふがまゝはえいはず、まして文かき歌よみなどすべて〳〵心くるし、女の身にてものほめたるもうれしきものと人はいひつれどいと心くるし。

詩經鳴鳩の篇、螟蛉子あり、蜾蠃これをおふ。

この意味をもて馬琴やしなひ子を螟蛉子といふ。

割物は龜甲、蜀紅、七寶、麻の葉、サヤ形、タテワク、其外幾等もあれどこゝ等が有也。

模樣は雲龍、二葉葵、龍の丸、籬々菊、源氏車、槌車、香の圖、牡丹唐草、菊から草、蓮から草、立田、よし野、狂ひ獅子、藥玉、蝶の丸、菊水、花の丸、をとり桐、登り龍、下り龍、鳳凰の丸、其外形がはり鳳凰等幾らもあり。

品もの

三尺の細口にして臺附龍耳の花生一對。

一、花瓶の中ほど善き處へ二本の筋をひく是を見切といふ、其中へ正面の處へ龍に立浪の丸模樣を畫き但し表裏とも其廻りは菊桐の模樣を飛ばし、古代唐草を以て其あしらひとす、地つぶしは赤、其模樣の繪の具はすべて樣々のゑのぐにて是をだめるなり。

二、上下は雲形を以境界となし、其中には東大寺を模樣を以て色々にあやなし、其地つぶしはさや形七寶の類を以てしめる。

三號中程の帶は菊の丸を卅二ほど描き、其外はから草を以てつめる也、是にて中ほどより上は大がひ終る、併し一號の帶と二號の雲形との間白地なれば是は後にて分明、四號は帶より以下也、是は畫の中はワク取りとなし、其中へは表の方は金閣寺銀閣寺を一木づゝに向ひ合せ、裏は港川に稱村が崎を向ひ合せ、其彩色は言ず、只ほめればよし、其まはりは上下に割り模樣を以て淵こしの區別をなし、其中に種々に古代模樣から草等の物にてつめる、夫よりわくの廻りは秋の七草を古さつ摩風に畫き、其あしらひに金模樣の蝶を散らし畫き、而して其模樣は上の一號と二號の間白地の處まで畫き、地つぶしは金なし地なり、是は雲ぼかし形しるべく、此梨子地はいまだ曾てなきなり、現今工風中也、夫より臺はさや形のかきつぶし、其中の處に丸もやうを描くかたよし、是にて目出度出來上る。

一つ金の入用廿匁　一匁三圓八十五錢の割、

但し一本一釜の割ゆゑ八かま也。

釜は下燒ともすべて四かま、

一かまのまき代六十五錢一二錢の割、

生地代十八圓五十錢、
品もの圖の如し。

夏

源義つね

やしまがたをしてさかろのあらそひにまづかち色のみえしきみかも

豐太閤

日の本にさる者有と犬じものから人さへもかしこみに氣無

柴田勝家

露ばかりのこさぬ水のいさぎよきこゝろはかめのかゞみなりけり

加藤清正

鬼とのみおもひのほかの情さ弊あればや人もなびきよりけ無

子

明智光春

から崎のまつの木かげにのり捨し心のこまもよに勝れけり

佐久間盛政

ものゝふは鬼こそよけれみだれたる世には佛も何にかはせむ

眞田幸村

いくたびもよせくる浪をうちかへし難波のあしのはなと散けり

石田三成

しばらくは石田の水も落ざらんうら切とほす人なかりせば

木村重成

今はにも心をこめしたきものゝ香ぐはしき名は世ににほひけり

礎、一筋、下り來し、手折、
石ずゑ、ひとすぢ、おりこし、たをる、

廿四年九月廿八日買入目覺し時計裏番號。

a

ba wi

p

f　s

蓬生日記

（廿四年菊月―十一月）

日かげにとほきやへむぐらのあきいとゞ露のをき所なきに、筆さしぬらしてかひつゞくればあやしう人のしりうごとのやうにもなり侍しかな。

九月十五日　晴天。九時頃より灸治に行五十人斗待合して十時頃終る。それより直に圖書館に趨く。本朝文粹及雨夜のともし火、五雜俎とをかる。馬琴の著書中に五雜俎といふことといと多く有しかば見まほしくてなり。さわあれども例の不學故中々にえよむべくもあらず、いとせんなし。三時頃館を出てみの子君のもとにゆく。少しものがたりしてかへる。君はおとつひより箱根鎌倉あたりを旅行して昨日歸らせ給ひぬといふ塔の澤にて白なみの立さわぎしてふ物語りも有けり。家にかへりしは五時少し前也し。此夜はいとねむたふてえもたえがたきにわびてはやく打ふしぬ。十時成けん。

十六日　今日もめづらしき好天氣也。風もなく雲もなくさわれ暑からず、つねにかゝらましかばなどとおもふ。母君は湯島の紺屋に參り給ふ、おのれは衣どもあまたあらひなどする程に午前十時といふころ成けん山下直一君參る。ものがたりすこしする程に母君もかへられぬ。ゆづりておのれは師の君のしたてもの今日よりはじむ。君は午後の四時頃歸宅せらる。熊ケ谷より來るとて小袖綿もらふ。夜食はや

蓬生日記

うくひてそゞろありき國子と共にす。あすは中秋なるてふを今宵の空もたゞならず雲の立さわぐはいかがなどおもふも例なるものから大方かゝるをなげかれぬ。

十七日　早朝髪むすびて師のきみに行。今日はみの子ぬしの月次會なればかしまゐらする硯おのれもてまゐらんとて也。十一時半より家を出づ、母君みの子君の近邊まで送り給はる。談話少しゝてのちに諸君參らる。今日は中秋なるてふを空めづらかに晴わたりて些斗の雲もなく風はつよからねどすゞしき程に吹ていとよき日也。點取題題山待月なり。小出君及師の君兩點也。

甲　兩君

山のはの梢あかるく成にけり今か出らむ秋のよの月

おのれの成ければ賞給はる。今日の各評題は山家水枕邊虫也。天は小川信子ぬし、地は中村禮子ぬし、人は伊東延子ぬし成けり。日沒少し前に諸君歸らる、おのれはつや子ぬしの迎へのいとおそければ一人殘し參らせんがわびしければもろ共に殘る。とよ子君迎へに來給てよりおのれは歸る。みの子ぬしより心ぞへの車にて出る程に月は上野の森をはなれて櫻木病院の軒ばにのぼりぬ。うたて月をうしろにして歸ることのいとをしさよと心の中にはなげかれぬ。切通し邊へ來る程に雲少しかゝり初ぬ。家に歸りてより少し月さやかに成しが、更けてはいとゞ雲かさなりて、おもひしことよとわびられぬ。今宵久保木の姉君參る。母君と共にものへ參らる。今宵も例のなまけてはやくふしぬ。

十八日　朝來曇天、十一時頃より小雨降くる。今日はさま〳〵なすこと多くあわたゞしければ仕たてものはみすして机にむかふ。一日降暮して夕暮方より風いと寒く成ぬ。燈火のもとにむかひて更におもへば今日もすることなしに暮たる也、あな口をしとおもふは日々なるものから勉めもあえぬはいかなるにか、我ながらいとにくし。夜一夜雨降にふる。十一時頃ねやには入ぬ。

十九日　朝は小雨ふる。今日は例の稽古日也つとめて家をば出づ。師の君朝げものし給ふ折成り。少しものがたらふほどに人々參りあつまる、てにはのあやまりなどたゞし給ひてさての給ふ、君は此頃新古今をやみ給ふいたく調の似かよひたるなんある、あしきことにはあらぬものからまねぶはいとよからぬことぞかし、猶家集をみたまへ手もとにおはさずばこゝになん侍るなど、ねんごろに教へ給ふ。あす松園の月次會なればとてその兼題を今日の點取にす、八點以上はしたゝめておくらせばやとて也。みの子、夏子、廣子、艶子の君達およびおのれの五人成ければ色紙に寄合書しておくる。家に歸りしは三時過る頃成し。空は餘波なく晴あがりぬ。此夜もはやくふしどに入ぬ。

廿日　曇天。師君の仕事をす。別してのことなし。中島くら子ぬしにはがきを參らす。

廿一日　朝來曇天。午後より母君築地へ寺參りに行給ふ。望月より使ひ來たる、さつま芋到來す。日没後より雨降出ぬ、更けてはいとゞ風さへそひておどろ〳〵しう只天の川の樋口切たらん樣成けり。なすことなしに空しく起居て閨へ入りしは一時過ぎ頃成し。

廿二日　曉がたより雨やみて朝日のかげの薄らかにさし昇る程木々の梢小柴垣のひまなどに玉をつらねたる樣に露のみゆるもいとうつくし。稲葉君參らる。伊勢利來たる。午後中島くら子ぬしより通運便

をもて書册返却さる、書狀有けり。日沒前までに師の君の仕立もの終る。たそがれより雨降出て今宵もいたく降ぬ。閨に入りしは十二時也しものから、大方は居ねむりのみ成けんかし、なぞかく耐忍の力に乏しきにや、勉めばやとおもふ心さすがに無にしもあらず、筆をとればものゝかゝんことを願ひ、ふみに向へば讀明めんことをしおもへど、こゝろざし淺く思ひ至らねばにや凡知凡慮いよ〳〵くらくしり難きことは日を追ひてしり難く昨日覺えたることは今日は忘れぬ、婦女のふむべき道ふまばやとねがへどそも成難くさはとておの子のをこなふ道まして伺ひしるべきにしもあらずかし、かくはてゝは何とかならん、老たる親おはします此御上のいとなげかはしきに、よろしき程なる妹が身の有つきもいと不便也、とざまかうざまにおもへば只身のかひなきのみにぞ寄ける、いでや過て改むればてふ古語もあるを明日よりはとおもふも今宵のみならざりけり。

廿三日　空は曇りたるものから雨もまたふらざりけり。今日は秋季皇靈祭なるものからに隣なる家よりこわいひふかすべきもの借に來たる。家にても牡丹もちなどとゝのへて先祖のみたまに奉る、例の仕立もの師の君がりもて參る。歸りてみれば稻葉のお鐵の君參られぬ。午後より野々宮君來りとはる。一つは舊門閥の困衰、一つは當時女學生の意氣、物語りもまたいたくことならせ給へり。猶うきよこそをかしくも歎しくもうくもつらくも有けれとは思はれ侍り。三時頃一としきり雨降にふる。野々宮君歸らるゝやがて國子の吉田君に借たる書物かへさんといふに伴ひて湯島までいたる。雲たゞよひにたゞよひて空のけしきいと覺束なきものから雨はふらざりき、家に歸りてのちなすことといと多かり。今宵はさ

まてねぶたくもあらでおもふこと少く成ぬる程也。閨に入しは十二時過る頃成し。

廿四日　今日はみの子の君の家移もし給ふ日おもふに空晴よかしなど昨日より願ひしにおもふがごとにていと嬉し。國子家の障子の張かへをす。午後お鐵君及本所の千村禮三君參らる。種々もの語り有て母君に是非同道いたしくれ度樣打頼まるゝに、さはとて伴ひて本所に參らる。甲州なる廣瀨七重郎來る、同性ぶんの犯罪に付被告事件の爲也といふ、おのれの爲にも遠緣の親族なればといたく心にかゝりそはいかなる事にかとて猶とふに、いとはづかしうつゝましけれど、えいはではつべきにしもあらねばとてかたる、おのれがめひなるものから文こそよの淫婦にて有けれ、夫をかゆることはや六七人にも成ぬ、今相添ふは信州の種商人にて小宮山庄司となんよぶをのこ成けり、此前にもてるは同じ郡の北野象次といふもの成き、相絶てよりことしは四とせにも成ぬる成べし、こたびの原告は則其をとこに侍り、其上覺書に依ればぶんとかの北野とはいつしかふたゝび寄絲のむかしのえにしを結びかへて小宮山よりはさり狀受けもとの夫と呼ばれんと大方ならず契りきとか、さるをことしの四月半同郡市橋といふ所に國内一の祭典侍りき、此日甲府の柳町三丁目に山がたやとなんよぶ旅店の二階に彼等二人酒打のみてたわぶれかはして居たりけるをかの小宮山なん聞しりて、おのれなどかはゆるすべきとて右手に一尺斗の鎗の穗先をたづさへ左手に麻のなはをもてそこなる座敷にをどり入ぬ、二人は心きもゝみにそはず、いかで命ひとつをたすからばやとひたすらふし拜みて打佗たるに、をりしも傍に北駒郡のそれがし村なる伊藤寛作といふもの有て、君たすからんとおぼすならば金の外にものは侍らじ、おのれよろしくあつ

かはんとて取なすまゝに、命にかゆるたからはあらずとて、さわれこゝにはこがねも持ねば則百圓の借用證をしたゝめてなん其場はすましぬ、さるものから後におもへばこはまたくかのみたりのものゝ斗りてなせるわざぞとおもふにいきどほりいと胸にみちて則うつたへをおこせる也と也、ぶんが答はまたことなれり、そはあとかたもなきことにて、かの北野象次郎には先に夫婦に侍りし時我衣裳調度など典物せられしもの七草も侍りしが、其後こがねにて又廿金許もかしぬ、合すれば百兩あまりのものにて其こがねなんかへさじとてかゝるうたへは起されけん、鹹に無實に侍るなり、またかの伊藤寛作とやらん更におもてをみしことも侍らぬものにこそとて陳じ申す、小宮山はいづち行けんかげだにみえねばいとせんなし、伊藤寛作もぶんなるものは更にしらずといふ、さるものから其日かしこの宿帳には正しく寛作の名前もしるされたるはいかにぞやとてつひに有罪とこそ定まり恐縮、さぎ取財と定められぬ、されどもぶんは更にうけずこは道遠へり道理ならずとてこゝに上告はせしなりといふ。にくきものから親族は親族に侍り、かゝるを見聞にえもたえやらず、やがて後にしたがひのぼりて辯護は守屋此助君に依賴しつ昨日さま〳〵に相談して公判は今日發かれ侍り、今日は事實の取しらべにのみ終りて申渡は明後廿六日となん聞ゆ、申さんもいと耻かゞやしくとて打なげきぬ、さはれ此人も道德明らかにくらき所にも耻ずといふならねどさすがにまたさる筋あしき罪はまだ得ず有けん、よし今宵はこゝに泊りて夜すがら守屋君の申立などもの語り明す。

廿五日　晴天成り。小石川の例の月なみ會この月のいたくのびて今日催すなり、師の君例のなやましう

せさせたまふ頃なればをのれにはやくより來よかしとの給はせしみ詞もあなれば十時頃よりして參りぬ、この時七軍君も一たび定めの旅宿にかへられぬ、來會者は十八九名成けん、點取秋の鳥てふ題なり、甲乙は伊東の夏子ぬし、おのれとふたり成りけり、賞にはうるはしき柿のみ給へり、家に歸りしは日のやう〳〵くらく成る程成りしかば母君途中までむかひさせ給ひき。此夜お鑛の君よりはがき來る。いたくつかれて今宵も早く打ふしぬ。

廿六日、空少し曇る。早朝千村禮三ぬし正朔君と共に來る。おのれは圖書館にふみ見んとてはやう出ぬ。道にて今野はるの商品陳列館に出勤するに逢て伴ひて行。外にも今一人居たり、少し早過たりけんまだ館は開かず。さて恰もよし、眞下の槇子とじが墓參せばや今日は彼岸の終りの日なるをとて谷中へ行。寺僧も今寢起たる計成き、あかくむも花たづそふるも悲しきものからいと嬉し、絶ず苔の下に開くらむ松風に袂ぬらして、手むけもあへず先打なげかれぬ、さるべき子どもなどもなきにしあらず有りながら、はたいかなればか花手向たる人もなく水かれ墓はかはきにたり、しばしおろがみてこゝを出つ、常なき世とはえおもわじとすれど猶このはかなごとやみをもはなれざりけり、かしこぞまだ開かず、しばし立つくしてやがて入りぬ。日本紀及花月草紙月次消息をかりてみる、神代の卷の解しがたきをしいてとかんとすればあやしうねむくさへ成ぬ、花月草紙にねぶりをさまして月なみ消息の流暢なるをうらやましうおもふかひなし、三時斗り成けん雨少しこぼれ來ぬ、いたくふられなんわびしくて館をば出ぬ、道にしてやみたるは口をしかりき。しのばずの池邊かれて浮草の花のたゞよふも淋し、秋は草木の

上のみならずみるとみるものゝ露けくも有哉とて、しばし立とゞまりぬ、うしろよりくる書生の我うへなるべし何ごとかさゝやくがつゝましうてうつむきたるまゝいそぐもはづかし、家にかへればいたくも早くおはしつる哉とてみな〳〵よろこびぬ。國子は今日關場君とひ參らせつとて給はりつる栗など我にもくはす。牛井うしの事などをも聞て來ぬ、いでや猶記者は記者也、朱にまじはるになど色赤うならせ給はざらん、品行のふの字なること信用のなし難きことも姉君が覺す樣には侍らずとよとてまめだちて聞えしらさるゝにもむねつぶれぬ。我爲には良師にしてかつ信友と君もの給へり、我が一家の秘事をも打明て頼み參らせ後來扶けにならんなどの約も有しをそも僞り成りけんかしらず誰が誠をかとて打もなげかれぬ。今日は稲葉の妻君も參らせ給へりとぞ、關場君より日本外史及び吉野拾遺をかりて來る。日沒に母君に吉野拾遺讀みて聞かせ奉る。十一時斗成けんふしぬ。

廿七日　朝來曇天。午前久保木の姉君參らる。午後より廣瀨七重郎參る。ぶん子公判前裁判執行てふことに成きとていたく失望の體成し、おのれらも同じことなげかれぬ、監視のことにつき種々相談あり明日またこばやとて日沒前かへる。今日はことに打なまけて何ごともえせず、今返るもまた早うふしぬいとかひなしや。

廿八日　晴天。午前のうちに國子吉田君に書物かへさんとて行、しばらくにしてかへる。午後藤田より目覺し時計を買ふ。家なる時計のいたく損じたればなり。價もいとれんなり、いふよしなどわれ人共におもへばこゝなるのをかしこにうりていさゝかのたがひにて買入る。藤田屋參る。稲葉氏より書狀來

る、返書を送る。今日も日ねもす何ごとせしといふこともなかりき。十一時半頃ふしぬ。

廿九日　晴天。母君藤田屋の頼みに依りて貸すべき金のことといひに行給ふ。家のとてあらねど三枝君より借りたる金少しあればそれかさんとてなり、歸路に高野に立寄りてこゝよりも少し斗返金せられる。吉田君三人連にて參らる。日本外史三册かし給ふ、もの少し到來す。正午少し前に歸る。母君は正午に歸宅し給ふ。稲葉君より書狀參る則返事を出し、佐藤梅吉氏に書狀を出す。午後上野の伯父君參らる。藤林のことに付物語り有けり、夕暮に歸らる。此夜はさまでねぶたからねば十二時頃ふしぬ。此頃より大雨盆をかへす樣成し。

卅日　朝より空のけしきたゞならず十時頃より强風大雨誠の野分に成にけり。其最中廣瀨七重郎來る、ぶん子の事に付き種々依頼さる、同人午後歸國の途にのぼる、一時頃より風力次第に減じて二時に鎭靜す。差配人土田來る、久保木の姉君見舞に參らる、近來稀なる大風成き、されども我家は山後の低所なれば、さまでつよからず、破損の場所もあらざりしが、所によりては屋根を吹めくられ塀垣など仆れたるは更也、丸つぶれに成たる家も少なからざりけらし。其夜は空いとよく晴れていとおだやか成し、穏古題二週間分よみてふしどに入しは十二時なりき。

十月一日　早朝師の君がり昨日の見舞に行、路次の樹木塀垣などの仆れたるいとおびたゞし、師のもとにてはさもあらず、只此頃植かへ給し木どもの二もと三もと打たふれたるのみ成しとなり、所々へ出すべきはがきしたゝめ會計上の計算などしてかへる大小の筆十本給ふ。此日山梨縣野尻君よりぶだう

一籠到來す、いと美ことなれば母君安達へも少し送り給ふ。禮狀したゝめ出す。國子午後より吉田君へもて行、此夜は早く打ふしぬ。

二日　曇天。今日の新聞に津田三藏肺炎症にて空知監獄に死すてふ文あり。暴風雨の損害ども多くの國會朝日の内幕とていたく攻擊したる商賣忌敵かあり、野菜のいたく高値に成たりなどもしるせり、午後より藤田屋參り金七圓斗來月返金の約束にて貸す、庭の木石などつくろひくろゝ、干物の露豆一升到來せしが、庭前なる冬瓜一つ送る、薄暮に成て歸宅す、此夜久保木の姉君參る。栗柿少し到來す、ぶだう一房送る。國子と共に數詠をす、國子一首、おのれ十首の約束にて詠みつるに、一題はおのれ一首かつ、次なるはおのれ三首まけぬ、勝負なしとてやみぬ。此夜は更にねぶからず十二時ふしぬ。

三日　小石川稽古也。空めづらかに晴ていとよき日成。師の君のもとへぶだう少し奉る、來會者十二人斗成し、今日より稽古一日に成る、九月分會計の計算をなして歸る、五時頃成し、十二時いねぬ。

四日　晴天。午前に讀書をなし、午後作文をす、薄暮より國子と共に摩利子天に參る、歸路杉山勸工場を見物す、各商家一人の客なく寂莫たるには驚きたり、前住ける家の前を過てくるにあやしき待合などいふ家出來たり、中坂の頂き先の日の大風にや崩れけん一間斗石段落たり、家に歸りしは八時頃、夫より母君の揉療治少ししてに習字にかゝる、十二時ふしどにつきぬ。

待合といふものはいかなる物にやおのれはしらねど、只もじの表よりみれば、かり初に人を待あはすのみの事なめりとみるに、あやしう唄女など呼上て酒打のみ燈あかくこゑひくゝ夜更るまで打興ずめり、家あるじは大方女子にて二人三人みめよき酌女もみゆ、家は艶にすがたるはいりのさま、高どのにはいよ簾かけ渡してすゞしの聲ねこゝろにくし、家名は行燈にかきたるもあり額打たるもあり、ときはと呼あり梅のや竹のや、湖月はからす森に名高く花月は新橋の裏町にあり、あるはいが嵐の奥座敷に風をいとひ臙のはなれに落花の狼藉をみるなど、大方世の紳士紳商などいふ人のかくれ遊びの場所なめり、少なくも一町に一ヶ所はかならずあり、多き所には軒をならべて仕出しの岡持常に行かふを見る、世にはいかに數まんのこがねありてかゝる用なき人のいとのどかなるよを過すらむ、孟宗は竹をえかねて雪中にこゝえ孫康は雪少なうして窓の光りくらきをなげくに、地租輕減をとなふる有志家豫算査定に熱中するの代議士かゝる遊びに費すこがねのをしからずとは不學不識のものゝしれがたき事にこそ。

五日　晴天。日ねもす机に寄て例のよしなしごと書つゞくる。西村君參らる、近日出店の都合成りといふ。小田病院の怪事をかたる、午飯をすゝめて歸宅せしは三時頃成し、瀧野君より庭前の栗を到來す、今日は甲子なればとて母君いさゝかものとゝのへなどして大黒天に奉る。日沒後母君の揉療治す、國子と共に少しして、今宵はいたくなまけにたり。

六日　快晴。母君朝來はり物をなし給ふ、姉君一寸參らる、午前よりひとへ衣三つ四つ洗ふ、午後よりは例の文机に打むかひぬ。

七日　快晴。午前髪すましぬ、午後より文机に打むかひて文どもそこはかとかいつゞくるに心ゆかぬことのみ多くて引さき捨〳〵することはや十度にも成りぬ、いまだに一篇の文をもつくり出ぬぞいとあやしき。早うものし初たるなむ師の君に一回丈添刪を乞ひたるあり、そがつゞきをつゞらばやと思ふに我ながらおもしろからでかくは引やりつるなれど、さてはつべきならねば別に趣向をもうけなどして又つゞり出るに夫もかれもいとつたなし、昔し今の名高き物語も小説もみる度に我筆我ながらかなしく成りてはて〳〵は打も捨まほしかれど、中々に思ひ懸ることえやむまじきひが心にをこがましけれど又つづくり出ぬ、あさつてまでにはかならず作りはてん、これ作りはてねば死なんとおもふも、心ちひさしと笑ふ人はわらひねかし。

八日　快晴。午前清書午後作文、十八史略及び小學を讀む。お鐵様參る。明日の各評景物を作る。日暮て後母君と共に藥師に參詣す、勸工場を見物す、植木店に菊少しみえ初ぬ、露店六丁目邊までたてり、歸路途上にて姉君に逢ふ、歸宅後土産の粟餅を食す、母君ふし給て後、姉君一寸立よらる、これよりも土産にあはもちをもらふ、同道の人ありとて直歸る。風荒う吹出て空げしきいとすさまじ。十一時寢につく。

九日　早朝より支度をなす、小石川の稽古なればなり、九時頃より家をば出ぬ、風は只吹にふく、されども空はいと晴たり、師の君に約し參らせたる茄子を持參す、いたく喜び給ひてこれひる飯の時には くはゞやなどの給ふ、春日まんぢうひとつやきて喰ひ給ふとておのれにも半を分て給ふ、もの語りども

少しする程にやがてひるにも成ぬ、もてなしにあづかりて諸君の來らせ給ふを待程に、かとり子君先參らる、今日は來會者二十二名成し、點取題秋烟にて、小出君の乙はおのれ成しかば短册を給ふ、あやしう我點は樋口君にのみとらるゝなどの給ふ、猶天性といふものこそ有けれつとめ給へ進むはかたく、しりぞくはいと安きぞかし、我れ後見てんなどの給へば、師の君いでや夏子ぬしよ小出君に盃參らせ給へ、かくまでにの給はすはうきたることにはあらじをなど打笑ひ給ふ、例のひがものはいとつゝましうて只ものゝすみにのみひそまり居るもおこ成りと笑ふ方々あるべし、人々歸後小出君もかへる、みの子ぬしとをのれと又少し物語りす、歸宅せしは日沒少し過成し、母様むかひに出給ひて道にて行違ひぬ、奥田の老人參り居りしかば給はりつるくだものなど少しやりぬ、老人は國子道まで送り、今宵和歌二十首斗よむ、ふしどに入ても更に寢むられねば、ふたゝび起てふみどもよむ、十二時ふしぬ。

十日　晴天。湯島の天神大祭也、母君午前より所々遊覽にと參らる午後四時頃歸宅われも老ぬる哉かく氣樂に遊びありくことととて笑ひ給ふ、日沒より國子と共に拜禮に行く、山車は切通し坂に一つ有のみ成けり、社内より新花町の方へ出んとて吉田君の表をよぎりしかば國子立よる、しばらくにしてもろ共に歸る、家に歸りしは七時頃成し、しばし打ためらひて机どももて出る程に郵便來る、今朝兄君に時候伺ながら一書參らせたるまゝその返事なめりとおもひて封じめきるにさま〳〵有りてさてこなたいといと春よりの不都合勝にていかんともいたしかたなく負債の裁判などしば〳〵あり到底せんかたなければ財産差押さへといふことに成ぬ、明日は日限ともなればこと〳〵く破産の不幸に立至れり、其頃參り

てものがたらひてんと成り、金三圓斗あらば何とか成べきことながら夫すら心にまかせずなど書給へり、いといたうおどろかれて何事ぞこはとて母君ともゞ〳〵はかる、こゝに金四圓はありこれかしこへかさばこゝに又難義やおこりなんいかにせんなどの給へど、只そはなにかは公權の剝奪といふことは人事に於ていと恥べきことにさぶらはずや、家は又我稽古箱の衣賣しろなすともよしこれもて行て故よし明らめ給ひて渡させ給へ、くらく成なむに明日といふなれば今宵は過しがたかるべしとて車ものにして母君をやる、國子と共に案じくらす程に十一時頃歸宅し給ふ、大方かたの付べき成りと聞に少しむね安くも成ぬ、此夜中より國子俄に腹痛をやむ、夜ひと夜只くるしみにくるしみてはかなく明ぬ。

十二日　國子なほおこたらず、今日は本願寺のお取越しとかやなりとて母君九時頃より參詣せらる。十時頃より稻葉の妻君正朔殿と共に參らる、ひる飯參る、午後より姉君參る、國子の見舞になり、四時頃母君歸る、日沒少し前稻葉君歸らる、秀太郎參りしとて到來の赤飯などくわす、今日は法華宗にても十夜とかにてこゝかしこより配物貰ふ、今日もいたう怠たりにけり。

十三日　晴。兄君如何なし給ひけん只案じに案ずれど更にふみもおとづれもなし、沖なわ縣より依賴の歌師の君に添刪乞はんとてもて行、ものへ行給ひて留守なるこそいと詮なし、又こそ參らめとて歸る。

十四日　さしたることなし。晴。

十五日　もおなじく六時よりものへ行。

十六日　おなじく。

十七日　稽古日なり。晴天成し、題例のふたつ一題十點の一つありけり、伊東夏子君二つ、鳥尾君ふたつあり、松井節哉君八つとらる、明治女學校の學生にて田邊君が知人なるよし打みる所はいとおとなしやかなる人なり、日沒少し前歸宅す、岡田より仕立もの依賴せらる、母君斷らんなどの給を遠路よりのなればとておのれうべなふ。今宵は舊菊月十五日なり空はたゞみ渡す限り雲もなくてくずの葉のうらめづらしき夜なりいでやお茶の水橋の開橋になりなめるを行きみんはなど國子にいざなはれて、母君もみてこなどの給ふに家をば出ぬ、あぶみ坂登りはつる頃月さしのぼりぬ、軒ばもつちもたゞ霜のふりたる樣にて空はいまださむからず袖にともなふぞおもしろし、行々て橋のほとりに出ぬ、するが臺のいとひきくみゆるもをかし、月遠じろく水を照して行かふ舟の火影をかしく、金波銀波こも〳〵よせてくだけてはまどかなるかげいとをかし森はさかさまにかげをうかべて水の上に斗一時の雲かゝれるもよし、薄霧立まよひて遠方はいとほのかながらに電氣のともし火かすかにみゆるだもをかし、いざまからんまからんと斗いひてはそもはなれ難きぞいとわりなき、またかゝる夜いかゞはみんなど語りつれつゝするが臺より太田姫いなりの坂を下りてくるほど、下よりのぼりくる若人の四たり斗衣はかんにと出立さはやかに折にふれたるからうたぎんじくる哀をの子ならましかば我もえたへぬ夜のさまよとて國子のうら山しげにいふもをかし、馬車のいとろうがはしきに小路につとはしりのく、神田の森に月みんよとて坂のぼるほどいとくるし、のぼりはてゝふと見返るに月はいつしか空高く成て二本ある杉のかげにかくれてさしのぞかざればみることうとし、うたよまざらんはいとくちをしとてさま〳〵におもひめぐらせ

ど月のかげにやけをされけん、ふつに趣向もめぐらぬこそ猶よみなてふこと成べしとて打笑ひつゝやみぬ、大路をかへりくるほどいと〳〵をしう覺ゆれど、母君のまたせ給はらんなどいとうしろめたうていそぎかへる、八時前なりしかど時計只こゝもとに取寄せてさしのぞき居給えりし、なほ暮く遊事はいとあしきこと成り、母君をふさせ奉りて少しふみどもつゞる。此日は秀太郎小學の運動會としてかま倉地方へ遠足成しかばさこそつかれつらめなど案じくらす。

十八日　晴。午前母君他所へ參らる、おのれは依頼の仕事をはじむ、山下直一君參らる、下宿がへ昨日せしと也、少しもの語りて家の新聞など貸あたへてかへす。午後より菊子ぬし參らる、卒業しけん終り給ひていとよろこばしげ也。一昨日より半井君のもとに遊びてよべ歸りぬ、夏子ぬしはいかゞし給ひしやなどいといたう打案じての給へりし、參らせ給へよなどの給ふ、みにもかねてより參り寄らまほしく思ひながら猶なんさはる事ありてまかでぬを常に心ぐるしうてのみなんある、かくねんごろにの給ふにも猶いとはづかし、さま〴〵のもの語りありて歸り給ふ。此夜隣家中島にていとけふなること共ありたり。くらこぬしのもとにふみしたゝむ。十一時頃ふしどに入しかど思ふこと多くていをもねず。一時斗成けん花しよの國には至りつきね。

十九日　晴天。何事もなし。

廿日　晴。何事もなし。圖書館に行。

廿一日　晴。同。

廿二日　晴。あす半井ぬしを問參せんとす、ふみかいしたゝめて出す、さはれまだ約束の文章は少しもしたゝめぬものをいとおぼつかなしやとおもへど猶せめて出す、入湯などして用意す、空いとよく晴れて曙斗の雲もなきに例半井君へ參るからに雨降らぬ日なかりつればいづら明日はと國子をかへりみていふに、頼むともやわかとて打ほゝゑみぬ。夜に入てより半井君いり書狀參る、孝子君事廿七日嫁入らすべきよし、其後參りくれ度となりけり、俄のことにて誠ともおぼえず、いとあやし、十二時ねぬ。

廿三日　早朝床を出しに雨降にふる、さは又降らるべき成しなどいふ程に朝日のかげさしのぼる頃より只晴にはれ行もをかし、稽古題五題、各評一題、難陳三題よみてひる飯をたうべぬ。午後よりもち月來る、新半參る、國子の輝表えまほしと様にいへばやがて二つ斗うる、百足斗もて來し中にか斗のは又なしなどいふ、我身の歌とくらべられんにいかにせまし穴にも入らまほしうこそ。十一時床に入る。

二十四日　空晴たれどいと寒し。八時頃より家をば出ぬ、師の君は昨日より例のごとなやみ給ひていとくるしげにおはしますを、近衛家の令夫人うせ給ひしに其弔ひせばやとておのれに留守ゆだねて朝のまに趣き給ふ、前田利嗣君の令妹にて芳紀二十三とか聞えし、若君御出生の月成しとか。來會者今日は多からず、伊東夏子ぬしもいとおくれて參る、前島むつ子君入門せらる、十時許師の君歸宅題二つ成し、師の君より近衛篤麿君の哀傷の歌を承るに、

なき數に母の入しもしらぬ子のゑがほみるさへかなしかりけり

誠心誠意の作はげに天地をも動かすべき成りとて師の君歎じ給けり、午後四時頃一同歸宅、師の君い

となやましげにて直に打ふし給ふ、おのれ家に歸りつるは日沒少し前成し、國子の丶宮君を訪て女學雜誌外少々書物をかりくる。半井孝子ぬしが嫁入給ふいわひもの少しもて行方よろしからめとてなり。さわ明日早朝にと心がまへす、久しう訪ひ奉らざりしうちに樣々あやしき物がたりども多かるを半井君のそをおのれにつゝまんとて苦心し給ふなど聞にも少しほゝゑまれぬ。十二時床にいる。

二十五日　朝來曇天。八時頃宅をば出づ、半井ぬしをとふ、門に車の下り居るは客人のおはしますにやとおもひつるにさはなくて、兄弟知己の方などへにや暇乞に趣き給らんとなめり、おのれは玄關にて祝詞のべなどして歸らんとするに孝子の君兄も宅にて侍りしばし上り給へなどいふ、うしも出來給ひてかにかくとの給ひつれど又こそとて歸る、二十七日福岡地方へ送りやるに其後必ず參らせ給へ少し打ちものがたらひ度ことあるになどいふ。歸路師の君の昨日いとなやましげにおわしたればとひ參らす、今佐々木君へ診察受けに參り給ひてんといふ所なりけり、留守の用ども仰付かりて、師の立出て給ひて後、書狀二三通したゝめ出し、おのれは直に家に歸る。午後よりは書見をす。此夜十二時床にいる。

二十六日　晴天。國子關場君へ參る。半井君の負債事件聞來る。尾崎紅葉が不品行なることなどいと多く聞ゆ。岡田より仕立もの取に來る、又依頼し度などいふにこれをも受合ふ。午後鳥尾家雛陳歌合二題よみて送る、かしらなやましたれどいとかひなし、今宵はいねしは十二時成し、されどおもふことのなし難きなんこの身ながらにうし。

二十七日　よべ雨や降けん朝庭少ししめりたり。七時地震す。亡兄命日なればとてはつもの煮などして奉る。鳥尾君へ參らん時の料にとて洗ひ張させし衣縫ふ、はぎものひろ前かゝる、下まへのえり五つはぐ袖にはぎ二つあり。

宮城のにあらぬものからから衣なども木萩のしげきなるらむ

絶えずかゝと打笑ふもをかし、日暮迄は手ならひをす、今宵よりは筆のはこびいと思ふ樣に例刻よりはすこし多くなしたり、一時床に入る。

二十八日　雨天。六時頃急なる地震あり、ことしは大地しんの三十七年とかやいひていとうあやふがる人も有るなり、十時頃坂上なる洗たく店の主來る、明日午後までに綿入二枚仕立賃度となり、斷らむもさすがにてうけがふ、午後よりもてくる、國子と二人して日沒迄に平縫丈なし終りぬ。暮てより空晴行風少し吹く、例の手ならひ一時斗して、作文にかゝる。

二十九日　早朝配達し來る新聞を見れば、昨朝の地震東京の地こそ何事もあらざりけらし、各地の電報によれば愛知岐阜邊より伊勢路濱松邊など、容易ならぬ災害成りといふ、但し詳細はいまだしれずと成り、横濱などにも家屋の崩れたるなどはなかりしものから電燈會社の烟筒など倒れて點燈しがたしなどいふ、或人はいたく驚怖して東京もやがて震ふべきなめりなどいふ。午後二時過に約束の縫物終る、夫より半井君にはがき奉る、明日參らんとなり、その文したゝめなどす。夕刻より朝日新聞の號外賣りに來る、地震の報道なるべし。此夜床に入りしは一時三十分なりし。夜半より強風、曉方に森川町神社の傍より失火、十二三戸燒る。

蓬生日記

三十日　風止まず空雲りたる樣にていと寒し。新聞の來るいと遲しと取てみるに、此度の災害地の殊に害を被むりしは岐阜縣下及大垣笠松など也、殊に岐阜は全市燒失更に實情相知れず、岐阜接近の場所加納、笠松、關、大垣邊死傷算なく燒失崩潰等枚擧にいとまあらずといふに、江崎牧子ぬしは上加納高岩町に居し給ふなる、如何し給ひけんと思ふに涙たゞこぼれにこぼる、されど鐵道も電信も郵便も不通なりといふに安否を問參らする事も能はず空しう打なげきて空のみながめぬ。十二時頭家をば出づ、半井君をとふ。二番地の寓所をとひ參らせしに種々込入たる話しもあれば此頃もとめし隱れ家にとの給ふ、伴なはれて一丁斗手前なるとあるうら屋に參る、座敷の間數四つ斗あり、書齋なるべし六疊の間に文机置てそが上に原稿紙筆硯など次第なく置かれたり、障子四枚立てる外は緣なるべし、入りての右は小窓ながら風のいと強ければにやおろし込めたり、左に三尺の戸棚有て其並に同じ三尺の床めきたる所あり、おのれは例の近眼にてえよくもみえねど何やらん景色の寫眞額有けり、君と我とは長火桶ひとつ隔てゝ相對座しぬ、例のにこやかに打笑みつゝこゝへ寄給へなどの給ふ、七歳にして席を同じうせざるなん行ひがたかる業ながらかう人氣なき所に後めたくも有る事よと思ふにひやゝかなる汗の流るゝ心地す、いふべき事もえいひ出でやらで手に持てるハンケチのみをかしこき相手とまさぐり居たり。孝子嫁入らするとていたく苦勞をなしぬ、世の母親が娘を緣付るなん身のやするといふ事は僞ならず、我ながら搜にたる心地のするなどの給ふ、つぎて新太君、鶴田民子ぬしが關係一條引出ていと面なげにの給ふ、さる頃野々宮して聞しめさせたる其事よ、我家よりさる醜聞の起るべきなど夢にも思はざりしものをしら

で過たるなん別ておのれがあやまりなり、さるに君がかく打絶て訪はせ給はぬなん我身に何事か有たる樣にさかしらする人や侍りけん、身はしら雪の淸きをもてうたがはれ奉るなんいと心ぐるしう、かつは君が中頃より打絶させ給ひしを小宮山などあやしがりて某に猶曲事ある樣になん思はるゝこれもつらし、依ていかで君に以前のごと訪はせ給はらん事をとていといひにくかりしかども野々宮ぬしに委しく語り奉れるにこそ、おのれはかゝる粗野なる男子なれど貴嬢方にいさゝかも害心をなんさし挾まぬ、されば兄弟中の醜聞より御母君などやあやふがりてかく引止め給ふにや、其心配なう參らせ給はゞ嬉しからんなどの給ふ、おのれはさる心にもあらざりしかど笹原はしる御心なめりかし、小說に付てしばし物語りして先日送り置きたるなん此頃變名にて世に出さばやなどの給ふ、恥かしき限りながら可然とて依賴す、小說本四五本かりて又こそ參らめとてたつ、例の今しばしなどの給へど久しうあらむもいとつらきに其まゝ歸る、九段坂より乘車して家に歸りしは五時少し前なりし、雜陳歌合のまき廻り來れり、今日はこれが判じをなす。床に入りしは十一時成し。

卅一日　小石川稽古成り、朝風のいと寒かるに起き出てみれば霜ましろに置けり、初霜にこそなどいふ。八時頃家を出て師の君がり行く、暮秋の霜といふ題なん出ぬ。

めづらしく朝霜みえて吹風の寒き秋にも成にける哉

意景成りとて十點になりぬ。次に有孝卿の成りし龍田川紅葉みだれて流るめりてふを本歌に取りて、

いさゝ川渡らばにしきと斗りに散こそうかべ岸のもみぢ葉

かくなんいひていたく師の君にしかられにき、本歌を取てそを受たる詞なしとて成り、さもあらばあれ、小言にたゆまず猶かゝる歌もよむべし、其中には少しは聞ゆるものも出らんなどの給ふ。諸君の歸らせ給ひしは四時半成し。おのれ歸らんとする時師の君少しまてよとて止め給ひつ、小紋ちりめん三つ紋付の引通し衣類表丈給ふ。これは歳暮に參らせんとしたるなれど早き方都合もよかるべし、新年など何某くれがしの會に出るに紋付なくてもいかゞとて給ふかたじけなしなど中々なり、少し暗う成りたれば途中まで母君迎ひに參り給ふ、諸共に歸りて夕飯したゝめたる後、明日の景物かひにとて本郷二丁目の信富館てふ勸工場へ行、ものとゝのへて歸りしは九時頃成し。夫より書物少して今宵は早く打ふしぬ。

十一月一日　朝來快晴。殊に時候暖和にて實に小春の日和成り、十時頃迄判にかゝる、夫より髪あげ化粧などして十二時半より家をば出ぬ。師の君がりとひ參らせしに今行んしばし待てよとて支度し給ふ、夫より諸共に歸るさは我家より車やらんにそは返せよととてこの車は鳥尾君より歸す。室内の模樣も庭園の景も別に記すべし。師の君拔き歌初多紅葉には鳥尾君、隱家にてはおのれ、戀も鳥尾君成り、おのれは拔歌給はる、鳥尾君を辭したるは日暮て餘程の後なりし。師の君の許にかへりつきて後よき歌をよみたるに褒美などの給ひてくわし給ふ、又車をも給はりて家に歸しは六時頃成し、今日の來會者、

水野君は親子、つや子君、齡子君、きく子君、みの子君、夏子君、かとり子君、のぶ子君、の諸君成りし。

此日江崎牧子君に書を出す、さるは電信全通したれば也。來る十九日は前島君のもとにて雛陣歌合せんとて約す。

二日　快晴。裁縫をなす、稲葉君來る。何事もなし。日沒より書見をなす、十首斗歌をよむ。習字一時間、十二時床に入る。

三日　天長節なれば、例によりて併少し斗つかす。山下君參る、しるこをとゝのへて出す、雜誌をかる。早稲田文學をからんとて約束す。午後に君は歸る。午前のうちに裁縫上着丈なし、午後よりした着の裾直しをする。各評廻る。田中君より瀧の川の誘引狀あり、斷つて延す。日暮てより書見。

四日　晴天。午前裁縫に從事す、午後より習字ならびに書見をす。今日より小說一日一回づゝ書く事をつとめとす、一回書ざる日は黑點を付せんと定む、但し我が心斗成りけり。日沒後國子と共に紙類を中島屋にかふ、心正堂に筆かはゞやとせしかど日沒よりは門をゞてうらず止を得ず歸る。久保木の姉君來る。稲葉氏にはがきを送る、十二時床に入る。

五日　曇天。朝來小雨正午より晴る。安達へ預け物取に行、女坂下心正堂に筆をかふ、三河屋に洗張りを賴む、午前歸宅す。今日も一日する事なしに終る。咄烹惰本性。まき子ぬしよりはがき來る、先は無事也。

蓬生日記

六日　午前奥田老人參る。震災義捐金を出したりといふ、我もいかでいさゝか成りとも出さばやなどと思ひながら母君の免し給はぬにかひなし。ひる飯をすゝむ、一時過歸宅さる。机邊には有ながら思ふ事何もならず、我身恥かしき仕業也。日沒後小林好雪君老母死去の報は青山君、師岡君より參る。母君

の下駄かひに行。

七日　晴天。早朝母君小林君に悔みに參り給ふ。おのれは小石川稽古なり、八時三十分頃家をば出づ、かしこへ趣きしは九時前成けん、今日は蘇堂音樂會の催しあればにや來會者いと僅少なりし、午後二時暇を乞ひて歸宅す、家の都合あれば也。母君既に歸宅。午後四時頃强震あり、早卒母君を庭に出さしめなどするまに止みぬ、あやしき風說にこりたればなめり。日沒後母君再び小林君に趣く、今宵一夜通夜せんとて也。姉君參る、物語りなどして泊らんといひつれどかしこにも無人なればとて歸す、九時頃成し。

八日　早朝母君歸宅せらる、直ちに寢につく。おのれは圖書館に書物見に行、また開館に至らざりしかば櫻木町より根岸布田の稻荷迄そゞろありきす、名高き御行の松など見物す、ほゝづきやの奇談あり、やがて開館を待て入る。太平記、今昔物語及び東鑑を貸る、但し東鑑はよまで太平記並に今昔物語をのみ借かへてみる、館を出しは日のやゝ西にかたぶきし頃成き。向岡彌生町の坂にて若き書生のまだ十七八なると十四斗なると菊の鉢植をわら繩にて結ひて下げ來たりしに其繩切れて行なやみたればおのがしめたる緋紐取てあたへんとしたる事、其折來かゝりたる大學の生徒のあやしげに見たる事、其書生が振舞の事、西片町にて別れし事、家に歸りつきしは日沒少し前成し、夫より母君再び小林君へ參らる。十一時床に入ぬ。

九日　薄ぐもりせり、母君早朝歸宅せらる。今日は小石川僧古なるをもて髮上げなどす、突然に田邊

有榮氏にとはる、狼狽の事、意味有氣なる物語の事、同氏歸宅やがておのれも母君も家を出ぬ。參着遲かりしかば師の君不機嫌の事、來會者廿九名斗有りし、小出君とみの子君との事、大造君に初めて逢ふ、片山てる子君實母に逢ふ、師君泊れとの給ひつれど家にいはざりしかばとて暇を乞ふにさればとて車を賜ふ、歸宅す、母君はおのれを迎ひながら西村君が新宅見んとて參り給ひしといふ、行違ひつるになめりとおもふに尋ね給なんいとわびしくてやがて又迎ひに行、師君は車を賜ひてまであやふしとの給ひし夜道を燈火もなくて一人行なんこゝにもかしこにもいといふ方なき罪成けり、表町といふ所に母君を尋ねあてともゞくに歸る、八日斗の月雲に出沒して夜霧の道もみえぬまで立渡りたるなど只うつし畫の心地す。二人家に歸りつきしは九時成し。十二時床に入る。

十日　薄ぐもれり。此頃物入つゞきたるに例の困窮一しほ烈しく致しかたなしといふ、十五日には小出君催しの蘇園の追善會に櫻雲臺にまねかれたる其料の着るもの縫ふべきながら、それ所かはとて小說の著述に從事す、十四日迄に編はてんとて成り。午前稻葉君正朔君と共に參らる、縫物依頼さる、せん方なくてうべなふ。午後大根をかふ、十四五本にて三錢五厘なりといふ、此廉にも驚きたり。四時頃より雨降出づ。母君血の道にて打臥給ふ。此夜小林より明日初七日遲夜なればとて待待狀參る。

都冬月

つばら

人をまつ車さむげにゆるかなみやこ大路の冬のよの月

のりを

雨晴しあしたのの邊を來てみればぬれたる花に春風ぞふく　つばら

埋火

ともし火の油も氷る冬のよの光りとたのむ閨のうづみ火　のりを

同

うづみ火にあたゝまりてもうしろより吹くる風の寒きよ半かな　つばら

殘菊　久

雪つもりかけたる松の下かげになほこそにほへしら菊の花　歌子

初冬紅葉

神無月しぐれのそめる紅葉を秋のものとは誰かいひけん　同

隱家

山にのみ我かくれがをもとめしはまだ入たらぬ心成りけり　廣子

同

門のとはしるしの杉もなかりけりくる人いとふ住か成らむ　安彦

隔年戀

今日といひあすといひつゝあはぬ日の一とせにさへ成にけるかな　みの子

隱家

かくれがの軒ばのつたよ心して色にないでそ秋はくるとも　ひろ子

初冬紅葉

霜をへて更に色こそ我山のもみぢは冬のものとこそみれ

十一月二十二日　書を半井君によす、明日居宅の有無をとふ成けり。此夜したゝめものいと多くて三時過る頃まで執筆す。

二十三日　半井君より書狀來る、幸閑に付來訪され度となり、午後より行かましの心にて其かまへなしつるに正午より空俄暗く成て大雨只盆を覆す樣也、母君も心地なやましとて打ふしなどし給ひしに、路もいと難儀なめり、彼方にてもかゝる折に人の來訪するはいたく迷惑のものなれば今日はやめにせずやなどの給ふ、例の怠惰心に制せられて行ず成ぬ。雨日暮て後も降にふる、今宵も三時に床へと入ぬ。

二十四日　起出みるに空高く澄のぼりて朝日のかげ花々とさし昇りてぬれたる梢軒ばなどに照り渡れるいと嬉し、昨日違約しまつれるに、今日だに時おくれさせじとて母君しきりに朝飯をはらば訪參らすべしとの給ふ、九時卅分家を出ぬ、かしこへ行しは十一時成けん、本宅の方とひ參らせしに、例の隱れ家にといふ、まだ目覺給はじ起し參らせんといふに、いなさてはちと早過たることよ、今しばしこゝに置給へ例覺給はんころにこそといへど、いな〳〵といひて下婢は出去りぬ、しばしして立歸りていふ、とくに覺給ばかなたへといふ、なるべくんば此方にてといはまほしけれど、いひかねてしたがふ、君は

木綿のふるびたる綿入の上にどてらといふものはふりて白か鼠のしごき帯し給る打とけ姿に、さしむかはなんおのづから汗あゆるこゝちす、下婢も歸り行ぬ、例の人なき小室の内に長火桶一ッ間に置てものがたりすることよ、我が學びの友達あるは親戚の人々なぞに聞かせ奉らんに何とかはそしられん、あやしかるべき身にも有哉、ましてかたみに語り合ふことなどいとまばゆしかし、新作せんとおもふ小説の趣向筋立などをかたりてをしへを乞はんとてのすさび成けり、君まづの給ふいかなる趣向かつきたまひし承らまほしうといふ、心に決しては來りしものから何となくはなじろみて爪くはるゝ心地しけるぞわろき、いとなめげなることなるにあからさまにはとも一度は思ひはべりしながら、文にはことに意を盡しかねてみづから參り侍りとてかたりいづ、骨子は片戀といふことにて侍りとて、其筋だてなどかたる、そはいとよかるべうとて、其くだりはかく〳〵せばよからん、こゝはかくせばなどの給ふ、あやしうもの語りの口とけて、いでやこの戀斗あやしきものはなし貴きも賤しきも賢なるも愚なるも其わいだめなき物也けり、されども今のよには其路をもて人をたぶらかし、世をくらますなんいと多き、城をかたむくるは女のみにてはあらざりけりなどの給ふ、奸譎なる美少年の貞淑なる良婦をたぶらかす談、利根の紳子が良家の處女が操をもて遊ぶてふ談などあり、さていはくかゝる類ひはみな其人を愛すにはさらはず害すにて候也、誠の愛といはんからには其女が一生の大計を思ひはかりて安全なる良人を求め得させんことをこそ思ふべけれ、さて其人を選んに、世人が愛は猶我が思ふ意に滿たず、世人が敬は我が敬に過ぎず、世間しといへども人多しといへどもかの女を敬愛することは我に過るの物はあらじ、

さらばかれが安全の極り幸福の生涯をすぐさんこと我ならで誰かはなど思ひ到りたるこそ鼠の愛なれなどの給ふ、かくて十二時にも成ぬ、ひる飯本宅よりもて來たりぬ、辭しかねてこゝにてたべぬ、君はなぞさは打とけ給はぬ、おのれはかゝる粗野なるをの子なれど恐れ給ふにはたらじをなどいふに、などかはさること侍るべき、こはおのれが生ねにこそ侍れ、年久しく相馴たる友はみなしることにて、かくかたくなゝるが本色にさふらふといへば、君も少し打笑ひてさることにやされば猶ぞかし、おのれもみる所こそかはれ心は君がの給ふごとなるものに侍るを哀れ友とし給ひて隔なくものし給へよといふ、そは今はじまりたることかはおのれはたゞ師の君とも兄君とも思ふなるをといふに、君また少しものいはず成ぬ、少しありて哀我身こそ幸なきものなれ……

日記（二十五年一月—二月）

まつ人、をしむ人、喜こぶ人、憂ふる人、さま〳〵なるべき新玉のとし立返りぬ、天のとのあくる光りにことし明治廿五といふとしの姿あきらかにみえ初て、心さへにあらたまりたる樣なるもをかし、人よりはやくといそぎ起て若水くみ上るもうれし、よべは雨いたくふりて風さへにすさまじかりしを名殘なく晴渡りて大空の色のみどりなるに、いかのぼりの聲のいさましきも、つくばねののどかなる聲も、まじりて聞え渡れる何となくうれし、きのふより氣候とみにことなりて氣味わろきまであたゝかし、地震のこと心にかゝればなれと、埋火のもと遠くはなれて梅花の風軒ばにゆるく吹く、か斗の新年またせしことなしとて人々よろこぶ、いつも雪の樣にみゆる霜の今朝しも置たりといふ色だになければ、

いか斗のどかに立し年ならむ霜だにみえぬ朝ぼらけかな

とおもはれぬ、雜煮いわひとそくみなど例年の通りなり、化粧などしてさて書初めをなす、國子は日出山をしたゝめたり、おのれのは

くれ竹のおもふふしなく親も子ものびたゝんとしの始とも哉

など樣のことをしたゝむ。山下直一君、久保木秀太郎年頭として來る。母君近隣に祝詞のべに參りたまふ。午後藤林房藏、西村釧之助、志川とくの二君參る、岩佐君門禮にて歸宅、夫より姉君、田部非參る、小時にてかへる。小宮山より年始狀ながらおぶん一條のはがき着、喜多川君よりも年頭狀來る、日沒後國子は裁縫、おのれは書見をなす、お寶とよぶ聲今宵より聞ゆるもをかし、初夢といふらんからに今宵みるこそ誠ならめど、ふるくより明日のものと成り居れるを、進みゆくよのしるし夢取こしてみよとにやをかし、ふしどに入しは十二時斗なりけん、時計直しにやりてわからねどねたり。

二日　曇天。早朝より年始着の三ツ揃へ仕立にかゝる。訪人まれなる宿のならひあら玉のとしともいわず、いと〳〵ものゝ靜かなるもとめねば閑成けり。午後より小宮山來る、おぶんの物がたり四時頃まである。今日年頭にこし人は土田恒之助ならびにもと師の君がり仕へたる玉とよぶ女今二人三人成けり。今宵も裁縫に夜をふかしたり。

三日　曇天。よべは雨少し降たれど今日の空は夫ほどにもあらず。午前綾部喜亮參る。午後上野伯父君丹に三枝新君まゐらる、三枝君母君と伯父君に年頭として金子を送らる。種々はなしあり、一あし伯父君先にかへる、日沒すこし前新君歸宅。この夜もよべにおなじく、ふけては雨に成りけり。

四日　曇天。年頭者は藤田君、菊池君のみ、野尻君、澁谷君より年頭狀着、野尻君にはすでに差出したればよし、澁谷ぬしはこそ赴任以來住家知れ難く、さりとて人にとはんも少し間のわるきに、思ひなから不沙汰なしたるに先よりはこと更に年賀いわれたる、答禮せずはとて直に返事を出す。午後甲州後屋敷村より奇異なる年頭狀つきたり。今日までに諸々よりこし年頭狀、熊ケ谷より山下君、甲府より伊

庭君、皷阜よりまき子君、晋羽の前島君など成り、此方よりさし出したるも十五通斗はあるよし、今よりも猶四五軒はくるべしなどみな〳〵いふ。今日もひねもす裁縫、猶夜更るまでもなしたり。

五日　曇天成しが十時頃より晴になる。佐藤梅吉參る、一酌にて歸宅。午後より田部井參る。おなじくこの夜も裁縫よふかして一番鳥の聲聞てふしどに入たり。

六日　曇天。折々に雨さへふる、風もいと寒かり、寒のいる日なりときけばことわりなる。三ツぞろへの綿入物をきる。この夜もおなじく三時まで裁縫。

七日　曇天寒し。明日はかならず降りなるべしなど國子などのいふはおのれが年頭にまわらむと定めたる日なればいやがらせんとていふなり。今日は目に立たる來客もあらざりし、稻葉君親子、おく田の老人の二組のみ、日暮迄に裁縫は仕終へたり、國子と共に入湯す、半井君に奉らむとし玉ものかひにとて本郷三丁目まで行、空いとよく晴て風少し吹初ぬ。山崎君、横山君、雨宮君より年頭狀つく。この夜綾部喜亮、久保木一條に付ものがたりにくる。おのれらはあすの仕度かれこれして夜をふかしたり。

八日　早起空打あふげばいとよく晴て曙斗のくもゝなし、うら〳〵とかすみたる樣なるが誠に春とのみ覺ゆ、出がけの支度かれ是するまに、綾部喜亮久保木同道して參る、佗濟になる。歸宅直に國子は神田邊へ、おのれは車ものして先西村君へとて行、茨城より伯母君參られたりとて面會す、明日は歸國せんとおもふに是よりきく坂迄參らんとの所なり、そなたより給はずば逢がたかりしとなどいひて嬉しげに物がたりす、出て師君へ行、病中且來客なればと下女のいふにをして對面もいかゞ哉、さらば御老

人はといふに只今ねぶりに付きたまひし所なりといふにわびて、更ば又こそとてかへる、みの子君を新小川町にとふ、あがれよなどの給ひつれど先をもいそげばとて暇ごひして出づ、車いそがせて平川町半井うしの本宅に來てみれば、門戸かたくとざしてかし家のはり紙なゝめにはられたり、先むねとゞろかれて立よりてみれば、半井氏御尋の方は六丁目二十二番地小田何某方まで參られたしとなり、さらばとて又同家へ行、半井ぬしは何方へにかと訪へば、下女に似たるをな子打笑みながらに奥に入たり、引違へて出來たるは主婦にやあらん三十斗の人我がとふに答ていふ樣、うしはさる頃より旅行して只今は留守に侍り、御用ならばこゝにいひ置給へといふ、御旅行はいづ方へかと又とへば、只地方へと斗いふ、今は尋ぬるも無益しとおもへば、只おのれは樋口と呼ばるゝものに侍り、別しての用なるならねど御年頭の御禮にとて參りつるなれば御歸京のふし其由申つぎ給てよ、又御手數なるべけれど御歸京の報をもねぎ奉るになんといひて出ぬ、なぞの御旅行か、まさしく御隱れ家になるべし、ぶしつけは覺悟なり、頼み參らすことといと多かるをいかで對面せずにはとて、例のうら家をとひ寄たり、まづ庭口の方よりみればゑんがはの障子新たにはりかえて物何となくあらたまりたる樣なるは、もしよの人の住家にかはりたるかなどもうたがわる、格子戸のもとにたちてあまたゝびおとなへど誰れいらへする人もあらず、さては留守にやとおもへど、火鉢にたぎる湯のおとなど人なき折のさまにもあらず、うちにかとみれば格子戸の尻にせんさして出入かたく禁じたり、こゝ迄來て入れられざるも、何となく物たらぬ心地のするに、いかで對面給はらずやとさま〳〵にいひ入たれどかひなし、水口の戸の明はなしあるにいさゝか力

を得てそこよりいりぬ、さしのぞけばさま〳〵の家財つみ重ねたる納戸めきたる所、奥のかたにうしはをわすにかとおそる〳〵ものぞきたれど、人ありげにもみえず、留守なる所に上り居らんも後の人ぎゝいかゞなるべきかといそぎ立かへらむとす、さるにても參りしかひには、奉らんとてもてきしものだにおかばやと思ひ寄り、臺所の板の間なる所に土產の小箱さし置て出ぬ、車にのりて歸る道すがらも思へばあやしき事をもなしたるかな、我身むかしはかゝる先ばしりたる心にもあらざりしを年たけると共におもての皮厚く成るなり、はしたなくもなりつることよ、かゝる筋のこと世の人もれ聞ましかば何とかいふらむ、あやしうなき名などたてられなんもしるべからず、いかゞはせんなど思ひ出づれば心は身をせめていとくるし、家に歸りしは二時半頃なりし。宮塚の伯母君參り居られたり、留守に姉君丼に森照次君參られたりといふ。宮塚ぬしと暫時對話、西村の伯母君參る、おのれの早歸りにおどろき給ふ、夫より日沒迄西村伯母君談話、其中に國子歸宅、母君伯母君を送りて表町へ參り給ふ。この夜日頃のつかれと遠路のつかれにや、疲勞ことに甚だし、さらに何事をなすべき心地もせねど、半井うしには是非一書參らずばすみがたかるべしとてしたゝむ、幾そ度書直しけんと角に心にもいらず、からうじて書終へたるはよみ返してみるに何となく末におそれの種やまかんとおそろしくさへ成て、狀袋にいれたるまゝ便にもたくせず、余の事に移りぬ。母君九時頃歸宅。十二時まで詠歌す。

九日　早起小石川初稽古なればいそぎ出づ、さるにても西村の伯母君はいかにぞ、歸國やし給ひけん、道筋なれば訪奉らばやとて寄る、今日はたゝんか、いかにせんかなど樣にものがたらる。少時にて師君のもとに行、昨日對面をこはざりとして師君大立腹なりと下女報ず、光長君來り給へり、師君に昨日の理由をのべて詫をなす、來會者十名斗なりし、諸君歸宅は四時少し前成けん、夫より暫時二階にておのれが事に付て談話、半井君一條をものがたる、夫につきての心得かに角とをしへ給ふ、小說みばやわれにも又考案ありなど心切にの給ふ、日沒暇ごひして出ぬ。この夜よりおのれが不常ぎの綿衣仕立にかゝる。一時床にいる。

十日　晴天なれば今日は安達に年頭として行かばやと國子と共に支度をなす、父君墓所にも年始に參らざらんなん心ぐるしきに、今日こそはとて、まづ安達より先に行、少時にて築地に參り墓參、夫より直に歸宅、姉君のもとに年賀いひに行歸宅、小宮山おぶんの兩人參る、日沒前迄居たり。この夜はなすことといと多くて、ふしどにいりしは一時なりけん。

十一日　晴天、寒し。母君四谷上野君に參らる。半井君よりはがきつく、旅行にも何にもあらず以前の隱家にありといふ、おもひしことよと打笑ふ、さるにても文出さゞりしこそ心安かれ、よくも書そこねなしたること哉と我ながら嬉し。午後母君歸宅、その前に久保木及び田中君來訪ありたり。今日はひねもす何ごとなしに一日を終へぬ床にいりしは十二時成けん。

十二日　早起、雪ちら〳〵と降いでぬ、見るまに一寸斗も積りたるは極めて大雪になるべきなめりなどいひ合ふ程に、十時斗の頃には名殘なく晴わたりて日のかげさへもれ出ぬ。午後より雪たゞ消にきえて雨だりのおと軒ばに茂し、暮てよりは又雨に成ぬ。此夜より又小說著作にかゝる。ことの外になまけ

たり。

十三日　晴天。圖書館へ行く、九時頃より家をば出づ、太平記、大和物語をかりる、但し大和ものがたりはみずして、太平記のみ閲覧す、三時頃出館、家にかへる。母君の爲に按摩を雇ふ、舊幕臣なりとて述懐のはなしあり、日沒後母君なほよろしからずとておのれ又按摩を爲す。十二時床にいる。

十四日　晴天也。母君神田邊に年始に趣き給ふ。午前のうちに綿入ものをなす、午後より作文にかゝる。日沒後より歌をよむ、宿題五ツ、十首を詠ず、十二時床にいる。この夜濱田何某夜にげの奇談。

十五日　早起、小豆がゆの節行ふ、午前髪あげをす。午後より作文。夕刻吉田君年頭として參らる、夜食を出す、八時頃まで談話、國子附木店まで送りて行。十二時床にいる。

十六日　小石川稽古なり、早起行、みの子君すでにあり、例のかるた君入給はでといとさうゞしきに是非をいはず來給へかしなどかへすゞいふ、師君も行べしなどの給はするに、さらばとて宅へは狀をさし出してこゝよりともなはる、來會者十七人斗、無禮講の一座中々にわづらはしかりしを終りしは三時斗成し。この夜小震あり。この日堤よし子君入門。

十七日　九時頃までねむる、朝飯を終てやがて車給はりて歸宅す。母君大立腹なりといふ、ひたすらに先非を後悔す。母君は小林君よりかけて三枝へ年頭にとて赴き給ひし留守なりけり。山下直一參る、晝飯を出す。二時ごろ歸宅、廣瀬ぶんへはがきを出す。三時頃母君歸宅。山下直一より借りたる早稲田文學通讀、よべ夜更しをなしたるに風をや引けんせき出てたえがたければわびていと早くふしどに入たり。三時頃大震。

十八日　天氣晴朗。吉田君にはがきを出す、みの子君親戚の緣談一條につきてなり。母君望月へ趣きたまふ、廣瀬ぶん參る、ひる飯を出す、種々談話、三時頃歸宅。この夜も早く打ふしたり。

十九日　天氣快晴。母君下谷邊年頭にとて午前より出かけ給ふ、風邪ことに甚だしければ打ふす、服藥などす。此夜ねつ甚だし。

廿日　快晴。母君ぶん一條に付常總館へ趣き給ふ。おのれは猶病床を出ず、今日も一日打ふしたり、母君歸宅ぶん既に監視換をなしたること、常總館主人かはるべきはなしあり。食事兎角すゝまず、此夜も服藥して寢たり。濱田の妻子來る、九時頃歸宅。

廿二日　快晴、寒氣甚し。明日は小石川稽古なるに、今日打ふし居らば母君又とめ給はんも斗りがたくて、早朝よりおくる、晝飯など味はなけれど常の通に食したり。御歌會始、御製並に豫撰の歌ども今日の新聞紙上に出たり。することなしに打ふしたり。

廿三日　天氣快晴なり。おもむろに髪など結びかへて午前十時といふに家を出ぬ、師のもとにて來會者すでに十人斗ありし、伊東夏子ぬしも風邪にて參り給はず、小出君及び小笠原政德君參會歌話あり、吉田かとり子君落車の災難あり、今日は來會者いと多かりし、日沒終會、師君より鮭甘酒漬一箱給はりて歸宅す、田中君より新小說かりる、歸來閲覧に一夜を更す。

廿四日　天氣快晴。朝來手紙を二通したゝめ、午前丈習字をなす。午後より小說閲覧。

廿五日　無事。

廿六日　無事。

廿七日　曇天。午前例の通習字、午後より小說稿にかゝる。この夜なす事なしにふしたり。

廿八日　早起、曇天、あたゝけし。終日小說從事。

廿九日　曇天。

卅日　晴天。小石川稽古歌合ありたり、歸宅日沒。上野君母子來たりし由なり。

卅一日　しるす程のことなし。

二月一日　無事。

二日　無事。

三日　半井うしへはがきを出す、明日參らんとてなり。しばらくにしてうしよりもはがき來たる。明日拜顏し度し來駕給はるまじきやとの文體なり、こはおのれが出したるに先立てさし出し給へるなるべし、かく迄も心合ふことのあやしさよと一笑す。

四日　早朝より空もやうわるく、雪なるべしなどみないふ、十時ごろより霙まじりに雨降り出づ、晴てはふり〳〵ひるにもなりぬ、よし雪にならばなれ、なじかはいとふべきとて家を出づ、眞砂町のあたりより綿をちぎりたる樣に大きやかなるもこまかなるも小止なくなりぬ、壹岐殿坂より車を雇ひて行く、前ぼろはうるさしとて掛させざりしに風にきをひて吹いるゝ雪のいとたえがたければ傘にて前をおほひ

行くいとくるし、九段坂上るほどにはり鍼通りなどやゝ道しろく見え初めぬ、平川町へつきしは十二時少し過る頃成けん、うしが門におとづるゝにいらへする人もなし、あやしみてあまたゝびおとなひけれど同じ樣なるは留守にやと覺えて、しばし上りがまちにこし打かけて待つほどに、雪はたゞ投ぐる樣にふるに、風さへそひて格子の隙より吹入るゝ寒さもさむし、たえがたければやをら障子ほそめに明て玄關の二疊斗なる所に上りぬ、こゝには新聞二ひら（但し朝日、國會）配達しきたりたるまゝにあり、朝鮮釜山よりの書狀一通あり、唐紙一重そなたがうしの居間なれば明けだにせば在否は知るべきながら、例の質とて中々には入りもならず、ふすまの際に寄りて耳そばだつれば、まだ睡りておはすなるべしいびきの聲かすかに聞ゆる樣なり、いかにせんと斗困じたる折しも、小田よりなりとて年若きみづしめ郵便をもて來たりぬ、こはうしの此頃世にかくれて人にあり家しらせ給はねば親戚などの遠地にある人々より書狀はみな小田君へむけてさし出し給ふなるべし、この使ひもこれ持來たりたるまゝうしをば起しもせでよろしくなどいひて歸りぬ、一時をも打ぬ、心細くさへなりてしわぶきなどしば〳〵する程に、目覺給ひけんつとはね起る音して、ふすまはやがて開かれたり、寢まきの姿のしどけなきを恥ぢ給ひてや、こは失禮と斗いそがはしく廣袖の長ゑりかけたる羽織き給へり、よべ誘はれて歌舞伎座に遊び一時頃や歸宅しけん、夫より今日の分の小說ものして床に入しかば思はずも寢過しぬ、まだ十二時頃と思ひつるにはや二時にも近かりけり、など起しては給はらざりし遠慮にも過ぎ給へるよとて大笑しながら、雨戸などくり明け給ふ、あなや雪さへ降り出でたるにさぞかし困じ給ひけんとて勝手のかたへ行、手水など

記　日

せんとなるべし、一人住みは心安かるべけれど、起るやがて車井の綱たぐるなど中々に佗しかるべきわざかなと思ひ居たるに、臺じうのといへるものに消炭少し入れて其上に木片の細かにきりたるをのせてうし持て來たまへり、火桶に火起し湯わかしに水入れて來るなどみるめも佗しくて、おのれにも何か手傳はし給へ、お勝手しれがたければ教へ給ひてよ、先づこの御寢所かた付ばやとてたゝまんとしたるに、うしいそがわしく押とめ給ひて、いな〳〵願ふ事はなにもなし、それは其儘に置給ひてよと迷惑げなるにをしてはいかゞとてやみぬ、枕もとにかぶき座番附さては紙入れなど取ちらしあるに、紋付の羽織糸織の小袖など床の間の釘につるしあるなどろうがわしさも又極まれり、昨日書狀を出したる其用は今度青年の人々といはゞいたく大人顏する樣なれど、まだ一向小說にならはざる若人達の研究がてら、一つの雜誌を發兌せんとなり、世にいはゆる大家なる人一人も交えず、腕限り力かぎり仆れて止まんの決心中々にいさぎよく、原稿料はあらずともよし、期する所は一身の名譽てふ計畫ありて、一昨夜相談會ありたるまゝこは必らず成り立つべき事と思ふに、君をも是非とたのみて置きぬ、十五日までに短文一編草し給はずや、尤も一二回は原稿無料の御決心にてあらまほしく、少し世に出で初めなば他人はおきて先づ君などにこそ配當いたすべければなどくれ〴〵の給ふ、さりながらおのれら如き不文のもの初號などに顏出しせんは雜誌の爲め不利益にや侍らむとて辭せば、何としてさることやはある、今更に其樣なこと仰せられては中に立てそれがし甚だ迷惑するなり、先方にはすでに當になしたることなればなど詞を盡して仰せ給ふ、さばれよろしく取斗らひ給ひてよ、實はこの頃草しかけし文御めにかけばやと

一今日もて參りぬ、完成のものならねどとて持てこし小說一覽に供す、よろしかるべしこれ出し給へ、おのれは過日ものがたりたるもの一通の文としてあらわさばやと思ふなりなどものがたらる、其中うし隣家へ鍋をかりに行く、とし若き女房の半井樣お客樣かお樂しみなるべし御浦山しうなどいふ聲、垣根一重のあなたなればいとよく聞ゆ、イヤ別して樂しみにもあらずなどいふはうしなり、先頃仰せられしあのおかたかと問はれて左なりといひたるまゝ、かけ出して歸り來たまへり、雪ふらずばいたく御馳走をなす筈なりしが、この雪にては畫餅に成ぬとて、手づからしるこをにてたまへり、めし給へ盆はあれど奥に仕舞込みて出すに遠し、箸もこれにて失體ながらとて餅やきたるはしを給ふ。ものがたり種々、うしが自まんの寫眞をみせなどし給ふ、暇をこへば、雪いや降りにふるを今宵は電報を發してこゝに一宿し給へと切にの給ふ、などかさわることといたさるべき、免しを受けずして人のがりとまるなどいふ事いたく母にいましめられ侍ると眞顏にいへば、うし大笑し給ひて、さのみな恐れ給ひそ、おのれは小田へ行てとまりて來ん、君一人こゝに泊り給ふに何のことかわあるべきよろしかるべしなどの給へど、頭をふりてうけがわねば、さればとて重太君をして車やとはせ給ふ。半井うしがもとを出しは四時頃成けん、白がひ〳〵たる雪中、りん〳〵たる寒氣をかして歸る、中々におもしろし、ほり端通り九段の邊、吹かくる雪におもてもむけがたくて頭巾の上に肩かけすつぽりとかぶりて、折ふし日斗さし出すもをかし、種々の感情むねにせまりて、雪の日といふ小說一編あまばやの腹稿なる、家に歸りしは五時、母君妹とのものがたりは多けれどもかゝず。

六日　小石川稽古。
七日　ことなし、但し山下君、西村君、荻野君、石井來給へり。
八日　ことなし。
九日　奥田老人病氣の報あり、母君直に參り給ふ。國子と共に同事に付てさま〴〵相談す、荻野君來給ふ。朝日新聞を持參したまふ。原町田、澁谷へ書狀さし出しくれ度とてはがきを依頼さる。日沒後母君歸宅、老人は左までにもあらざるよし。此夜姉君秀太郎來る、十時頃まで談話歸宅。母君國子も今宵はねむからずとて、二時頃まで起居給へり。

四谷右京町二十七番地　上野兵藏
麹町平川町三丁目十五番地　半井洌
同町六丁目二十二番地　小田久太郎
越後國南蒲原郡三條町　澁谷三郎

和歌四天王の著名の歌

頓阿
月やどる澤田のおもにたつ鳴の氷よりたつ明方の空

兼好
手枕の野邊の草葉の紅枯にみはならはしの風の寒けさ

淨辨
滝江の氷にたてるあしの葉にゆふしもさやぎうら風ぞふく

廣運
靡結ぶ山のすそのゝ夕ひばりあがるもおつる聲かとぞきく

につ記（二十五年二月—三月）

二月十日　朝來机邊にあり。午後母君奥田へ見舞に參り給ふ。日沒少し前小石川より郵便來る。師君風邪にて一人にて歩行も出來難しとのこと、早速參くれ度趣故、直に支度して行く、師君いたく喜び給ふ、逆上甚だしくともすれば本心をも失なひやせんと思ふ樣なるに種々後事など托しておかばやとて呼つる也とて、心細げに泣き給ふ、種々談話、君が來給ひしより心落居てや少し快よく成たる樣也との給ふ、藥などすゝめて十時にも成ぬ、明日又とて床にいりし。

十一日　快晴。師君大きによろしき方也。下婢のことに付て伊東家一條のものがたりあり、右らにつきおけいのもとへ使ひに行く、其もやうに依りて更に伊東君へ行く、岩松のもとより車、伊東君にて暫時對話、但し夏子君は他行中なりし、歸路佐々木君にて藥取をなす、午後水野せん子君參らる、三時過る頃宅より國子迎ひに來る、新參の下婢のおのれと見違へたる奇談あり、夫より直に暇乞して歸る、四時成し。上野房藏來たりたるよし。國子それより吉田君へ行く、歸宅せしは日沒後なりし。吉田君より梅と水仙のいけ花もらひて來る。此夜國子日記の書き初めをなしたりとて見せる。此夜二時床に入る。

十二日　雨天。父君の命日なれば母君寺參りし給ふべき筈なりしが見合せにす。小説十五日までに半

非うしへ送べき約なるに期日も近づきぬ、まだ上の卷評にて中下とも殘れり、さらば明日の稽古は斷りいひて休まばやと師君のもとへはがきを出す。此夜小説少しよみて母君に聞かし參らす、思ふことおもふまゝにもならで今宵もいたく怠りにけり。

十三日　晴天。朝來小説にかゝる、終日從事、此夜終夜、曉がたに少しねむる。

十四日　大雨。終日小説に從事し、燈明に及で全備す、半井うしへはがきを出す、明午後參らんとて也、重荷おろしたる樣になりて、今宵はいたく安心す。

十五日　雨はやみたれど風寒し。午前に家を出で、師の君がり先行く、伊東君老母歸宅されんとする所成し、師君これより佐々木君へ參り給ふよし、暫時居りくれたしとて出かけ給ふ、二時近くなるまで歸宅なし、おのれも麹町行きに心いそがれて留守居の婢女に依賴して暇乞す、九段坂上より車にていたる、半井君方に來客ありげなれば軒ばにしばしたゝずみ居しにうし窓より面を出し給てお入あれ心配の人ならず、我が兄弟同樣のものゝとの給ふ、入てみるに何といふ人かしらず年若く色黑き人なり、小説一覽に供すいたくほめらる、其人も種々にいふ、雜誌の名はむさしのとつきたるよし、運くも來月一日頃までには發兌すべき見込也といふ、男子の方は一月交代のつもりなれど君のみは連月に願ひたしなどにいはる、うしが新著の草稿みせ給ふ、小がさ原艶子嬢といふ人物の名ありこれは心づけて直し給へなどいふ、小時にて歸宅。芝兄君病氣にて困窮甚だしといへるに金少し通運便にて送りたりしが今少し送られたしとはがきにていひこしぬ、さらば明日おのれが參らんなどいふ。久保木參る、國子とおのれとが

すもじかひに行く、留守にて母君腹痛のこと、歸宅早々手當をす、夜を盡してわるかりし。この日總選擧投票當日なれば市中の景況いづ方も何となく色付きたる姿なりし。

十六日　大風、寒氣甚だし。母君は森照次君がり金子かりにと趨き給ふ。おのれは芝へ行く、萬世橋より鐵道馬車それより車にて行く、貧家のさまは思し如く成しかど、病氣はさまでつよからず大安心す、持參の金子送る、種々物がたりひる飯こゝにてたべぬ。三時頃歸宅の途につく、新橋より又馬車、歸宅せしはやゝ日沒に近かりし。母君森君の方首尾よかりし物がたりをし給ふ、一同よろこぶ。この夜原町田澁谷君より返書來る。

十七日　早朝結髮して家を出づ、荻野君を中徒町の旋宿にとふ、物がたり種々書物をかりる、夫より圖書館へ行く、三時歸宅習字をなす、日沒後入湯、さかなかひに行きし奇談あり。

十八日　晴天、寒風おもてを切るが如し。森君に禮ながら借用金に行ばやとて支度す、母君と共に家を出しは九時成けん徒歩林町にいたる、森君は留守成し、小君に種々談話證書したゝめて八圓かりる、昨日小林君まゐられたるよし。同家とう雜のはなし及び栗塚國會議員同難にかゝりたるはなしなどあり、ひいて小說著作のことに移る。畫工竹内桂舟は小君が甥の師なるよし、折々は參る事もあり、同人は硯友舍連の一人なれば美妙齋紅葉漣各君とも入懇なればもし同人らに紹介などを要せらるれば其勞とるべしとなり、右關係の事どもものがたりて同家を暇乞せしは十一時成し、梅が香聞ながら藪下より參らんとて根津神社をぬけてかへる、風寒けれど春はは也、鶯の初音折々にして思はずてあしとゞむる垣根あり、紅梅花をかしきに目をうばはるゝ少なからず、家に歸りしは十二時頃成けり。夫より新著の小說にかゝる、稻葉君來訪正朔君の衣類もらひ度とて也。日沒少し前三枝より出產祝ひの赤飯來る、夕飯ことに賑々しく終りて、諸大家のおもしろき小說一巡母君によみて聞かしまいらす。國子が日記を見てよく書きたりなどいふ、夜更て雪降り出づ。おのれが臥床に入しは二時ごろ成けん。

十九日　母君先おき出給ひて妻戸おしたまふ、さてもつもりたる哉尺にもあまりつべし、まだいくばくか降らんとすらむなどの給ふは雪のことなめりとうれしくてやをら起ぬ。國子をも起して共にみ出るにあめもつちも木立も軒ばも白妙ならぬ方なし、綿を投たる樣にふるさまいといさましく、ならば角田川あたりに一葉をうかべたらましかばなど風流がりて笑はれぬ。朝いひしまひて後も中々にやまず、待人もなき宿ながらせめて這入だけも道あけばやとて國子と共に支度のみはいさましくして雪かきをす、尺といひて二三寸はあまりつべし、近來覺えぬことなど語り合ふ、終りてより習字せばやとするに手ふるひてせんかたなし、力業する人の手かくことものうくするは斷りぞかし。荻野氏より借りたる雜誌並に山東京山編のくもの絲卷通讀、朝日新聞の記事少し見て晝飯にす、午後より早稻田文學中德川文學、しるれる傳丼にまくべす詳釋、徘諧論など四五册通讀、岩佐君來る、母君新平のもとへ參り給ふ、日に沒後歸宅せらる。一時臥床に入る。

廿日　晴天。遲し寢過したり、朝の間に蜘の絲卷よみ終る、雜書少し見る、夫より習字。姉君來る、つ雜話、午後結髮して師の君がり行く、田町にて田中君の橋道守君發會へ赴き給ふにあふ、暫時立話し、

師君病ひよろしからずとのよし傳へ聞きて小石川へ行く、師君大よろこびのこと、種々明日の手傳ひしてしるこの馳走などにあづかりて歸る、荻野君參り居られたり、晩飯馳走す、おのれらは仲町にかひものせんとて一あし先に家を出ぬ、歸宅は日沒後成し。此夜短册したゝめなどして床に入る。

廿一日　晴天。十時家を出づ、小石川へ行く、師君と共に車をつらねて會席へ趣くみの子君すでに參り居られたり、種々談話、文雅堂參る、四人ひるめし、其内加藤君參る、來會者は四十人計の見積り成し所追々に增加して五十人にもなりぬ、此日の點取題、雪後春月、黑川眞賴大人、三田詳光君、小出粲君の點なりし、黑川君甲はかとり子ぬし、小出君甲は佐藤東君、三田君の甲黑川大人が乙はおのれのなりし、景品など給はる、諸君歸宅後別に小宴を開きて佐藤、井岡、田中三君並に師君おのれなど歌話あり、終會は八時頃成き、車を小石川によせて勘定のはなしなどす、又茶菓を給はりなどして歸宅す。此夜は何ごとをもなさずして床に入る、夜深く雨ふり出づ。

廿二日　雨天、寒し。午前はなし得たることもなく、午後より著作にかゝる、されども大方は紙と筆にむかひたるまゝとりてかくまでにはいたらざりき。和歌五題計よむ、風邪にやあらん、頭痛たえがたければ此夜は早くふしたり。

廿三日　曇天。朝のまに江崎君並に兄君へ出す郵便をしたゝむ。夫より小說原稿にかゝる此夜も早く床にいりたり、ねぶりかねて小說の趣向などたてる。

廿四日　曇天いとあたゝかし。朝來昨夜たてし趣向によりて筆をとる。田中君より明日かずよみなすべきに付參りくれ度しとて書狀來る。日沒後小說二三册よみて母君に聞かし參らす。夜に入りて强風。

廿五日　風やまずいと寒し。髮ゆひてさて家を出づ、戸田君先參り居らる、伊東君は何ごとかさしつかへありて參り給はず。かず詠題三十、四時頃に終る。小說のものがたりして田中君自作の小說二册計みせ給ふ。日沒頃車を給はりて歸る、十一時頃床に入る。

廿六日　快晴。

廿七日　小石川稽古也、强風寒氣はなはだし。早朝より行、前田君より來たりし歌に返歌したゝめておくる。三田彌吉君夫人入門せらる。四時頃歸宅す。

廿八日　早朝圖書館へ趣く。此日も强風寒し。荻野君旅宿を訪て書物を返しなどせしに竹洲君原町田へ一昨日參られたるに實君計なりし、暫時對話夫より圖書館へ行く、館内にて新潟縣人田中しをの女史に邂逅、禪學の事に付て談話、女は長岡の戸長の嗣女なるよし、良人は洋畫を業とするとか、女禪學に志深けれど地方の習慣女子をして就學の便を得せしめず、偶近方の寺院などに布敎の僧ありと雖も俚耳に入り安き小乘の淺薄なる事のみにて事大乘のうん奧に致らず望洋の思ひありといふ。今たび上京の便に任し原坦山君に敎へを乞はゞやと思ふなどいふ、該學に關する書物など取調たり、歸路同行して女史が池の端の寓居まで趣く、後日を約して立別れぬ。歸宅せしは日沒少し前なりき、この日野々宮君來訪されたるよし。

廿九日　ことなし。

三月一日　田中君より手紙來る、過日小說のことに付て新聞社の周旋依賴し置しに我が著作の小說一二回見度し其上にて相談せんといへる人あるよし、至急遣はさたしとて也、直ちに棚なし小舟に筆を下ろす。此夜一回丈書き終る、國子などの此月は必ず都合よかるべき也一日早々うれしき報を得たればなどいふ。

二日　午前髪をゆひて午後より新小川町に行く、田中君まさに各評の締切に成し所なりけり、打とけたる物語に長き日のくるゝも知らず、燭を取て猶談ず、晩飯の饗應受けてさて車にてかへる、日沒よほど過ぎ成けん。この夜は目立たることなく、只田邊君受持の雜陳二題よみて床にいる。

三日　雨天也。早朝田邊君に書狀出す。各評廻り來たる。選みの上長谷川君に送る。姉君晝頃に參らる、今日は上巳の節會なればとて白酒いり豆などとゝのへて一同祝ふ、棚なし小舟續稿にかゝる。外にことなし。

四日　雨天、暖かし。和歌七題十五首許よむ。小說稿いそがはし。

五日　雨天。早朝小石川稽古に趣く、來る人十名計成し、水野君鎭地菊間神社へ奉納の和歌をよみくれ度しとて則ち今日の點取にす、有松喜色なりけり、終りて後今一題詠ず、來る十一日梅見に行べき約束をなす、みの子君ある方より我が自作の小說見度しとて申來たれりとて今夜中に一回分遣はされ度といふ、趣向のあてもなけれどどうにか可成とてうけ合ふ、一同歸路につきしは四時頃成し、泥路步行いと難義なりし、此日前島君より女學雜誌をかりる。歸宅早々日沒まで通讀、夫より小說著作に從事す、

夜を徹してみなし子第一回稿終る。つまどのひまのしらむを見て暫時寢むる。

六日　雨天。十時起く、再び稿をあらためて郵便に付したり。小說著作、詠歌、習字などの日課を勉めて、夜に入ては讀書などをなす。十二時床に入る。

七日　連日の雨夜の間に晴渡りてうら〳〵と霞む朝のけしきいとのどか也。蕩々たる春風に庭前の梅花花びらみだれて薰れる雪の降くるに惜しみがほ　鶯のこゑなど我やどの春よの人に見せまほし。今日は半井うし訪はゞやとて母君に結髪をわゞらはしたり。晩さんの後ぞとて母君國子籠をたづさへて下りたち給ふはわか菜つまんとて也、世には金殿樓閣に住む人もあるべく綾羅錦しやうにほこるもあるべし、借問す綿衣三年改ためず破窓わづかに膝をいるゝに過ぎざれど優々たる春の光春の匂ひの身にも心にも家のうちにもみち渡りたる我が親子許たのしきものありや非らずや。さても今日も午前はなすことなしに終りて、晝飯たゞちに麹町へと趣く、我が半井うしへ行時として雨天か風かにあらぬは無し、今日こそ例にも違しなれど笑ひ居しに、家を立出る頃より容俄にさわぎ初めて九段坂のあたりよりあられまじりに雨すさまじく成りぬ、君のもとへつきしは一時過る頃成けり、門の戸押せどもあかず例の朝寢しておはすなるべしとおもへばからうじて明て入りぬ、みれば火桶に火あかくして湯などもたぎり居るにうにしは見え給はずこはあしきことしてけり、留守なる樣にとも思ひつれど其まゝに歸らんも殘りをしくてつしばしあるに歸り來給へり、湯あみに趣きしなりとていたく佗給ふ、先頃の人も居りたり、談むさしの記のことに及ぶ、連中に種々さわりありて發兌の日數かく計には延たれど、熱心の度は實に非常なるもの

にて柳塢亭寅彦の如きは原稿に金を添てまで出したしとのい氣組なり、其外右田年方は畫の寄附をなし、板木師は木の代丈も送らむといひしを堅く辭したり、小說雜誌の發兌日に月にしげくして濱の眞砂たゞならねどかく計熱心なるは未だ見し事も聞しこともあらずと書肆もいへり、此上は諸新聞にて廣告料丈寄附になしいんさつの職工が手間料を無代にし、數萬の觀客が定價の上に幾分の義捐をなすにさへいたらば眞に武さしの萬歲なるべしと大笑し給ふに、おのれも今一人もたえず笑ふ、大人また都の花も二千五百、難波がたも二千五百の賣れ高なれば、我むさしのは五千ほど世に流布させ度しとの給ふ、今一人のされば寅彦に文章を作くらして聲よきものを撰びて緣日又はかん工場前など樣の所に目立ちたる服裝をさせて節おもしろく讀賣廣告をさせなんはいかにといふ、おのれ曰く猶よきことあり、萬世橋などの袂に立ちて往來の人々に無料配付をなさば五千はおろか萬も五萬も世に流布すべしといへば一同大笑す、君が闇櫻は小宮山にもみせぬ、氏が說にはむさしのは君が所有のぬしたるべしとなり、一二いふべき所も有しが世の批評の爲にとて殘しおくと氏はいへり、畫は寅彦が意匠にて年方にゐがゝするつもりなればば左覺せよ、君が姓名を表はさぬを床かしがりていかなる人ぞ見たしなど人々のさわぐがをかしきぞと例のの給ふ、但し武藏野は十五日發兌のつもり、次號の原稿は廿日過ぎまでに送られたしとの給へり。昨日の事なりし、國子がいつはりの無き世なりせばいか計人の言の葉うれしからましの歌を反對によみて給へといひしかば、僞りのあるよなればぞかく許人のことの葉うれしかりけるといはゞいはなんとて笑ひしが、大人が詞に似合しきもをかし、三時にも成しかば又こそとて暇を乞ふ、今しばしまたるべし何か馳走をなすべきになど止め給ひしが空も漸く雲深くなる樣なればとてしひて歸る、歸路より段々に晴て家へつくほどには一點のくもなくなりしもあやし。奥田老人參り居られたり、晩さんを馳走す。關場君よりはがき來たり、國子に參りくれ度しとあれば何事かしれねど明日參り給へなどいふ。雜陳廻り來る、書うつして伊東君へ送る。此夜はいたく頭痛してたえがたければ早くふしたり。森川町失火ありたり。

八日　午前くに關場君へ行、ひる飯馳走に成りて午後歸る、悅子君實家の妹十歲なりとかいへるを中島師のもとに入門させ度紹介を依賴したしと也、同家より御伽草紙貸與さる、此日中は何ごとの日立ちたる仕事なくて、日ともしに成ぬ。風いとあらく吹き出づ。

九日　晴天。早朝より支度をなして小石川へ行く、月次會なり、暫時ありて田中君まいらる。今日の來會者三十八九名成し、島田政君も參られたり、點取題野鶯にて重嶺、恒久、信綱、安彦四君の點なり、恒久君の甲重嶺君、安彦君の甲恒久君、重嶺君甲安彦君成しかばこは誠に詮なしなどいふ、信綱君の甲はおのれ成けり、十一日梅見と定まる、相談種々、日沒一同退散、關場君依賴一條異議なくとゝのふ。

十日　曇天。武藏野雜誌次號に出すべき趣向のあらまし文して半井君へ送る、石井へはがきを出す、明日の天氣はいかならむ哀人は好天氣なれかしと待らむものを、我爲には降てくれよかし、友といへど心に隔てある高等婦人の陪從してをかしからぬことに笑ひおもしろからねど喜ばねばならぬこそ我が常

に屑しとせざる所なるものを、植半八百松の鹽梅も我が爲には何のものかは、母妹を弊屋に殘して一片の魚肉にも猶あかせ奉らぬものを、龍井戸の梅花を分けて橋本に一ばいの鯉こく何うまかるべき、人の愉快とする所は我が暗涙をのむの所なり、天ふれかし心あらばと打歎かれぬ。今日は終日心なやましくて何の仕出したることもなくて日沒に成りぬ。國子關場君に復命をもたらす、同家より報知新聞かり來る、夜に入りてよりおもしろき小說母君によみて聞かし奉る、其うち雨降出つ、萬歲ともとなへまほし。稻葉君夫妻、正朔君同道相談とてきたる、此夜一泊、十二時床にいる。

十一日　起出てみれば妻戸の際しろし、雪なりけり、さこそは梅見を約せし人々の落膽し給ふらむなど思ひやる。十時といふ頃より空は只晴に〳〵て雪のとくること烟の如く消てひる頃にははや道もかわきつらむと覺ゆ、前島君より手紙來る、今日はもとよりながらあすはいかゞ道わるくとも參り給ふべきにや、君まで我もなどありたり、おのれはやがてそを携へて師の君許おもむく、こゝにて返書を出す、晴天なれば明日參るべくとのこと也、初心の人の詠草直しなどして歸る。直に關場君へはがきを出す、暫時して同家よりはがき來る、行違ひになりたる也。

日記

（二十五年三月——四月）

十二日　日かげは薄けれど晴なれば梅見の催し實行すべきなり、我が家を出しは九時なりし、其際三枝信三郎君參る。師のもとにて一同そろふ、車を連て向島にむかふ、おのれは一人馳せ拔けて小梅に吉田君をいざなふ、既に趣かれし後なりき、臥龍梅に六花の淸楚たるを見て、これより徒步江東梅にむかふ、庭園廣濶樹風愛すべく、花は少しすがれたれど花香の袖に移つてあやなき咎をおひ給ふ君もなからずやとをかし、奥の亭に粗菜を味ひ給ひ鷄卵にうゑをやしなふなど高等婦人のいかにめづらしく喜び給ふらむ、嬉々たるよろこびの聲愛々たる眞の笑かゝる折にこそ人の情は見ゆるになん、この園より車にて木下川へぞおもむく、細流淸くなみをうかべて萬頃の水田まだ返さず折に交る麥生の若やかなるなど造化が自然の美を盡したる中を徐々としてはこび行かれぬ、をとうつたる老松の洒々たる間に紅白の香花すきて見ゆるはこゝろざす林なりけり、到りつきて見るに入口にほそき鐵にて門を設けたるこれ無からましかばと恨み也、前の二園何方劣りたるならねど、このうちに入るに及んで更にこゝの今一段まされるあるをしり得たり、花は今十分の香を放つて萬枝色ならざるはなく、ことに雨後の天色朗々として風なくあたゝかに、人はあすの日曜をと心に期すらむ、花下不風流の洋杖も見ず、くだ物の皮投打て

日記

あたら園内塵塚にする輩もなく、たまゝ見ゆるは一瓢に眞意を屬せしじつ德出立か、遊獵銃を肩に
する青年あるのみ、小亭のほとりにて三宮君の夫人同行にて遊覽したまふを見たり、暫時ありてこゝを
出づ、かた山君がしきりに名殘を惜しみ給ふもをかし、この園伊東君はいひ給へり紋付上下なりと、げ
に其評や當れるべし、今少し亂雜の植かたならましかばと思ふ、狹きあぜ道を幾筋傳ひて向島新梅屋敷
にいたる、こゝはいまだ早かりし、出る頃より天俄に陰雲をもてとざされぬ、車をいそがせて木母寺植
半樓に至る、こゝに一酌の間、遊戯種々あり、日沒に及んで歸路につく、堤にて師君に別る、家に歸り
しころには大雨盆を返す樣に成ぬ。

十三日　大雨。午後よりはれる、師君依賴の縫仕事にかゝる、夜を徹して從事す。この日稻葉君小石
川柳町に移轉す。

十四日　曇天。縫上りし衣類もて小石川に行く、師君としばらく談話歸る。稻葉君參り居られたり。
此夕べ新聞號外來る、陸奥農商務大臣依願免官、河野納鎌氏後任の報なり、但し陸奥君は宮中顧問官に
任ぜられたり。

十五日　晴天。今朝配達の新聞を閲し來たるに內閣の動勢定まらず、品川內務大臣職を副島伯にゆづ
りて身を宮中顧問に轉ぜられたるを始めとして、或は後藤遞信大臣冠をかけたるべしといひ、何某の大
臣辭表を呈出されたりといひ、物情紛々記者得意の筆をふるふ可き時機と見えたり。午後母君森君へ趣
き給ふ。其留守に稻葉君を尋ねて渡會といふ人本鄕より來る、もと千村方に居し職工のよしにて種々談

話、稻葉君が食言家なることを縷々として述ぶ、驚く可きこと一ツにして足らず、我も國子もあきれに
あきる、小時にして柳町へ向けて歸く、母君歸宅、それらの談話少しする程に同じく本所よりなりと
て又一人きたる、稻葉君につきてのはなしをなす、かゝりし程に村松老人あわたゞしく來たる、こは此
人々の我家より先に村松に行きてこのもの語をなしたるからにいたく驚きて、そを我家にも告げんとて
來られしなり、村松老人しばらくにて歸る、母君と國子と入湯に趣かる、引違にお鐵どの參らる、我れ
に種々の事問はれしかど、如何答ふ可きにやたゆたはれて深くはもの語らひもせざりき、母君もやがて
歸宅せらる、前よりのことに付て今よりは來訪無用なりお前樣ゆえ兩家にまでいたく迷惑のかゝることと
あればとて斷る、お鐵どの涙など流して辨解さるゝ母君もこゝろ弱くなき給ふ。おのれは聞くに堪かね
て次の間に退きさりぬ、同人歸宅。此夜もいたく怠りてはやく臥たり。

十六日　晴天。一點の雲なし。本妙寺にて種痘を行ふといふに我れもくに子も行ばやとて支度をなす、
兩人の結髮を終りて母君は奧田へ御用ありて趣き給ふ。おのれは聖學自在通讀、午後早々秀と太郎共に
種痘に行く。外に何事もなし。

十七日　晴天。みの子君發會也。十時頃より支度をなす、渡會といふ人來る、稻葉君のことに付てし
ばらく談話、其中に西村君來る、其人歸宅、おのれは直に家を出づ、師君のもとにて少し物がたりす、田
中君へ行しは十一時過る頃なりけん、今日の來會者豫定より稍多く廿六七名ありたり、點取題朝雲雀、
重頼君、鶴久子君の甲は伊東の夏子ぬし、三科子君の甲はおのれの成りけり、諸君の退散されしは五時

成けん、おのれも直に車にておくらる。此夜は何事もせずして臥したり。

十八日　曇天。十時頃よりは雨に成りぬ。姉君來訪さる、午後關場君並に中島師のもとより手紙來る、この手紙につきて近邊なる舊中島師かた下婢なりし今野たまかたに行く、これが返事のはがきをしたゝむる程に、思ひかけず半井うし來訪し給ふ、あたりを取片付るなど大さわぎ成し、我家に來給ひしは實に始めてなればなり、母君并に國子にも初對面のあいさつなどなすいとくだ〳〵し、居を本郷の西片町に移し給ひしよし、其報知がてらむさしのゝ事いはんとて也といふ、むさしのは種々延々になる事ありていよ〳〵明後廿日出版の都合なり、校正も廻り來たりしが我が轉宅の日成しかば君のもとに廻さん日間もなく我れ代理をなしたるにもし誤字脱字などあらばゆるし給へとの給ふ、茶菓を呈したる斗にて二時間斗ものがたらる、今しばしなどいはまほしかりしがいそぎ給へばえとゞめあえず歸宅し給ふ、母君も國子もとり〴〵にうわさす、母君は實にうつくしき人哉、亡泉太郎にも似たりし樣にて溫厚らしきことよ、誰は何といふともあやしき人にはあらざるべし、いはゞ若旦那の風ある人なりなどの給ふ。國子は又その母君の目違ひ也、表むきこそはやさしげなれあの笑む口元の可愛らしきなどが權謀家の奥の手なるべし中々心はゆるしがたき人なりなどいふ、母人何はしかれ半井うしが詞にかく近くもなれるに他には行く所もなし夜分など運動がてら折々に參るべければなどいはれしこそ當惑なれ、人の目つまにかかれば正なき名やたゝんなど杞憂し給ふ、國子さていふとに角に家の狹きなん不都合なる、あはれ今一間あらましかばか斗に心ぐるしからまじ、いかでこの隣りなる家こゝよりは少し廣やかなるをかしこに

家移りせんはいかになどいふ、おのれは言なきこと也、我友とする人は家の狹きひろき衣の餘と弊とをとはず、かざりなき詞かざりなき心をもてこそ交らめもしかしこは家せまし衣ふるびたりとて捨る人あらばそはをしむにたらずといふ、それはそれながらいかにもなれば心ぐるしきぞかしとてくに子は笑ふ。今日の半井うしが着服は八丈の下着に茶とこんのたつ縞の袖の小袖をかさねて白ちりめんの兵兒帶ゆるやかに黑八丈の羽織をき下し給へり、人わろしと聞く新聞記者中にかゝる風采の人も有けりと素人目には驚かれぬ。秀太郎來る、少し話して歸る。日沒後國子に日本外史の素讀を授けて、さて聖學自在の愚者の辨一章讀みて聞かす、母君のかたをひねりてふさせ奉る。一時床に入る。

十九日　雨天。小石川稽古也、早朝に至る、師君まだ朝飯前なりし、首藤陸三氏の女小間使となりて今日よりこゝにあり、名對面するも中々に心ぐるし、雛陳の開卷なれば寵子ぬしもてる子ぬしも參られたり、東君、大造君は來たられず、午前に一題詠じて、午後よりはじむ、例は日述するなれば思ひのまには誰もえいはず、口ごもり勝なれど、今日は筆にいはせたることとて人々の雜論さかんなりし、春の夕べのかた田中みの子ぬし高點になる、戀の喜憂はおのれなりけん、四時退散、田鶴君、田中君と約して明後廿三日上野圖書館にて逢はんといふ。鳥路稻葉君のこと問はんとて西村君の店をとふ、鈴君留守、常女としばらく談話、夕飯馳走になる、提灯をかりて歸る道路汚泥ほと〳〵困難を極めぬ。此夜なすことなしにふしぬ。但し關場君今日入門の筆なりしが障ることありて得せず、斷りはがき來る。

廿日　晴天。今日はむさしの發行とかきくに春季皇靈祭にもあればとてすしなど調ず、近隣兩三軒に

配りなどす、伊東君に約束して今日來訪せんといひしかば午前より其の支度をす。山下直一君來る、早稲田文學九十號持參して借くるゝ、同人歸路もろ共に我れも行く、同じ道なればなり、行々ものがたりつゝ行くに車夫などの同車にてなど進むるよの人ならましかばいか斗はづかしからん、さるを何とも思はず同行するは心に邪心のなければなるべし、恥は情より發するもにやをかし、御茶の水橋にて袂を分ち、伊東ぬしのもとをとふ、談話數刻、心腹を吐露し盡して今日はこと更に嬉しかりし、歸るべし〳〵といひ〳〵いつしかに日をも暮しぬ、晩飯馳走になりなどして猶中々にはなし盡ず、されどいつをいつとも定められぬにいざやとて暇をこふ、八時成りし、車を給はりて歸る。歸宅後、種々母君に談話、伊東君と約せしこと無効に成しことあり、直に手紙をしたゝめて其むねを通ず、何をもなさずして今宵もふしぬ。

廿一日　晴天。晝後何某の妻來る、ひる飯馳走す、おのれは牛井うしのもとへとふことありて行く、今度の住家のいと近くてみえ渡るほどなるがいと嬉し、表は例の戸ざし堅して庭口よりぞ自由の出入はゆるしためる、物がたり種々、大人前日の風邪猶よからずとて咳などいたくし給ふ、家にて相談せしこと牛井うしにもかたる、おのれが小說到底よに用いられまじきものなればつゝみなく斷り給てよ、おのれはおのれの心を信ずるが如く人の仰せられし言を信ずるものなれば、君もし表面のみの賞詞を下し給ふ共其眞僞をし斗るべき智は侍らずかし、君が眞意をえしらずして一向の詞のみを賴み奉らんに、我が愚かさはさておきて君いか斗困じ給ふらむ、とても世に用いられまじきものなれば、今より直に心をあらためて我が身に應ずべきこと目論見候はん、只み心のうちを聞かせ給てよとくり返すに、君いたくあきれ顏して、そは又何ぞの事よ、おのれかひなしといへども男のかたはし也、うけがひ參らせしこと僞りならんや、月々に案じ日々にかうがへて君が幸福を願ふぞかし、我れはあくまでも相携へて始終せんと思ふを、君はなどさ斗にうたがひ給ふ、さりながらこれより他に良善の策あらば止め候はじ、なくば今しばしたえ給へ、我思ふに君が著作此むさし野兩三回の後には必らず世に名をしられ給はん、さすればあ朝日にまれ何にまれ我れ周旋の方法あり、家事の經濟などに付て憂ひたまふことあらばそはともかくも我すべし、むさし野初版より二千以上の發賣あらば利益の配當あるべき約なればこの分のみは我れのも合せて君に奉らんの心なり、か斗に思ふ心僞ならんや、大方は察し給へなどの給へり。談宗教のことに及ぶ、過つる日野々宮君に約して會堂へ行かばやと思ひしも障ことありてはたさゞりしと云ふ、大人、そはよき事を先承りし哉、あやふかりしことよ、あたら御身渦流に卷き入られたまはん所なりしとて嘆じ給ふ、そは何故といへば君縷々として教會の表面裏面を述給ふ、汚行彼の如きあり醜事是の如きあり、牧師狀師は恰も色情の教師の如く、集合する男女の信者は殆ど其生徒に外ならずとて痛論し給ふ、さりながらこはおのれが耶蘇をいたく排斥する心よりかゝる感も隨ひて生ずるにや、大方の教會かかるにもあらざるべけれど、十中の七八は其類ならんと思ふを眞に宗教に熱心におはせば甲斐なし、さらずば先敬して遠ざけ給ふかたよかるべしなどの給ふ、後日を約して歸路につく、四時なりし。此夜入湯することなしに臥したり。

廿二日　晴天。午前習字及著作に從事す。ひる飯直に家を出づ、圖書館行きの約束あればなり。かしこに至りて女のさる人や來りしと問へば、さおはしたり此下駄なめりとてみするは、さらさ形ある皮のはな緒也、みの子ぬしなめりと思へばそれと我れのと一とつにして館に入る、日錄書の臺の上にしきりになにかしたゝめ居給ふは思ひしごとみの子ぬし也、走り寄りて聲びくに挨拶す、相携へて樓上婦人席に入る、先に一人の男壹人あり、醫學の生徒ならん外科といふ書籍を見居たりき、田邊君はおはさぬのなるべしあまりのを、よなどいひて笑ふ。いつもは大方朝よりなれば午後にてうみつかれて甚たくさへなるを、今日はみる間露斗りにして閉館のすゞの聲す、そゝや追出されぬべしとて笑ひながら室を出づ、男子の方一人の止まる人なかりし、徒歩山内をぬけて廣小路に出で仲町にてみの子君かひ物をし給ふ、小路を入りて池の端に蓮玉を味ふ、道々種々談話、中島師君の事などかたる、家にかへりつきしは日沒成し、みの子君とは眞砂町にて別れたり、伊東君より手紙來る、前日のことに付て也。國子に日本外史素讀を授く。半井君よりはがき來る、明日參りくれ度しらせ也。今宵もすることなしに早くふしたり。

廿三日　曇天、少しあたゝかし。半井うしを午後よりとふ、むさしのゝ表題の文字書きくれ度と也。しば〳〵いろひたれど聞かるべくもあらねば十字斗しるしぬ。又むさし野卷末にのすべきもの少し斗不足なれば何にもあれ明午後までに作り終りてがなとの給はす、雨少しこぼれ來ぬればいそぎかへる、直ちに著作にかゝる、文章一篇草さんとて也、今宵雨いとつよくふる、二時頃まで机邊にあり。

廿四日　大雨。又文章あまりおもしろからねば、春雨を詠ずる長歌になす、師の君に一覽をこはんと

て大雨中家を出づ、雨傘といふもの一つもなければ、小さやかなる洋傘にしのぎ行く、雨はたゞいる樣にふるにいと高き下駄の爪皮もなきをはきて汚泥なる道を行くに困難なることおびたゞし、師君のもとへ參りつきし頃は羽織もきものもひたぬれぬ、師君二階の病床におはしき、もの語種々、長歌添刪をこふ、談文章のことに及ぶ、おのれ日々日記を作るに言文一致なるあり、和文めかしきあり、新聞體になるあり、かくては却りて文の爲に弊害とのみなりて利は侍らずやあらむとて師君の異見とひ參らす、そは一定の文則なくてはなさゞるかたぞよき、何にまれ一の方にしたがいてものせよなどの給ふ、今のよの新聞屋文といふものこそ我とらざる所なれ、さるものからこも又一つの道具にて用なきにしもあらず、それはそれこれは之ぞかし、すべて文にまれ歌にまれ氣骨といふものこそあらまほしけれ、さりながら、女といはんには常の行ひ姿形をはじめて物いふにも筆とるにもなよやかなるを表としたるぞよき、心の内にこそは政の成敗、天がしたの興廢、さては文武の強弱、何にまれ思ひいたらぬくまなくて、しかも形にはあらはさぬなん誠の女なる、しかはあれどひたすらにをしつゝみたるのみならましかばつひによはきに流れてはては心まで青柳のいとのごと成ぬべきなめり、たとへばくろがねのまろがせを炉の内につゝみたらん樣なるがよきぞかしなどをしへ給ふ、ひる飯たべて少しまて見すべきものありとの給ふにぞ、しばし初心の人の詠草直しなどしてまつ、藏より一册の手記と衣服とを取出し來給へり、ながきぬのいたくなへたる樣なるに何某くれがしの會などさこそは困ずらめ、これもて行き調じ直せよなどの給はす、例ながらにいとうれし、この一册かまへて人に見すまじきものなれどそこにはな

どかさけてなんとて、常陸帶と表書したる日記みせ給ふ、こは下の卷也、上は師君水戸に下り給ふ道すがらの記也といふ、これは林ぬし江戸へのぼり給ふ別れのきざみよりかきはじめて師の君ひとやにつながれ給ふ迄の也、あるは涙をしのんで門出を送りたまふ鶯の鳥の聲、あるは空しきふすまにあまよをしのび給ふくつわ蟲の聲、あるは初での音づれ待得給ひし件、あるは身をなきものとおぼしなして更に故郷の母君をこひ給ふくだり、あるはさばへなすねじけ人らがよこしまのことども、それが恥かしめをさけんとて妹君さては取てより供につれ給ひし小女なんどしるべのかたにしのばする折のこと、八重むぐら高くしげる館の内にたゞ一人國をうれひてつまごとしのび給ふ心の中、其折々の歌の心ばへなど哀にものかなしくもそゞろ涙ぐまれて打もおかず詠め入りぬ、君十九の時におはしける、おのれは歌の姿の哀なるよりも文の詞のなだらかなるよりも、其心ばへのいさましさをゝしさなんかしこみても猶あまりありけり、師の君の給ふ、こは其折なれば書けたる也、今はた思ひ出てつゞらばやとするに詞の花はいか斗もかざられなんこの感情をいかでうつし得べき、文の眞とはかゝるをいふなれ、こは又文章といふものの學びたる時ならず、詞すらよくもしらねばたゞ有たる事を有りたるまゝにしるしたるなれど、中々今ものしたりとて及ぶべくはあらず、されば文まれ歌まれよしおのれ其ものに向ひおらずとも眞といふこゝろになりてつゞくり出なば人をも世をもうごかすにたるべきものぞ、そこの小說をものせんとするもかゝる心ばへにてぞあれよかしなどをしへ給ふ、雨もやみぬ、あさては早くより參りくれよなどの給ふ、暇を乞てかへる、添刪給ひしを直に原稿紙にうつしかへて半井ぬしがり行く、心の中種々なり、昨日森ぬしより文來りぬ、二月斗前より烟のしろのたしをたのみて六月がほどをうけがわれぬ、さるを俄にさはる事ありてこの斷りをいはれたるなれば母君も妹もいたくなげきまどふ、何とかすべし心安かれなど口にはいひ居しかど、ちいさき腕には波たちさわぎていかにせんと斗成しが、思ひ出ては半井ぬしのみ也、常義俠の心深くおはしますをいかですがり奉らばやとぞ思ふ、行々哀人なからましかばなど願ひしに思ひやつらぬきけんうしのみ成けり、うたみせ參らす、むさし野は今日版に上りぬとか、こは此次のにせんとに角にあづかり參らせんとの給ふ、いひにくけれど思ひ定めてその事打出しぬ、面あつきことよ、半井うし案じ給ふ氣色もなく、そはうけ給はりぬ、何とかなすべし心安かれと疾にの給ふ、この月はおとゝ共の洋服などあらたに調ぜしかば少しふところなんあしき、されど月末までにはとゝのへるべしとて白湯のみ給ふやうに引うけ給ふ、かたじけなきまゝ又涙こぼれぬうれしさにも早く母君に聞せ奉らばやと思へばあわたゞしく暇をこふ、嬉しきこと嬉しげにもあらず恩を恩ともしらぬとや覺すらん、心には思へど口に多くあらはし難きはかひなかりける、此夜もすることいと怠りぬ。

廿五日　朝來打くもり雪ふる、十時頃より晴渡りたれど風いとつよし。今日はおのれが誕生の日なればとて魚などもとめていさゝかいはひ事す、午後より母君姉君がり參り給ふ。西村ぬし來る、物がたり種々、日沒少し前水野ぬしより和歌小集の招き文來る。半井うしよりは廿八日までに小說の草稿まはしくれよとの文來る。今宵はさま〳〵にこと多し。

廿六日　稽古日。小雨。水野君行の相談とゝのふ、點取題三ツ、おの〳〵十點を得たり、五時頃歸宅。

半井氏より重太君迎ひに來たれば好事あり直に參られたしといわれたりとか、今宵はすでに遲し、明早早參れとて今宵は臥しぬ。日沒後芝より兄君參らる。

廿七日　午後より半井君へ行く、小說雜誌むさし野出版になりたりとて一本をあたへらる、昨日の好事とは、君が別著の小說改進新聞に出さんとするの事也といふ、あれ斗はゆるし給へあまりといへば恥かしといひしに、夫は困る也すでに繪の注文さへなしたりといわる、更にせんなしいづ方にもとて諾す、原稿今一度校閲せんとてわが方に引取る、作りかへんとて也、四十回になしくれよの頼みなれど、三十五回ほどにてよろし、先は書發し給へとて渡さる、明後夜中に二回ほどお廻しありたし、二十九日より掲載の都合なればなどの給ふ、了承して歸る、母君兄君大悦びの事、藤田屋來る、金一圓かりて兄君に二圓斗かす、日沒兄君歸宅。此夜十時二回分の校閲終りて、母君と共に半井君のもとへ行く。之夜は外に何もせず。

廿八日　朝來小說にかゝる。三時頃一日分丈持參、二回分の畫の注文をなす、歸宅日沒。國子むかひに來て居りたり。此夜何事もなさず。

廿九日　改進新聞早朝にみる、いまだ小說の載すべき餘地見えず、明後日あたりよりならんといふ、むさし野廣告出たり何となく極りわろし。午前水野君各評をよむ、午後早々師君のもとへ持參添刪をこふ、みの子君參り居らる、雜誌のこなしつけ、新聞の談あり、歸宅四時。夫より一日分丈草す、半井君のもとへ持參せしは十時なりし、今夜も國子同道。

卅日

四月一日

四月五日　今日は水野君和歌小集の催しある日也、朝來晴天。半井氏に約して今日は二回丈是非送らんといひし改進新聞原稿未だ一回もしたゝめ終らず、困じ果てゝ強いて著作に從事す、十一時に家を出んとするに十時過ぐるまで草稿したゝめ居るにからくして一回分書き終へたれば、いそぎ化粧などして家を出づ、詫がてら半井君のもとに行、同君留守、伯母の君に言譯申て走がせぬ、至り侍しは一時近かりけん、來客早いと多かり、點取夜歸雁及び野遊成し、來會人數三十名斗酒肴も中に三曲の合奏あり水野せん子君の琴聲心なき身にもそゞろにみゝかたぶかれぬ、始は小がう、次は松竹梅、酒宴やんで又一曲何といふ曲かしらねどいとものおもしろかりし、散會は九時、車にて送らる。此夜二時まで小說著作に從事す。

大日　曇天。早朝庭の桃の枝を下ろす、奥田老人參らるべければ同人にやらんとて也。

月といふつきの光りもみえぬかなやみをやみともをもはざる身は
誰かみん誰かしるべきあるにあらずなきにもあらぬのりのともし火
みちのくのなき名とり河くるしきは人ぞきせたるぬれ衣にして
散ぬればいろなきものを櫻ばなこひとは何のすがたなるらむ
ゆく水のうきなも何か木の葉舟ながるゝまゝにまかせてぞみん

日記（二十五年四月―五月）

かまへて人にみすべき
　ものならねど、
　　立かへり我むかし
を思ふにあやふくも又
　　ものぐるほしきことといと多なる、
あやしうも人みなば
　　狂人の所爲とやいふらむ。

四月十八日　雨天。午前の内に片町の大人がり行く、此日頃懶み給ふ所おはす上に何事にやあらむ立腹の氣にてはか〳〵敷は物語も賜はらぬなむ心ぐるしければ、いでや今日こそは御心取らんとて出たつ、小石道のいと懶ましきをからうじて行くに、河村君よりの下女水など汲居たり、大人は早起出給へりやと問ふにうなづきてしるべをなす、例の庭口より書齋の縁にのぼるほど大人出來給へり、例はいとなつかしき物がたり種々して歸るべき時なき樣なるを、此頃はあやしう異人のやうに成給へり、御病氣はいか

がぞなど問ふに、少しは好しされど頭のいたきのみは困じ居る也とて、後腦のかたを手してたゝき居給へり、何方も花ざかりと承るにたれこめてのみおはすはなぞやといへば、日蔭の身なればとてしほれぬ、一昨日の夜上野の夜櫻を行てみし許、飛鳥山も墨田河も更に訪はず、さるにてもかく引籠りのみ居れば病ひも怠る時のなきにやと思ひたれば、少し散歩をこゝろみなどしたるにいよ〳〵頭いたきやうなり、如何にせば宜かるべきにや殆ど其策に困しみぬ、かくては遂に死ぬべきにやあらむなど心細きことの給ふ、頭うなだれがちに言葉少なく、それも此方より問ひ奉らぬ以上更に〳〵物語なし、武藏野一昨日までに諸事し終りて昨日發兌のつもり成しがいかにしけむいまだ廻り來らず、此度のはいづれも〳〵宜しからぬやうなりなどの給ふ、おのれは別しての無茶苦茶にて嘸かし困じも怒りもし給ひけん、我師中島とじ常に會日其他にて弟子の詠歌よろしからぬ時はいたく顏色わろき樣也、大人にも同じこと、我が著作のあまりわろきに怒り給ひていとゞ御病氣の重らせ給ふならずや案じられ侍りといへば、いやさることはあらずと事も無くの給ふ、むさしの三號の分は當月中に原稿廻し給へなどの給ふ、さるにても暇のなきなん健康上にいたく影響を及す也、朝日新聞の方も明日より又執筆することになりたり、せめて一月の猶豫あらばよけれど幸閑を得がたきが弱りきる也、など物がたらる、我れもいろ〳〵いふこと有しが、五月蠅げなるに遠慮してそこ〳〵に暇ごひしぬ、されども止めんともし給はざりけり、歸路快快たのしまず、何ごとをかく計怒られけん、我れに少しも覺えなし、いかにせば昔しの如く成るべきにや、家に歸りてもこの事をのみいふ、母も妹も共にいたく案じぬ、母の給ふ、夫も其筈ぞかし世にも

人にもかくれ給ふ身なればこそ此花咲鳥うたふ春の日をさゝやかなる家の内に暮したまふなるいか計いか計心くるしからむ、まして花柳のちまたを朝夕の宿とし給ひしものが俄にあし踏だにし給ひ難ければそは道理也などいふ、今日は何事のなすもなくて日を暮しぬ。

十九日　晴天。今日の改進新聞配達が待遠也、誰人か我が後には出けんと見るに南翠外史也、あな嬉しや大人の也けり、されば我が身いか計大いそぎに端をりちゞめても前後とも大人のなればぞ嬉しといふ。今日は來客いと多し、鍛冶町石川及び菊地君奥方など近火見舞の禮にとて來給へり。午前習字、午後より小說少しみる。著作にかゝる櫻井君たのまれの詠草一冊書く。

廿日　晴天。圖書館へ書物見にゆく、太田南畝、藤井懶齋が隨筆ども見る、明治女學校の生徒及び駒場農學校何某氏の妻刀劍類寫圖の模寫に來られしに逢ふ、歸路廣小路まで同伴す。滿山の櫻大方はうつろひたれど流石にまだ見る人は多かりき。日沒少し前家に歸る。

廿一日　曇天。午後より大人のもとを訪ふ、むさし野來月分趣向につきてなりけり、畑島君も參り合されたり、種々物がたり、大人達の趣向の談合いとおもしろし、四時頃歸宅。此夜田中君より明日小金井行の催しありとてはがき來る。夜雨降出づ。

廿二日　今朝はいとよく晴たり。小金井行はいとうれしけれど、むさし野〆切日限もさしせまりたり、悠々たる暇なければやめになす。午前洗濯を少しなす。明日小石川稽古なれば各評彙題など少し詠ず。

廿三日　晴天。小石川へ行、日就社員鈴木光二郎氏師君履歴を探報の爲訪問、二階にて種々談話あり、

其間島田政子君と共に下座敷に語る、悲話縷々、思はず袖をぬらしぬ。

廿四日　早朝關君へはがきを出す。

廿五日　曇天。國子齒痛の爲姉君と共に谷中坂町妙清寺内へ願がけに行く、歸宅早々後かたもなく平癒したりといふ、奇なる事也。小說はじめて原稿にのぼす。日暮れより雨降り出づ。此夜母君に新小說よみて聞かし參らす。

廿六日　より雨天。

廿七日

廿八日

廿九日　まで小說一向に盡力せしものから出來上らず、終夜從事。

卅日　小說いまだ十頁計しか出來ず、せん方なければ其趣半井うしへ申さんとす、ことに今日は小石川稽古なり、朝來大雨なれどもをして家を出づ。師君のもとに十二時まで居る、歸路直に片町の師君がり訪ふ、大人は次の間におはすなるべし、河村君老母及内室小女等火桶のほとりに居たり、大人の病氣を問ひなどせしに、師君痔疾にておはせしをいたく祕し給ひしから、一時になやみつよくなりて一昨日切斷術を行はれぬと也、いたく驚きていかにやと氣遣ふにいとなめしけれど病間にて對面せんとて此間へ通す、石炭酸の香いとつよし、こは日々洗できすればなめり、種々談話、流石の大人もいとくるしげにみえ給ふ、一時歸宅。

五月一日　午前十時頃より家を出で、下谷伊豫紋に口取を買ふ、桃水君に參らせんとて也、十二時頃より片町に行く、物がたり種々、追々快方なりといふ。

三日　西隣の家に轉宅せんといふ相談といふのふ。

四日　半井君のもとを訪ふ、轉宅一條を物がたりて原稿七日までと日延をなす。

五日　晴天。轉宅、久保木田部井手傳ひに來る、此夜より又小說にかゝる。兄君偶然に來る。

六日　一日小說に從事、ならず。

七日　晩景までには何とぞ著作し度大勉强、但し今日は小石川稽古日なれど行かず。

八日　終日まだ成らず。

九日　小石川會日なれど早朝よりは行がたし、三時頃に至りて小說完備す、則ち直に髮を結びなどして先半井うしがり行、藤村にてむし菓子少しとゝのへ持參す、直に歸る。其足にて小石川へ行く、師君大立腹。

十日　より蟬表內職にかゝる。

十一日　おなじく。

十二日　おなじく。

十三日　師君のもとへ行く。

十四日　稽古日、田中君より田邊君傳言を聞く、烏田君のこと師の君のこと、歸路は日沒少し前なりし、思ふことといと多し。

十七日　田中うし會也、午前より行、來會者十二三名、車にて送らる。

十八日　小がさ原君のもとに數よみの催しあり、招きにあづかりしもの五名、題は二十三題成けり、終りて後ばら新美香園にばらを見る、歸宅は日沒。

十九日　半井君をとふ、一時は日に〳〵快方成しを、又いさゝか無理などをなしたるにや依けん、更に切斷を行はずんば、能ふまじと思ふなりなど物がたらる、いと〳〵なやましげなるにいか樣にせんと計打守り居る折しも、醫師來診に來しかばおのれは歸宅す。

廿日　又見舞に行く、昨日切斷はなしたれどいまだ充分ならざる樣也、今一度切らずんばなどいふ、今日も氣分わるげ也、二時間計居てかへる。

廿一日　小石川稽古也、早朝に行く、我が小說のこと田中君よりの物語りもあり、何とか答へなさずばわるかるべく、さりながら半井ぬしが種々懇とくなる言葉行爲を思へば是を捨て彼につくなん義に於てなか〳〵なるべし、いか樣にせんと斗師君にも相談をなす、そは道理なりしからば斯なさんなど仰給ふ、むさし野上卷閲覽に供す、歸宅は日沒。此夜野々宮君教會よりの歸り也とて一夜の無心に參る、十二時頃まで談話。

廿二日　野々宮君と種々ものがたる、半井うしの性情人物などを聞に俄に交際をさへ斷り度なりぬるものから、今はた病ひにくるしみ給ふ折からといひ、いづこへぞかく斯る事いひもて行かるべき、快方

を待てと心に思ふ、九時頃野々宮ぬし歸宅、午後より又半井君病氣を訪ふ、朝鮮より友人兩三名來たりしとかにて、此邊亂雜也けり、おのれ行たる故にや人々は早かへりぬ、其こと由謂なきにもあらじ、今日は日曜なればにや重太君及び小田君參る、初じめて果園氏近づきになる、直に歸宅。

廿三日　雨天。

廿四日　雨いたく降る。九雲夢書寫す、十葉計

廿五日　雨いとゞつよく降る。午前の内九雲夢十葉計うつして、夫より小說草稿にかゝる。今日の改進新聞にむさしの上編の評をのせたり。

廿六日　連日の雨晴る。早朝より九雲夢書寫す。

廿七日　大雨。九雲夢書寫、此夕べ半井君より手紙來る。

廿八日　晴たり。小石川稽古に行、しかるに老人昨夜より急病生死おぼつかなしと聞く、今日の稽古休み給はゞなどいさめたれど、師の君聞給はず、終日歎へをたれ給ふ、醫師も來たる、此分にては今が今にてもなかるべしと云ふ、おのれ夕つ方一先歸宅、又參らんとて也。歸家直に半井君に趣く、病氣見舞かつは返事すべきこと有て也、日沒前藤田屋來たりて終日庭作りす、酒飯を供して勞にむくふ。此夜長齡子ぬしより借りたるよみ賣新聞小說三人妻二十回許見る。

廿九日　早朝直に小石川病人を訪ふ、正午時まで居る、此間に小がさ原家及伊藤老母見舞に來る。一時歸家して九雲夢少し寫す、更に夕がたより小石川へ行く。

我はじめよりかの人に心ゆるしたることもなく、はた戀し床しなど思ひつることかけてもなかりき、さればこそあまたゝびの對面に人げなき折々はそのことともなく打かすめてものいひかけられしことも有しが、知らず顔につれなうのみもてなしつる也、さるを今しもかう無き名など世にうたはれ初て處せく成ぬるなん口惜しとも口惜しかるべきは常なれど、心はあやしき物なりかし、此頃降つゞく雨の夕べなど、ふと有し閑居のさま、しどけなき打とけたる姿などそこともなくおもかげに浮びて、彼の時はかくいひけり、この時はかう成りけん、さりし雪の日の參會の時手づから雜煮にて給はりし事、母樣のみやげにし給へとて干魚の瓶付送られしこと、我參る度々に嬉しげにもてなして歸らんといへば今しばし今しばし君樣と一夕の物語には積日の苦をも忘るゝものを今三十分二十五分と時計打眺めながら引止められしこと、まして我が爲にとて雜誌の創立に及ばれしことなどいへば更也、久しうわづらひ給ひての後まだよわ〳〵となやましげながら、夏子樣召上りものは何がお好ぞや、此頃の病のうち無聊堪がたく夫のみにても死ぬべかりしを朝な夕なに訪ひ給ひし御恩何にか比せん、御禮には山海の珍味も及ぶまじけれどとて、兄弟などの樣にの給ふ、我料理は甚だ得手なり殊に五もくずし調ずること得意なれば、近きに君樣正客にして此御馳走申すべしとて約束したりき、さるにても其手づからの調理ものよ、いつのよいかにして賜はることを得べきなど思ひ出るまゝに、有し頃戀しう、世の人うらめしう、今より後の身心ばそうなど取あつめて一つ涙にひぬものから、かく成行しも誰故かは、其源はかの人みづから形もな

き事まざ〳〵しういひふらしたればこそ、わりなう友などの耳にも傳ひしなれ、友に信義の人しなければ、やがて眞そらごと師の君に訴にけん、されども猶師の君にまこと我れを見る眼おはせばかくはかなき邪說などにやす〳〵と迷はされ給ふべきにはあらじをなどさま〴〵に思ふほど、憎くからぬ人もなく成ぬ、いでや罪は世の人ならず、我李下の冠のいましめを思はず、瓜田に沓をいれたればこそ、いつしか人の目にもとまりていひとき難き仕義にも成たれ、人の一生を旅と見てまだ出立の二あし三あしがほどなる身には是れのみにも非ざるべし、道のさまたげいと多からんに心せでは叶はぬ事よと思ひ定むる時ぞ、かしこう心定まりて口惜しき事なく、悲しき事なく、くやむことなく、戀しき事なく、只本善のぜんに歸りて、一意に大切なるは親兄弟さては家の爲なり、これにつけても我身のなほざりになし難きよなど思ふ折しもあれ、又さる人に訪はれなどしてかの人のことふと物がたり出たる、この人にはもと末いはで叶はぬ筋なればかく〳〵しか〳〵にてさらに〳〵參ず成しなど語るに、其人打かたぶきていな〳〵夫は眞のみにも非らじ、かの人の口づからさることいひ出したるなどかけても思ひより難し、大方は君樣本名あらはし難しなどつね〴〵の給ひしかばかの人おのが性などにて世に出し給ひしには非ずや、さるををし計づよき人々かに角ものいひ構へてかくいひ開けたるなるべし、我思ふにかの人もしもし邪心ありて爲に計ごとを廻らし給ふともよもかく拙なき事くわだてられん筈なし、外に手段もあるべきこと也、又かの人の質としてもの憐みつよく心切なるは我人共にしる處にて君樣にのみの譯ならねば夫は證とするに足らずかし、元來不羈放縱の人なれば、ありし頃もさら也常は柳闇花明のさとを家居

として、金錢をみること芥の樣に、ある時は五十金を一夜につひやし、今日七十金の收入ありしも明日は僅かに五圓をあますのみなどの事あるはめづらしからず、一昨年のこと也、正月の一日にはれぎ五十金出して調せしを、二日目に友の窮する由きゝて殘りなくぬぎてやりつ、其身は古るびたる二子の袷に浴衣かさねて寒中をしのがれぬ、されども妹の君嫁入らせ給ひし時に思ひ定めしことありて俄に身もちつゝしみ給ひつ、人知らぬ宿に蟄伏して我世の春待ち給ひしは事實也、あながち君樣に志しありてのみにも侍らざめり、又俄に家居たゝみて跡なくわたましゝ給ひしは、かうやうの事より隱れ家の世にもれんこと恐れ給ひてのし業ならずやとおのれは思ひ侍る也など、一々に證を引てあげつらふ、かくてはいとどかの人憎くみ難し、恨みは大方の世の人也けり、かの人にくみ難しと思へば我輕忽の所爲今さらに取かへさまほしく、さりともよも腹立はし給はじ、我が心の潔白なるは思ひ知らせ給ふべきものをと思へど、か計仁慈ふかく義俠つよかりし人につれなうもてなしたる我何の罪人ぞや、そも〳〵我はじめて逢參らせたる頃、女の身のかゝる事に從事せんはいとあしき事なるを、さりとも家の爲なれば詮すべなし、さりながら行末見込ある筆つきなるをつとめ給はゞかならず世に知られ給はんよなど、又兄の樣にの給ひしことなどくり返にも悲し、いでや世の人は何ともいへ我にけがれなく、かの人淸くさへあらばそしりは厭ふ處ならず、猶今の御住家尋ねあて今までの如く只兄君としたしまんか、しかはあれどかの人世にすぐれたるみにくき形などならばよけれど、憎くや美形の人の口いとゞふせぎ難く、且はかの人の心にも其美形なるに依りて我か計に思ひしたふなどをし計られんか夫も口惜し、必竟は我かの人

を思ふにも非ず戀ふにも非らず、大方結び初たる友がきの中終始かはらざらんが願はしきにこそかくさまざまの物おもひをもする也、されど猶かくいふも我迷ひに入らんとする入口にやあらん、今こそ人も我もにごりたる心なく行ひなく、天地に恥ぢずして交りもなさめやう〳〵入立てむつれよるまゝにいかに我心人の心替り行かんか計り難し、かの人の是非曲直我が目にうつるほどはまだ醉つるならず、はては善も惡も取捨の分別なく、人のそしり世のはゞかり見もかへらず、德に外れ道に戻る人にもならんは今踏たゆるとさらぬとの只一あしの違ひぞかし、あやふしともあやふしと思へばそゞろに身の毛も立ぬ、一心我をはなれて觀ずれば、愛憎厭忌何ごとかある、物信ふかければ悔いふかし、疑心も掛念も猶凡情俗心のみ、されば此こそ君子の交りは淡くして水の如しとや、師君の疑ひも友のねたみもかの人の交りも無かりし昔に何事かある、只しる壯子が蝶の翻々たる如くあれも夢也、是も夢なり、覺めんはいつのはてしなけれど、我心の神明に照し無心無邪氣に成終らんのみ。

なき名の立ける頃、

みちのくのなき名とり川くるしきは人ぞきせたるぬれ衣にして

されどたゞ

行水のうきなも何か木のは舟ながるゝまゝにまかせてぞみん

今日を限りとおもひ定めてうしのもとをとはんといふ日よめる、

いとゞしくつらかりぬべき別路をあはぬ今よりしのばるゝ哉

ある時は厭ひ、ある時はしたひ、よ所ながらもの語りきゝて胸とゞろかし、まのわたり文を見て涙にむせび、心緒みだれ靈して迷夢いよ〳〵闇かりしこと四十日にあまりぬ、七月の十二日に別れてより此かた一日も思ひ出さぬことなく、忘るゝひま一時も非ざりし、今はた思へば是ぞ人生にかならず一度びは來るべき通り魔といふものゝ類ひ成けん、道にかんがみ良心に訪へば更に〳〵心やましきことなく、思ひわづらふふし更になし、我德この人の爲にくもらんとして却りてみがゝれぬ、いでやこれよりいよいよみがきて猶一大迷夢見破りてましと思ひ立ちしは、八月の廿四日、澁谷君に訪はれし翌日成けり。

しのぶぐさ

（二十五年六月）

六月一日中島の老君病いよ〳〵あつしとて我を迎ひの手紙來る、參りし頃はは や物もの給ひやらず、常はうとき師の兄君さては其娘たちなど枕もとに寄りつどひてすゝり啼し給ふさま悲しともかなし、思へば廿一日の朝のことなり、咳にいたく苦しみ給ひしかば我紙をもみて參らせたるに、病みつかれし日かすかに聞きて誰ぞや夏どのか我もこたびこそは生くまじう覺ゆるよと物心細くの給ひしかば、何としてさることか侍るべきみ心つよふ覺せなどなぐさめし折まだかく俄になどは思はざりしをと、そゞろに我も涙くまれぬ、みの子ぬしも參られたり、今日一日のうちもいかにや〳〵と心もとなかるほどに夜にも入りぬ、醫師は佐々木東洋君なれど、俄かのことのあらん時にとて坂したなる矢島といふをも顧み置くなり、八時といふ頃より苦るしともなく息せわしく成て身もだえし給ふこと限りなし、矢島參りて皮下注射など二度び斗したれど露ほどもしるしなく、見る目いと怪し、師の君はまして心も心ならねばや、あと枕に立そひてくれ惑ひ給ふさまことわりなり、十時といふ頃佐々木君も參られぬ、此頃より少したゆみ初て、曉がたまて我も人も靜かならねど夢路に入りぬ、つぐの日もさして重るともなく時々に身もだえはし給ふものから、東角暮したり、夜に入てよりはいよ〳〵限りと覺しくて手足の置處なげにみゆ、矢

島にいたく請ていなせじといふものから皮下注射を更にしたり、それより唯ねぶりに眠りて三日の午前十一時といふに空しく成りぬ、みの子ぬしは其日斗家に歸りて折にあはず、いそぎ參られていと口惜しがる、房子君も一あしおくれにたり、此折のことども書んも中々なり、このほどの二日三日ひるなく夜なく立かはり入かはる人、さしも狹からぬ家ながら唯みちにみちていさゝかの間もなし、夜るなどはみな寄りつどひてなかしき物がたりどもしてねぶたさをまぎらはす、かゝる折にこそさま〴〵の人の心も知るべきながら、我見る目あさやかならず聞く耳さとからねば甲斐なし、甲斐なしとしれど又おのづからに日とまり耳に聞えなどする事種々なれど、さのみはとてなん。四日小出ぬしが催しにて櫻臺に何某の追善會ある日也、師の君の代りとしておのれ行く、田中君と同車也、心こゝにあらねば歌もえよめずやがて歸る。五日にからは柩に納めぬ。六日の午後野邊送りの左法をす、祭主は春日何某成き、伊東夏子ぬしとおのれとこしわきの役をなす、師の君も徒歩にて砲兵工廠前まで行給ふ、これより車也、喪服にやつれ給へるさま悲しともかなし、今日生憎に故松平慶永ぬしが一週年の祭を星が岡に行ひ給ふ日とて、宮内省出仕の人々さてはうた人中有名のたれかれなどは參り合されず、されど送る人は二百人に過たるべし、大方は夫人令嬢斗なりき、式場にての左法よりはじめて墓處に祓おさめ給ふまでえ書つゞけやらず、まして師の君の心いかならんかし、人々おの〳〵歸りさられぬ、師の君はらから、宇一君、くら子ぬしの二人、伊東君母子、みの子ぬし、おのれの八人車をつらねて歸りつきしは日沒近かりき、此人人もおの〳〵家に歸るに、おのれも又半井うしのもとよりいふ事ありとの文もちて、今宵斗はとて歸る。

七日　何は置て牛井うし訪て見よと母君もの給ふに、ひる少し過る頃より行く、例の従姉妹の君も居られたり、おのれいつも取立たる髪など給はざりしを島田といふものになして有しかば人々めづらしがる、是よりは常にかくておはせよかし、いとよく似合給ふをなどいはれて中々に恥し、牛井ぬし扨の給ふやう、種々に御事多かる中をさぞ出がたくやおはしけん、實は君が小説のことよ、さま〳〵に案じもしつるが到底繪入の新聞などには向き難くや侍らん、さるつてをやう〳〵に見付て尾崎紅葉に君を引合せんとす、かれに依りて寶賣などにも筆とられなばとく多かるべし、又月々に極めての收入なくば經濟のことなどに心配多からんとて是をもよく〳〵計らはんとす、されど夫も是も我は日かげの身立出て何事かなし得べき、委細畑島にいとよくたのみてそれが知人より頼み込せしなり、此二日三日のほどに君一度紅葉に逢ては見給はずや、もし其時に成て他人に逢ふはいやなりなどいはれんがあやふくて先この事を申なりとの給、何事のいなか有べきいと辱しといふ、雑話さま〳〵にて歸る。直に小石川へ到る、こゝは只人々醉へる樣なり、夢の樣にて十二日にも成ぬ、十日祭の式行ふ、ことに親しき人十四五人招きて小酒宴あり、伊東夏子ぬし不圖席を立て我にいふべき事あり此方といふ、呼ばれて行しは次の間の四疊計なるものゝかげ也、何事ぞと問へば、聲をひそめて、君は世の義理や重き家の名や惜しきいづれぞ、先この事問まほしとの給ふ、いでや世の義理は我がことに重んずる事なり、是故にては幾多の苦をもしのぐなれ、されど家の名はた惜しからぬかは、甲乙なしといふが中に心は家に引かれ侍り、我斗のことにもあらず、親あり兄弟ありと思へばといふ、さらば申すなり、君と牛井ぬしとの交際斷給ふ譯に

はいかずやいかにといひて我おもてつとまもらる、いぶかしふもの給ふ哉、いつぞやも我いひつる樣にかの人年若く面て清らになどあれば、我が參り行ふこと世のはゞかり無きにしも非ず、百度も千度も交際や斷ましと思ひつること無きならねど、受し恩義の重きに引かれて心清くはえも去あへず、今も猶かくて有なり、されど神かけて我心に濁りなく、我が行ひにけがれなきは知り給はぬ君にも非らじ、さるをなどこと更にかうはの給ふぞと打恨めば、そは道理なり道理なり、さりながら我かゝることといひ出づるには故なきにしもあらず、されど今日は便わろかり、又の日其譯申さん、其上にも猶交際斷がたしとの給んに、我すらうたがはんや知れ侍らずとていたく打歎き給ふ、いぶかしともいぶかし、かゝるほどに人々集り來ていとらうがはしく成ぬれば、立別れにけり、何事とも覺えねど胸の中にものたゝまりたる樣にて心安からず、人々歸りて後この事斗思ひぬ。

十三日　長齡子ぬしのもとに順會のかずよみなり、午前より行、來會者廣子、つや子、夏子、みの子、おのれの五人成き、數よみ題三十七詠じ止んで、雑話種々、田中ぬしなども折にふれて言ひ出らることあやしう我に故ありげ也、夜に入りて一同歸宅す。

十四日　終日倉子ぬしと物語りす。是も又我を底にやうたがふ覺、折々に詫めかしき詞ども聞ゆ、いと不審、今日は此人も歸られぬ、夜に入りて只西村の鶴どの、加藤の後家さては家内のはしため達の外、師の君と我を置て人もなし、ものに寄り集ひて世の中の物がたり共す、あやしくにごれる世のならひとて聞え出ること〳〵にけがらはしからぬもなし、いづこの誰にはかゝる醜行あり、こゝの誰には何の汚行

聞ゆとか、常に見聞く友などの上につきてもにごりにしまぬ人少なげにいひはやす、聞くと聞くまゝに人の上のみならず我がよ所の聞えも登束なく成りて席のはしに耳かたぶけ居し我不圖師の君の前にいざり出ぬ、師は物語りやんで臥床に入らばやと身を起す時なり、師の君しばし待たせ給へや、我少し問ひ參らせ度きこと聞參らせ度ことどもあり、今宵聞て給はるべき哉はた明日になすべきにやといふに、師の君やをら座を定めて何事の問ぞ今宵聞んとの給ふ、半井うしのことはかねて師にも聞かせまつりて、其人となりも身の行ひもいとよく知り給ふ上にて、我が行かひも止め給はざりしなれば、我心に憚かる處いさゝかもあらず、先かく〳〵しか〳〵に人の申なむ何の事と知らねど、或ひは半井のことに依りてにや侍らん、もとより知らせ給ふ樣に我より願ひての交際にも非ず家の爲身のすぎわひの爲取る筆の力にとこそたのめ、外に何のことあるならず、さるをか樣に人ごとなどのしげく成るなんいと心くるし、哀師の君の御考案はいかにぞや、もしみ心にもこは交際せぬ方宜しかるべしなど覺すことあらばあきらかに仰せ聞けられてよ、我は我心を信ずるまゝに男女の別をも思はず、世の人聞をも知ず、一向にしたしうせしものからかへり見ればいと心安からず、いかさまにしていかさまにすべきにか御教へ給らまほしといふ、師の君不審氣に我をまもりて、扨は其半井といふ人とそもじいまだ行末の約束など契りたるにては無きやとの給ふ、こは何事ぞ行末の約はさて置て我いさゝかもさる心あるならず、師の君までまさなき事の給ふ哉と口惜しきまゝに打恨めば、夫は實か〳〵、眞實約束もなにもあらぬかと問ひ極め給ふも悲しく、我七年のとし月徬徨近くありて、愚直の心と堅固の性は知らせ給ふ筈なるを、うたがひ給

ふぞ恨めしく、人目なくば聲立ても泣かまほし、師の君さての給ふ、實はその半井といふ人君のことを世に公に妻也といひふらすよし、さる人より我も聞ぬ、おのづから緣しありて足下にも此事ゆゑしたるならば他人のいさめを入るべきにも非ず、もし全く其事なきならば交際せぬ方宜かるべしとの給ふに我一度はあきれもしつ一度は驚きもしつ、ひたすら彼の人にくゝつらく、哀潔白の身に無き名おほせて世にしたり顏するなんにくしともにくし、成らばうたがひを受けしこゝらの人の見る目の前にて其しゝむらをさき膽を霜くして、さて我心の清らけきをあらはし度しとまで我は思へり、猶よく聞參らせば、田邊君、田中君なども此事を折々にかたりて我が爲いとをしがられしとか、さるは世の聞えもよろしからず才の際なども高しともなき人なるに夏子ぬしが行末よいと氣のどくなるものなれなどいひ合へりしなりとか、是に口ほどけて師のもとに召使ふはしためなどのいふこと聞けば、此取沙汰聞しらぬものは此あたりになしといふほどうき名立に立たるなりとか、淺ましとも淺まし、明日はとく行て半井へ斷りの手段に及ぶべしなど、師君にも語る、臥床に入れどなどかは寢られん。

十五日　午後より半井君のもとへ至る、梅雨降つゞく頃はいと侘し、うしがもとにはいと子君伯母君二處居たり、君は次の間の書室めきたる處に打ふし居給へり、雨のいたく降こめばにや雨戸殘りなくさしこめていと闇し、いと子の君伯母なる人に向ひて御覽せよ樋口樣のお髮のよきこと、島田は實によく似合給へりといへば、伯母君も實に左なり〳〵、うしろ向きて見せ給へ、まことに昔しの御殿風と見えて品のよき髷の形哉、我は今樣の根の下りたるはきらひ也などいひ給ふ、半井君つと立て、いざや美く

しう成り給ひし御姿みるに餘りもさし込たる事よとて、雨戸二三枚引あく、口の惡き男かなとて人々笑ふ、我もほゝ笑むものから、あの口より世に無き事やいひふらしつると思ふにくらしさに、我知らずにらまへもしつべし、我師の君より教へられつる樣にことつくろひてもの語りす、師の君のもとに家の内取まかなふ人なく我行き居らではもの毎に不都合也とて、いとせめて賴まれぬ、さるを無下にはなど斷はらるべき、とし月の恩といふ義理はくろがねの刃も立ず、今しばらくは手傳ひ居らんとす、さすればいつぞや仰給はりし紅葉君のことも何も先え寄りの事ならずば折角御目通りしてからが筆も取りがたくば其かひあるまじく、お前樣へ不義理にも成り申すべし、この事申さんとて今日はいさゝかのひまもとめて參りつるなりといふ、それぞ困りたるもの也、尾崎の方も萬々話しとゝのひていつにてもあれ御目にかゝらんといふとか、明日にも手紙にて君に其通知せんと思ひしを今に成て斷りもいひ難し、いかにぞや筆とることはとまれ一度對面丈なし賃給はずやといふ、さりながら御目通りせし上にて筆取りがたしといはゞ何の甲斐もあるまじ、我も色々心にかゝる事ありて物がたりには盡し難けれどこゝにかしこにいとものうるさく身を責る頃なればといふ、さらば先兎角師の君に打明し給へよ、いつまで包み給ふともかくしおほせらるゝにもあらじ、其上にてよき考案つけらるゝぞよき、こゝにかしこに義理だて斗し給ふとも家計のことなどもあり、心を勞し給ふほど人は察し申間敷になどかたらる、當ならましかばいか斗嬉しと聞く言の葉ならむ今日は何となく上の空なり、種々ものがたりの内に我が心なぐさめんとにや高島炭礦のものがたりなどして笑はせんとす、何事ぞ聞きも入られず暇を乞ふて立つ、宅用少し有

て菊坂へかへり、少時にて小石川に歸りぬ、今日のあらましもの語りなどして、師の君よりさし圖うけて半井君のもとへ文を出す。

十六日　田邊君參り合て種々もの語りす、半井君の事をいふ、此方の緣を斷ちて更に都の花などにも筆を取らんといふ相談也、久しう遊びて歸らる。

十七日　田中君參る、これにも半井君のものがたりす、打笑みながら聞居て半疑の姿いとよく見えぬ、終日かたりて歸る、文したゝめて伊東君送りもらひ度よし托す。

十八日　伊東君參られたり、百年の知己は何のかくすべき事もなくて思ふまゝにかたり思ふまゝに無實を訴えて、君のみは實にや受給ると嬉し、猶この末いと多かれどあわたゞしき折にて書きも盡さず。

廿二日　家に歸る、こゝにもさま〳〵に相談してさて半井うしのもとに返すべき書物もて行、折から午前成しかば君はまだ蚊屋の内にうまいし居給へり、ゆり起さんもさすがにてしばしためらふほどにひる近く成ぬ、ふと目覺してこは夏子どのか淺ましき姿や御覽じけん、など起しては給はざりしぞといひつゝ、あわたゞしく起出給ひぬ、火桶の左右に座をしめつゝものがたりしめやかにす、情にもろきは我實なればにや、是を限りに今よりは參らじと思ふに何ごとゝなく悲しくさへ成りぬ、伊東の夏子ぬしさては我母君妹などのいへるにも、書たえたる樣にするはいとあしきこと也、其故よし審らかに語りて得心の上に交際を斷ぞよきといへるに、我もしかせし方宜かるべしと思へば、今日しも人氣なくつゝましきことといふにはいとよき折からなり、我しばしはいひも出ずうつぶきがち成しが、さりともいはで

はつべきならじと、いとせめてものがたり出づ、例しらぬにしもあらぬにあたら御朝ねの夢おどろかし奉る罪ふかけれど、申さで叶はぬ事ありてかくは參り來つる也といふ、君何事ぞ何事ぞと問ひ給ふ、いでや我が上の事のみならず君様の御名もいとをしくてなん、實は我がかく常に參り通ふことといかにして世にもれけん、親しき友などいへば更に師の耳にもいつしかいりて疑はるゝ處かは、君様と我れまさしく事ありと誰も〳〵信ずめる、いひとかんとすればいとゞしくまつはりて此無實の名晴るべき時もあらじ、我身だに淸からば世の聞えはゞかるべきにも非ずとおもへど、誰は置きて師の手前是によりてうとまれなどせられなば一生のかきんに成べきそれ愁はしうと様かうさまに案じつれど、我君のもとに參り通ふ限りは人の口ふさぐこと難かるべし、依りて今しばしのほどは御目にもかゝらじ御聲も聞じとぞおもふ、其こと申さんとて也、しかはあれど我れは愚直の性かならずかならず參らせたる恩わすゝものには飽はず、かゝることを申出る心くるしさ推し給へといふ、大人も打あふぎてさる事成しかさることを成しか、我は又勸進ひをなし居たり、お前様余の男子に逢ふはいや也とつね〳〵仰せられしかば紅葉に對面うるさしとて夫故の御と絶か、さらずば此日頃中島様御中立などにしかるべき御緣や定まりたるなんど、川村の老人とも語り居しなり、何はとまれ夫は御迷惑の事出到したるもの哉 我は男の何ともなけれどお前様嘸かし御困りお察し申也。さりながら我は今更に驚きはせず、かゝる事いわれんとはかねて覺悟なり、先我を人にしていわせても見給へよ樋口様は此頃半井といふ人のもとへ時々通ひ給ふよし、其男もまだ老朽たる人にも非ずとかかつは一人住みにあんなると聞を、とし若き乙女の故なきにしもあらじと此うた

方の口より世にもりけん、我が友などにもお前様のこと物がたりたる人もなきにかくすにあらはるゝが常なればにや人は我がしらぬ事までしる物なり、されど猶よくおもへば必竟は我罪かもしれず、先頃野野宮ぬしに物がたりの時いはねばよかりしものを我思ふことつゝみかねてお前様の事しきりにたゝえつつ何と嫁に行き給ふこと能はぬ御身分か、さらばよき聟君のお世話したし、我れ何ともして我家を出ることあたふ身ならばお嫌かしらずしるても貰ひていたゞき度ものよなど我れ實はいひたり、夫や是や取あつめて世にさま〳〵にいひふらすなるべし、今仰せられし様に恩の義理のとけがにもの給ふな、我はお前様よかれとてこそ身をも靈すなれ、御一身の御都合よき様が我にも本望なり、今よりはか來我家にお出あるな、さりとて丸でかげ絶給ふも少し人目をかしからんに折ふしは音づれ給へ、とかくは御一人住みが悪るき也、我いつも申様に御身を定め給ひしかた宜かるなり、今のうき名しばし消るとも我も君も生涯一人にて世を靈さんに、口淸うこそいへ何ともなれた知れた物ならずなど尾ひれ添へられんかしるべからず、お前様嫁入し給ひしのち、我一人にてあらんとも、哀不びんや女はちかひをも破りたらぬど男は操を守りて生涯がくてあるよなどはよもいふ人も候はじとてはゝと打笑ふ、さま〳〵の物がたりしていざや歸らんといへば先今しばし宜かるべし、今日は御せん別ぞかし、又いつの日諸共に粗茶すゝり合ふことや有やなしや期し難きに今しばししばしとてもの語る、此人の心かねてより知らぬにもあらねばか様の事引出しつるにくさ限りなけれど、又世にさま〳〵にいひふらしたる友の心もいかにぞや、信義なき人々

とはいへ誠そら言斗り難きに夫をしも信じ難し、あれと是とを比べて見るに其僞りに曲てなけれど猶目の前に心は引かれて、此人のいふこと〳〵に哀に悲しく涙さへこぼれぬ、我ながら心よはしや、かゝるほどに國子迎ひに來る、家にてもいさゝかはうたがひなどするにやあらむ、打つれて歸る。

や車　雨天の時をば川原にすを結び立て魚をとる也。

地引あみ。

學　羝羊（ディヨウ）　釉（ユウ）

しのぶぐさ

（二十五年六月―八月）

廿四日　半井ぬしの依賴にまかせて、畑島君に見すべき爲の尾崎紅葉紹介斷りの文を出す。

廿六日　夕歸宅す。國子の物がたりに聞けば廿三日に半井ぬし宅前まで參られし由折ふし來客ありしかば憚りてにや立寄もせで行かれたるとなり、今宵は家にとまる。

廿七日　今日は亡兄の命日也、西村君來訪されたるに茶菓をもてなして談話數刻、おのれは直に小石川へゆく。

七月一日　俄に師君思ひ立て鎌倉に趣かれんとす、同伴は田中君なり、小笠原伊東の兩君をも誘はれたるものからいづれも障りあるよし、午前十時家を出らる、留守居には西村の鶴どのとおのれなり、下婢二人と池田屋の妻が大方家の內取まかなへば鶴どのは取あつめて針し事などなし置かんとす、おのれは來客の應接の外は他事もなきに一意著作に從事せんとす、今日は終日師君が路ぢのほどいひ暮して夜にも入りぬ、戸ざし早うしてみな〳〵一處に寄りつどひてもの語りなどもなす。

二日　師君のもとより安箱の狀來る、宿は長谷の三橋なり、

三日　田邊君より我に文來る、さま〳〵あり、歌も有りけり。

四日　師君より又狀來る、下宿がへをされたるよし、八幡前の三ッ橋支店へなり、中三日ほどにて歸らむなどの給ひしが明日ならんか、明後日かと指をる。

五日　午後二時といふに歸宅されたり、やがて大雷雨、其夕べ暇を乞て我は家に歸る。

六日　小石川へ歸宅、歸路河村の女中に逢ふ、半井君の安否をとふに、河村の主人病歿したるよし、うし一人にて萬の取まかなひに奔走いそがはしとかきく、此日伊東君に手紙を出す。

九日　鍋島邸に行幸あり、師君參邸、午後十時頃歸宅、此日半井ぬしのもとに文を出す。

十日　同じく行啓あり、師君參邸せられんとす、おのれは明日宅に事ありて夫にもうけ盡さんとて暇を乞ふ、西村の禮どの參る、是に諸事をゆづりて歸宅直に伊東君を訪ふ、金子借用せしなり。

十一日　亡父君祥月命日たい夜也、菊地の内君及び上野の伯父君、久保木の姉君を呼びて茶飯を供す芝兄君は參られず、日沒一同歸宅。

十二日　早朝築地に趣く、國子と我と也、墓參終りて師君賴まれの伊東しき子とじをとふ、午前歸宅直に中元として半井ぬしを訪ふ、君今日何方へか轉居されんとする也けり、もの語ることも無くて歸る。午後より大雷雨、思ひ立ことありて田邊君を訪ふ、三時より家を出で行く、途上の往來ふつに絶て盆を覆へす樣にふる雨いとすさまじ、女史がもとに至りつきてよりことにはげし、談話數刻晩さんの馳走を受く、太一君にも逢ふ、日くれてより歸宅。

十四日　師君を訪ふ、直に歸宅。

十六日　小石川へ行く。

廿一日二日と圖書館に通ふ、陶器のこと取しらべんとて也。

廿三日　稽古日なり、一同歸宅の後、頭痛はげしく暇を乞て灸治に行んとす、途中大雷雨、しばし表町の西村君のもとにしのぐ、こゝより一時家に歸る方よかるべしと定めて灸はやめになす、師君のもとにはがきを出す、是より歸宅、何事もなく日沒に成りぬ。

廿四日　雨天。

廿五日　おなじく。

廿六日　曇天。圖書館に行んとて支度するほど吉川君の内子參らる、談話正午に成る、同人歸宅後時間も少なければ圖書館行やめになす。

廿七日　圖書館に行く、中島師君のもとより病氣見舞として女中を使はさる、明日鳥尾君のもとに數よみ順會あるべきなれど、腦痛せん方なければ斷りの文を出す。

廿八日　ことなし、山梨縣に水害ありしと聞に、甲府伊庭郎君のもとより書狀もありしかば、是が返事並に親戚四五軒に書狀を出す。

廿九日　晴天。今日は暑氣はげしく頭痛たえ難ければ午後より暫時ねむる、久保木兄君昨日あみに趣きしとて川魚少し送らる。

卅日　晴天。早朝安達に書畫骨董類受とりに行、盛貞君と談話數刻、午前歸宅むし干をなす、日沒よ

り師君を訪ふ。歸路雨ふる。西村君に立寄て傘をかりる、常州北條穴澤の老人刺客の爲に斬られし物語、及び常どの病氣よろしからず樫村醫院に入院なしたる物がたり等あり、入時歸宅。此日の新紙上河野大隈の兩君にばく裂彈を送りたるものある由しなり。

卅一日　雨。午前より野々宮君來る、終日歌詠す、牛井君の事種々ものがたる。

八月一日　曇天。午前田中君來訪、我が病氣見舞として來られしなり、入谷に求め給ひし朝がほ一鉢送らる、甲州貞治より書狀來る。

二日　山崎正助君來訪、芝兄君并に奥田老人よりはがき來る、伊東夏子ぬしより手紙來る、此日むさし野三編を買ふ。

三日　甲州後屋敷より書狀來る、圖書館へ趣く、母君山崎へ金かりに行く、調達なる、奥田老人へ持參し送る。此日淺草に大旋風あり。

四日　晴天。田邊君に書狀を出す、此夕返事來る。

五日

六日　小石川稽古なり、不快をおして趣く、不平いふべからず、此日牛井君より重太君を使者として茶一筒おくらる。

七日　野々宮君來訪、終日歌をよむ、牛井君を訪給ひしよし我事に付ての談話ありしやに聞く、此夜滿月に當れば國子共にお茶の水に月を見る。

我かくかたらふ但し心の中たり、

吹風のたよりはきかじ荻の葉のみだれて物をおもひもぞする

八日　晴天。早朝歌をよむ、六首、うつぼつたる心中まれに日月を得し心地す、快いふべからず、此日新聞號外來る、内閣總辭職、伊藤君總理大臣に成しよし、各新任大臣の名を出したり、夜に入てよりわれに源吉氏より書狀到來す。

九日　晴天。新聞を早朝に見る、内閣總理伊藤博文君、内務大臣井上君、外務大臣陸奥君、司法は山縣、逓信の黒田、陸軍大山、海軍仁禮、農商務は後藤君にして、文部を河野、大藏を渡邊君といふ役割定まりぬ、松方君はじや香の間祗候として特に大臣待遇を以つてせらるゝ由なり。

十日　晴天。朝のほど風祭甚三君より東京府士族授產金一條丸田正盛君にかゝる訴訟等の爲委任狀に調印申こまる、但し代言は磯部四郎、宮城浩藏、鳩山和夫、黒岩鐵之助及び今一人なり、牛井君より長文の手紙來る、返事したゝむ。ひる後小說に從事、奥田より夜に入てはがき來る。此夜することいと多くて、十二時過ろ臥床にいる。

十一日　夜來の雨全く晴て初秋の空いとよくすめり。何事なし。

十二日　晴天。前島むつ子君のもとにかずよみす、題三十題。

十三日　小石川稽古日なり、此日龍子君も參られたり、談話種々、我舍のことに付て世に浮評かまびすしき由、前島君も席にものがたり出らる、諸君歸宅後田中君と我殘りて種々ものがたる、我斗は日沒

近くまで居て師君に相談をうくる。

十四日　晴天。野々宮氏來訪、終日歌を詠ず。

十五日　晴天。午前三枝の君來訪、庭のくだ物持參、ひる飯馳走して歸す、暑氣甚だし。母君日沒後奥田へ氣氣見舞に行給ふ、山下直一君龍谷より歸京したりとて來訪九時頃まで遊びて歸る。

十六日　晴天。暑氣いとゞ甚だし、華氏寒暖計九十七度にのぼりぬ、一時頃よりひる寢暫時なす、寢ざめて後師君のもとより郵書來る、此事につきて田中ぬしを訪はんとす、明日の方よかるべしといふ。

十七日　早朝に田中氏を訪ふ、師の君より依頼を受たる事に付てなり、師の君は今度の浮說の出所に付ていたく田中君をうたがひ給ふと覺しく、同家に出入する書生の事我に問はせんとてなり、我も此人を正當の人とは更に思はず、花柳社會にたちたる人のならひ浮たる行ひありなんどの風說は誠なるべしと聞けり、されども此度のことに付てこゝより出たらんなどゝは流石に思ひもかけねど、猶樣子も見まほしく其上にて取計ふべき旨もあるべしと覺悟す、談話種々、今日は一日此處にて遊び給へとてひる飯振舞る、表面には情づくりて見ゆるものから猶したには師の君などをもいかに思へるにや折々に不平の詞聞えて、ともすれば小出君のことのみ引出すは怪しからぬ事なきにもあらじと思ふ、一日物がたりして歸路師の君のもとに寄る、師の君には中々にさま〴〵の事聞かせ奉ん又むつかしき中立にもやとはゞかりて唯書生の新聞社に出入せざる事のみ談ず、師の君は例の物うたがひ深き質とてひたすら田中君をのみ侮にたゞ、されどもあらはには名をもさゝねどおのづから此人こそ利慾の爲にかゝること作り出し

て我舍を騙とらんとする計略なれ、実には軍師ありて使はるゝ人の中には水際みさ子なども交るらんなどたしかに定めたる想像をたて給へり、明日は田邊君に參りて秘密にこの相談とげて貰ひ度し、この事相談すべき人君と田邊君、天野君の外にあらず、伊東君にも爲せばなすべきなれどおのづからも處もあらんとの給ふは田中君への事なめり、夜一夜はなし明す、我れ種々に思ひなせど田中君の所爲ともきこえず、さりとて島田君、首藤君の出來したるにもあるべからず、大方は師の君につきて宜からぬ行ひなどの有るがいつとなく世にもりてさるが上に田中君、島田氏抔の不品行の人を愛し給ひしかばいとゞ實說になりしなるべしと思ふ、流石にかくともいひ難きもの故いとゞ思ひ煩ふこと多かり。

十八日　晴天。九時頃より田邊君を訪ふ、此事につきてのもの語り種々、同氏も田中君をとは思はず、大方は世におのづから傳たるなめりといふ、岩本君、植村君など樣に人の信深き人々のいかにしてかいひ出たることゝて中々に此ふせぎは難かり、されども其源といふ處を探らば遂にはしれぬ事もあるまじ、もとを知らば枝葉は何とも成るべしなどかたる、とに角今日は此處に遊て歸路天野君にも諸共に行て此事かたらんはいかにといふ、さらば仰せにまかせんとてひる飯もたべぬ、小說家の事に付て種々はなす、交際ひろき人とておもしろきことをかしき事多し、さがのやおむろぬし及び梅花道人の發狂したりといふものがたりあり、内田不知庵君及び櫻井方寸子などの事、明治女學校の敎育方針など、或は高等女學校の浮說の世に流れたる源因、又田邊君朋友の人々の種々なるものがたり等一つにしてたらず、暑き日一日かたり暮す、夕かけてより天野君を土手三番町に訪ふ、家は土手のいと近き處にて詩人のすみ家覺ゆ

る様なる木立いとしげき處に三曲合奏の劉曉として聞え出たるが夫れなり、山登何某の出稽古に來たり居しなりとか、暫時西洋間の方にて待つ、やがて其三曲の間を取片付て其處にてしばしもの語りす、日沒少し前暇乞して出ぬ、市谷見付にて田邊君と袂を分ちてこゝより車にて師のもとまで來る、灸治に趣き給ひし留守なりし少時待つ、但し今一泊なしくれたしと申置たるよしゆゑ我宅へは一書さし出す、晩景小出君來訪しばらく我とかたる、其中に師も歸り給へり、小出君歸宅後しばしものがたりありたり、田中君のこと高田君のこと首藤氏の娘のことなど其中にも重なり。

十九日　早朝歸宅せんとせしかど事多くて九時に成ぬ、いざとて歸宅がけに鈴木しげね君來訪、我は直に家に歸る、母君西村へ趣き給ひし留守成き、久保木來る、二時に歸宅、今日は各評の歌並びに小説の著作少しなす、夜る早くふしけむ。

廿日　早朝。小石川へ行く、稽古日也、題二つ、今日は伊東君とおのれと十點一つもあらざりし、湖月抄の講義も有けり、田邊君昨日田中君を來訪されしよし、我が同君のもとに行たること並に天野君を訪ひたるなど殘りなく知られたり、あやしう秘密といふものを何故にはなし給ひけんとかたぶかれぬ、中村君のもとに明日かず讀の催しありしが障る事ありて廿四日にのばす、田邊君、天野君、片山君などの催しにて雛陳あらんとす、大造、東の兩君をも中間に加へんといふ、師君又灸治に行給ふとなればおのれらは午後早々に歸る。歸宅後小説に從事。

廿一日　晴天。午前より野々宮君來る、歌の添刪をなす、頗る佳絶のも有けり、點取り二つ詠ず、終り一ゝ後稀々談話、同君が朋友の一女生未年四月人に嫁したるが其後便りのあらざりしかば此方より郵書さし出さんとて宿處を問合せて其里方へ趣きたる處、其人不計も居りたり、嬉しくて如何にして當所にはと問へば涙を一目うけてもの語りたる事よ哀さ堪がたしとて野々宮氏涙ぐまれぬ、我も心にかゝりて其人いかにせしにやととへば此頃の新聞などにも見えたる澤木何某が妻なるよし、夫は有爲の若人なるに事素志と同じからず鬱憂のあまり神經の變動を來たし終に自殺を志ざしゝなりとか、疵もいと深かれば多分は一命も六つかしかるべしといふ、其兄弟なる無賴漢のこと、親友なる柳何某とか時事新報の記者のこと、取集めて談し多し、半井君へ妻君に野口といふ人周旋せばやとせしに中に立人をかしく引しろひて今一人の人を是非といふ、我は餘り心も進まねど頼れ故止を得ず寫眞あづかりて來たりとて見する、さまでには見にくゝも非ず、其人のことに付て小説の事種々かたる、こさ吹風といふ痴史が作をいたく愛て夫より行たしなどの念に成たるなめりといふ、怪しう世にはさま〳〵の人も有ものなりけり、同君歸路半井君を訪はんとて四時頃歸らる、同君よりかり受たる繪畫の手本今日よりならひはじむ、日沒後國子と共に散歩す、三崎町もよりより九段下まで行、半井君の寓居もよそながら見たり、宅に歸しは八時なりし、これより小説に從事。

廿二日　晴天。菊池の老君遊びに參らる、終日談話、久保木及び藤田屋の息子來る、夜に入りてより突然澁谷君來訪、暑中休暇にて歸鄕したるなりとか種々ものがたりす、我小説ものする事三枝君より傳へ聞たりとて其よしあしなどいふ、猶つとめ給へ潔白正直は人間の至寶なり、是をだに守らば何時かは好

時に逢はずやある、我其かみの老へには君の家かくまでにとは思はず、富有と斗思ひしかば無理をいひたる事も有し、今はた思へばいと氣のどくに心ぐるしさたえ難し、もし相談したしと思ふことあらば遠慮なくいひ給へ、小說出版などの爲の費用あらば我たてかへ申べし、又春のやなり高田なりに紹介新みたしとならば我明日にも其勞は取らんなどかたる、半非ぬしのことかく〳〵と我もいへば、夫は勉めてさけ給へ、いづれ恩も有べし義理も有らんが夫につながるゝ末いとあやふし、正當の結婚なさんとならば止むる處なけれど浮評といふものはあしき事なり潔白の身にもしみつかば又取かへしなかるべくや、兎角君は戸主の身振かたも六つかしからんが、國殿は他へ嫁し給ふ身あたら妙齡を空しく過し給ふな、我もむかしは書生上りの見る處少なく思ひ廣くして小說にいふ空像にのみ走りたれど今は滄石によの風しみこみて老人めきたる考へにも成たりなどかたる、此新年の狀は君や書給ひしうまきものなり、我々も人ごとに見せてほこりぬ、何ぞ書きたるものあらば得させてよかたみにせん又持行てほこりたければと例のうまき事いふと知りながら流石につよくはいろいかねて短册一ひら送る、我が目の近くて澁谷ぬしのお顏さへよくも見えずと語れば、困りしもの哉何とかして直し度ものなり、明後日我は歸鄉せんと思ふにあすまた訪はん諸共に醫師へ伴んかいかになどかたる、都の花にもし投書なさば一本を送り給へなんど夜ふくるまで語る、又何時來べきかしらず寫眞あらば給はるまじきか、我も送らん、とかくは潔白の世を過し給へ、今御覽ぜよ必らず善事は來るべし、此事のみは我保證するなりといふに、我れも世の浮說は何といふやしらず、天地神明に斗は恥ぢざるつもりなり、もしも世に入れられずば身を汨羅に沒するともよし決してにごりにはしまじと思ふなり、澁谷樣此次參りたまふ頃には校豆うらんか、新聞の配達なさんか知れ侍らず、其時立寄らせ給ふやといへば、必ず〳〵立寄ん、もしも不義の榮利にほこり給ふに逢なば斷じて顧みはせざるべし、嗚呼則義どの在世ならばかゝる事にも立到らざらまじと氣のどくの事なり、父君の愛し給ひし道具などはいかにかなしたる、もし迫り給ふことありともうしなひ給ふな、其場合には我もとへ告こし給へ、夫斗はうしなはせ申まじ、衣類などはことにも非らず、こしらへんとすれば何時にても出來るべし、重代のものは大事ぞかしなど入立てかたる、いざ歸らんと立しは十一時成し、又立歸りて夏子ぬしの日は困りしもの哉、いかなる質なるにかと氣遣しげに問はるゝに、我とこしらへたる近眼なりと笑ひていへば、さらば先よし、海岸などの見渡し廣き處に居てしばしやしなはゞ直ちになほるべしなどいひて出る、車待せて置たるなり、身形などはよくあらねど金時計も出來たり、疑もはやしぬ、去年判事補に任官して一年半とたゝぬほどに檢事に昇進して月俸五十圓なりといふ、我十四の時この人十九成けん、松永のもとにてはじめて逢ひし時は何のすぐれたる量見もなく學なども いと淺かりけん、思へば世は有爲轉變なりけり、其時の我と今の我と進歩の委處かはむしろ退歩といふ方ならんを、此人のかく成りのぼりたるなんことに淺からぬ感情有けり、此夜何もなさずして床に入る、

廿三日　晴天。西村君來訪、師君のもとへ明日のかずよみ斷りのはがきを出す、澁谷君又來訪、土產に菓子を送らる、西村君直に歸る、談話種々おこる、夕べむさし野かはんとて繪草紙やたゝき起して買ぶのし

たるはよけれど、間違て吾妻にしきといふものにてあり、是より行て取かへてこんなど笑ふ、大隈、前島、鳩山をけさ訪しかば、路故佐藤の梅吉をも訪ひぬ、これより山崎君訪はゞやなどいふほどひるも近づきぬ、ひる飯いかになどいへど、否喰はじと斗いふに、さらばとて車夫に斗出す。書帖見度しといふがまゝに出して見する高まんのことゞも極りなし、いざ三人にて寫眞うつしに行かんいざ〳〵とそゝのかせど、先々とて我よりやめにす、趣後へつかば直に手紙を參らすべし君も給へよなどいそ〳〵歸路につく、近世偉人傳のこと依頼せらる、晩菘翁の履歴かき給ふ御處存なきやといへば、書たけれどいまだ其暇に至らず、何とぞ君にも心がけて御聞こみの事あらば記をくに止め給ひてよなどいとこと多かり、手紙を約して歸る。今日はいと涼しき日なり、午後よりは來る人なくいと閑暇、小説に一意從事、めづらしく手習をなす、夜に入てより母君の肩をひねる、少し暑氣あたりとみえたり、夫より繪畫植物の一冊ひけり。

なみ風のありもあらずも何かせん一葉のふねのうきよ也けり

日記（二十五年八月—九月）

廿四日　晴天ながら折々に鳴神の音するはやがてこゝにも降らんとすらんなどいひ合へり、きぬ三つ四つ洗ひて後机につく、西村君參らる、昨日細君の世話せんとて俳初音ぬしのこと物がたりしかば其事猶よく聞かんとてなり、午前に歸宅。母君一昨日より時候あたりにて心地すぐれず、今日は臥がちにおはしき、終日机邊にありて、日沒後母君の肩を國子と共にひねりて臥させ奉る。おのれも今宵はかしらいといたくなやめば早く臥たり。

廿五日　晴天。母君まだ快からず、家内の掃除勝手もとのことなど九時頃までなして机につく、斗らぬことより種々の事案じ出して身をかへりみる心切に成ぬ、あみ初し小説の趣向もいたくかへんとす。

廿六日　今曉三時傳通院内たく藏稲荷燐失、此いなり近邊に失火ある時は告あるき給ふとか聞しを、其社の燒しといふをかし。

廿七日　小石川稽古日に趣く、稽古後師君と少しものがたりす、傳通院内淑德女學校とかやに我を周旋せられんとかゝる物語あり、我も思ふ處のべなどして歸る、母君にこの事を聞かせ奉るに喜限りな

し。今宵はいたく勉強したり。

廿八日　晴天。野々宮來る、半井ぬしを訪ひ給ひしに鎌倉に趣き給ひしまゝいまだ歸宅されざる由、我が繪畫用の筆買ひて給はりぬ、歌二題詠ず、初音君父姉の歌添刪頼み度しと持ち參られたり、終りて後種々談話、同君は宗教家の事とて有神論を主張し給ふ、我れは有神無神もと一物論をとなふ、談佳境に及て中々に盡ず、右京山に月のぼるまではなし暮す、いざとて歸宅されんとするに同君所持の洋傘及び我家のも合せて三本ほどいつのまにかうばはれたるもいとをかし、後に母君くに子などの殘念がれば何悔む事かは我家のものこそうしなひたれ天下のものゝうせたるならず、誰人の手に渡り誰れ人の處持になるとも用は一つのみ、洋傘は洋傘なる効用のかはるものならず、有たればこそうしなひたるなれなくなりたれば又うる事あらんとて笑ふ。我家貧困只せまりに迫りたる頃とて母君いといたく歎き給ふ、此月の卅日かぎり山崎君に金十圓返却すべき筈なるを、我が著作いまだ成らず、一錢を得るの目あてあらず、人に信をかくこと口惜しとてなり、種々談合、おのれ國子ある限りの衣類質入して一時の急をまぬかればやといふ、母君の愁傷これのみとわびし（甲府野尻より書狀來る。此日野々宮君より國民新聞かりる。）

廿九日　晴天時々雷鳴す、頭痛いとはげしければ暫時ひる寢、午後より小說勉强す、野々宮氏來訪、婦女雜誌持參にて物がたりす、洋傘を人より二本もらひたればとて一本を我家に送らる、昨日いひしに違はぬもをかし、又いつうしなふべきにや、少時にて歸宅。此夜國子に習字ををしふ。

卅日　晴天。母君しきりに貧入れのことを可ならずとして安達に一度金策たのまんと早朝起き給ふ、我つとめて止めたれど甲斐なし、同家不承諾のよしにて午前に歸宅、思ひしことなりとて一同笑ふ。午後よりことに勉强、日沒後國子と共に右京山に月待とりて虫を聞く、歸宅後山下直一君來訪。

卅一日　晴天。今日は二百十日の厄日なりとか聞くを空のどかにして風もなし、終日來客なく、日沒後母君西村君を訪はんとて出給ふに引違へて同氏來訪、しばらくにして歸宅、山崎君金子の事に付て參る、此夜更けて久保木に出產の模樣ありとて母君迎ひに來る、先は其こと無く今宵も過ぎぬ。

九月一日　早朝國子姉君を見舞ふ、さしたることなし、母君は鍛冶町に金子からんとて趣き給ふ、我腦痛いとはげし水にてかしらあらひはち卷などす、筆とることいとものうきに文章軌範少時通讀、韓非子が說難むねに徹しぬ、午後母君歸宅、鍛冶町より金十五圓かり來る、午後直に山崎君に金十圓返金に趣き給ふ、同氏澁谷三郎君を我家の聟に周旋せばや、もしは嫁に行給ひてはいかゞなどしきりにいひしを母君斷りて來給ひし由、世はさま〳〵なりとて一同笑ふ。澁谷君が今日も何事の感じありしにや我もとにての物がたり怪しう其筋を引かけつゝ、我よりいひ出んを待つものゝ樣に見えし、はじめ我父かの人に望を屬して我が聟にといひ出られし頃、其答へあざやかにはなさで何となく行通ひ、我とも隔てずものかたらひ、國子と三人して寄席に遊びし事なども有けり、さるほどに我が父この事を心にかけつつ年は事とゝのひし樣に思ひて俄にうせぬ、しばしありふるほどにかの人もいまだ年若く思慮定まらざりけんしらず、ある時母より其事懇にいひ出して定まりたる答へ聞まほしといひしに、我自身はいさ

さか違背もあらず承諾なしぬといへり、母君悦こびてさらば三枝に表立ての中立は頼まんといひしに、先しばし待給へ猶よく父兄とも談じてとてその日は歸りにき、事いかなるにか有けん其後佐藤裕吉して怪しく利欲にかゝはりたることいひて來れるに、母君いたく立腹して其請求を斷り給ひしに、さらば此縁成りがたしとて破談に成ぬ、我もとより是れに心の引かるゝにも非ず、さりとて憎きにもあらねば、母君のさま〴〵に怒り給ふをひたすらに取しづめて其まゝに年月過ぎにき、されども彼方よりも往復更にそのかみに替らず、父君が一週忌の折心がけて訪よりたる、新年の禮かゝさぬ事、任官して越後へ出立せんといふ時まで我家にかならず立よりなどするからに是れよりもうとみあへず、彼より文來たればこなたよりも返し出しなど親しくはしたり、さるに此度びの上京いかに心を動かしけん更に昔しの契りにかへりて此事まとめんとするけしき彼方にみえたり、我家やう〳〵運かたぶきて其昔のかげも止めず、借財山の如くにしてしかも得る處は我れ筆先の少しを持て引まどの烟たてんとする境界、人にはあなづられ世にかろしめられ耻辱困難一つに非ず、さるを今かの人は雲なき空にのぼる旭の如く實家は聞ゆる富豪のいよ〳〵盛大に成らんとするけしき、實姉は何某生糸商の妻に成て此家又三百圓の利潤ある頃といへり、身は新潟の檢事として正八位に叙せられ月俸五十圓の榮職にあるあり、今この人に我依らんか、母君をはじめ妹も兄も亡き親の名まで辱かしめず、家も美事に成立つべきながら、そは一時の榮もとより富貴を願ふ身ならず、位階何事かあらん、母君に寧處を得せしめ妹に良配を與へて我れはやしなふ人なければ路頭にも伏さん、千家一鉢の食にとつかん、今にして此人に辭きしたがはん事なさじとぞ思ふ、そは此人の骨くきたらず、はた我れ我まんの窟地にも非らず、世の中のあだなる富貴榮譽うれはしく捐てゝ小町の末我やりて見たく、此心またいつ替るべきにや知らねど、今日の心はかくぞある、又おのづからにへだつる時ありやとてかくは記るしつ。今日はいとものうくて何事もなさずに日を暮しぬ。

二日　晴天。伊東夏子君及び師君に手紙を出す、終日何もなさず、沈思に終る、此夕は久保木姉君家出の騒動あり、母君大心配、但し此夜歸宅したるよし。雲いとさわがし雨にやなどいふ。

三日　晴天に成りぬ。早朝に洗濯もの三四枚なす、此頃柔弱に馴れたる身の苦しさ堪がたきに、是よりはつとめて力わざせばやなどかたる。

久保木來訪、姉君家出のてん末ものがたる、投身などの覺悟にや、水道橋の袂にて取押へたるよし聞く心堪がたし、久保木歸る、直に母君奥田へ例月の利子もて行給ふ。伊東君より書狀來る、昨日の返事なり。母君奥田にてひるめし馳走に預り給ふ。歸宅は午後。

朝ごとに南のうねにたがやしてる日にむかひて牛をおひ又馬をおひてシイドウハしることきくや可愛くもありのまゝなる野のたのしみはほんに王様もなるまい事よ成ることならばよい妻持つて歌がたりを手枕にサア手枕に。

長州赤間いなり町遊女から綾

千代女

すれ〳〵の中にとくさや露のたま
三界唯一心心外無別法心佛及衆生是三無差別

その女

千なりもつる一と筋のこゝろから
誰れかみんたれかしるべきあるに非らずなきにもあらぬのりのともし火
いろなしとなにかいひけん吹くまゝにしむものを秋の夕かぜ

むねのうら書

伯父なる人のようといふ腫物になやみて切斷などしたるなごりもいと俄かには治しがたき景色なりときくにもの哀にて一日訪たる、六疊斗なる坐敷に打ふし居たる、石炭酸の香りの高やかなるにほひくるまゝにふと思ひ出るはかの人の病ひにふしたる時のことなり、かく廣やかなる處にはあらでものむづかしく狹やかなる部屋に夜具ふとん斗は此處のよりも立派にして枕もとに箪硯を放たず、いかに病ひはげしき時といへど日々の新聞に一回も缺きたる事なく、おのれ筆とり難き時は口述してやがて人に書かすめり、數千の借財に身をおそはれて行方もなき頃成しかば、いと〳〵かすかなる蓬生に這ひかくれて親兄弟なども身ぢかき處にあらざりしかば、いとこなる女に萬世話をうけ居たりしものたらずがちの景色もかなしく、枕もとに我を招きて一ひらの寫眞とり出しつ、是れはこのほど病ひの發せんとする一日前にうつせしなりよくうつりしか見て給はれ、我れはいつも生やさしくひな〳〵とうつりていや成りしに是れは人ごろしにてもなさんとする人の樣に見ゆるこれが正物なるべしとて心よげに笑ふ、われ日毎のやうに見舞て樣子をとへば嬉しげに物がたりすることもあり、厭はしげの時もあり、嬉しげなれば又明日も訪はましと思ひ、厭はしげなれば何事の氣に障りしにや機嫌取らんと又あすも訪ふ、ある日いとにこやかにて、樋口さまは我がせがれに逢ひ給ひし事ありやと問ふ、鶴田君がはらにと聞く其子の事かとかつは心可笑しく、いなまだと言へばさらばお目にかけんとてやをら起出で抱出し給ふは一尺斗の人形なり、娘子供の愛らん樣にうつくしき衣きせてかしづくと覺しきは三十男のしかも今の世の才たけたる人に似合しからぬ事とをかし、我れ抱き取りて頬ずりなどすれば、從姉妹なる人の、君も人形は愛し給ふやこの顔つきよく見て給はれ何とよく似ては居侍らずや、此額ぎはの青筋はりて肝癪らしき處と笑ひつゝ半井ぬしを指さす、何處が似たりや我れには知れねど、此人形もうつくしくかの人も美くしけれ

ば似たりといはば似ても居るべし、彼人少し笑ひて、我れ一小說を著作し終る毎にかならず其中の立物を人形にかた取りて一ツづゝ買ふが常なり、すでに〳〵十斗は買ひ溜たりといふ、さらば是れは誰れかと問ふに林正元なり、此子には羽織袴きせずば似合はず、兎に角に容貌うるはしきが上に品位備はりて天晴の子がらなり、かゝる子供一人あらば外に何をか願はんとて大笑す、來年よりは三月五月の兩節句に男女の人形共が祝ひしてお客樣せん、其時はかならずお正客に招かんなどかたる、この人形かふ時もすでに祭のしたかりしかば職りなど調へんとして伯母なる人にいたくしかられたり、此人形もいたく止められしを三夜十軒店にたち盡してやう〳〵に手に入たりと子供めきたる物語りにしばしまぎらはすも中々になやましき處あれば成りけん、其の時の我心には十二十斗數にも非ず、我身一生行來して何事まれ物語り合せんの心成しを、かく喰違ひて引はなれたる、彼方にはすでに〳〵我名をも忘れ給ひけん、さりとも小說などの事の折ふしには思ひ出し給ふ事もなからずやなどゝ問ひしにかなし、此伯父の常にはことなりてなつかしげに物語りし、はれたる手をさし出して我手の上に重ねなどしてさめ〴〵と涙落したる悲しともかなし、かゝる時の折ふしにも猶かの人の忘れ難きはなぞや。

泉州境眞言宗僧　辭世

よの中はしやの〳〵ころもつゝてん〳〵で來る坊主にのこる松風

東叡山寄龍院のちご喜平

朝がほのもろき命をもろ共にあはれと思へ露の身の上

樋口虎之助

岐阜縣下美濃國惠那郡茄子川村成瀨誠志方

につ記

（廿五年九月—十月）

四日　曇天。今日は日曜なれば野々宮君來訪さるべしとて支度し居たるに、西村君上野の房藏氏來らる、談話少し、やがて野々宮君參らる、前よりの人々歸る、歌二題よます、宗教上のもの語種々あり、午後より雨降り出づ、しばしの晴間に同君歸宅今宵は待宵なれど月なし。

五日、曇天。芝より兄君來る、薩摩陶器の土瓶かひてあらば賣りたしとて五個ほど持參、我家にても一つあがなひ度しなどいふ、日沒まで遊びて、歸路諸共に萬世橋まで行く、兄君はこれより馬車、おのれと國子は小川町に廻りて燒あとの新築を見、東明館に墨をかふ、今宵舊七月の十五夜なり、夕方より一點の雲なく成りて明月の光り何ともいへず、お茶の水橋に虫聲きゝながら暫時たゝずむ、歸路にはがきをかひて田中君に各評出詠斷りを出し、小笠原君に數よみ出席斷りをいふ。家に歸りても月の光見捨がたく、板敷のもとに更るまで一人起居たり。

六日　大雨車軸をながす樣なり、前の小川に水あふれてさながら瀧つせのひゞきをなす、母君は久保木に出產あるけしきなりとて午前の內丈かしこにあり、我今日は筆ことの外動きて一回分書き終へたり、日沒頃より久保木の樣子ことに惡敷、國子と母君替り〴〵に趨き給ふ。

七日　晴天。午前の內つとめて小說に從事す、動坂より師君手紙を賜ふ、小笠原家の數よみなるに我れ斷りて行かざりしかばなり、今日は田中も伊東も不參にていと淋しく淸書にもことかけば是非參り給へとなり、やがて支度して趨く、人々すでに詠じ終りたるのち成りし、淸書しながら四題詠ず、師君用事ありとて直に歸宅、殘りて點數のしらべをなすに長齡子ぬし高點成けり、是よりいとま乞して歸る、日沒少し前成し。今宵の月ことに淸かり。

八日　晴天。澁谷君より書狀來る。小笠君にはがきを寄す。

九日　晴天。兄君訪問、日沒まで遊び、歸宅後大雨車軸を流す、山崎君よりはがき來る。

十日　大雨。早朝に田中君車を馳せて今日の稽古に出席のことを賴み來る、さればとて直に小石川に趨く、稽古なくして師君出がけの處成し、暫時殘りて加藤の妻とものがたりす、師君の行爲聞くまゝに胸いたく成ぬ、みの子君も參らる、少時談話、正午頃歸宅、午後久保木に出產あり、小兒は死したる由、日沒頃見舞にゆく、此夜石井よりはがき來る、野々宮君に明日の稽古斷りのはがき出す。

十一日　晴天。

十二日

十三日

十四日　此處三四日日記處でなく、大いそがしなり、但し格別かく事もなかりき。

十五日　小說うもれ木出來上る、田邊君に持參、途中より雨に成りぬ、車にて到る、同君何方へか結婚

の約整のひて是よりは筆とり難き身と成らんとすとて物がたらる、我が小說雜誌に掲載せんよりは小册の本になしたる方後來の爲よかるべしと物がたらる、我れ一人鉾豪は心細きに君も何か書て給はらば幟尾の靑蟲僥倖なるべしといふに、否々夫處ではなし却て蛇の足ならんが、何か四五枚の物かくべしとうけがはる、半紙判二ッ折の小形製にしてうるはしき表裝にせばなどいふ、明日直に金港堂に持たして遣らん、但し十日位間はあるべしとにはべる。

十六日　晴天。圖書館へたねさがしに行く、春雨ものがたり丈山夜譚及び哲學會雜誌などを見る、歸路荻野君寓居を訪ふ、妻君に逢て新聞をかりる、歸宅は日沒少し前成し、今宵朝日新聞通讀、野尻君に一書さし出す、石井へも同じく。

十七日　晴天。今日は田中君會日なり、されどおのれは行かず圖書館に行く、奇々物がたり、くせ物語、昔々ものがたり、各國周遊記、雨中問答、乘合ばなし等かりる、四時頃館を出る、此夜は何事をもなさず、はやく臥したり、但しこの夜山下直一君來訪。

十八日　晴天。野々宮君古に參らる、今日は用事ありとて正午歸宅、午後より諸宗敎文少し見る、習字二通り斗りして夫より萬葉集を見る、夕暮より國子と共に散步をなす、右京山に虫を聞て夫より田町通り本郷の臺にのぼりて大學前あたりを遊びて歸る、二人にて母君のもみ療治をなす、臥させ奉りてより近松の浮瑠璃集をよむ。

十九日　起出でゝみるに雨成りけり、まだ明ぐれの庭のおもに草むらがくれこうろぎの鳴ける又なく

哀なり、はき淸めなどして机に向ふに、雨だれの音軒ばのらんの葉にほと〳〵として、吹風のそゞろ寒きなど、氣候のうつり行さまいとしるし。

二十日　雨天。

廿一日　雨天。山梨より甲陽新報來る。伊東夏子君より書狀到着す。

廿三日　雨猶やまず。早朝野尻君より書狀來る、甲陽新報へ載すべき小說著作しくれ度しとなり、前田家より使ひ來る、各評の袞送りこしたるなり、午後小石河師君よりはがき來る、此月に入りてより思ふことありて何方の歌會へも一度の出席もなさゞれば夫をあやしみてなるべし、兎角明日の會には出席せばやと思ふ。日沒少し前より大雨盆をかへす樣なり、母君明日は不參の方よかるべしとの給ふに、さらばとて師君のもとにぞ手紙を出す。

廿四日　晴天に成りぬ。終日著作に從事。夜一夜雨ふる。

廿五日　晴天。野々宮君來る、和歌三題詠ず、四時半までものがたりす。日沒後國子と共に勸工場を一二ヶ所縱覽。はやく寢たり。

廿六日　晴天。早朝師君のもとを訪ふ、大宮公園に秋草を見物と誘はれて直に十一時の汽車にて行く、三時の車にて歸る。

廿七日　晴天。日沒少し前師君のもとに平家もの語持參。

廿八日　田邊君よりはがき來る。

廿九日　ことなし、兄君美濃へ出立。

卅日　同じく。

十月一日　晴天。小石川稽古に行く、別にことなし。

二日　田邊君よりはがき來る、うもれ木一ト先都の花にのせ度よし金港堂より申來たりたるよし、原稿料は一葉二十五錢とのこと、違存ありや否やとなり、直に承知の返事を出す、母君此はがきを持參して三枝君のもとに此月の費用かりに行く、心よく諾されて六圓かり來る、そはうもれ木の原稿料十圓斗とれるを目的になり、此夜國子と共に下谷ステーションより池のはた近傍を散歩す。

三日　晴天。

これよりしばらくことなし。

連日の雨や机と御親類

十一日　少し雨のひまみえたり、野々宮君來訪、岩手縣に新高等女學校開校されんとするに招かれて主坐の任を帶て十四日出立せんとするなり、付きて教科書の不審の處問ひきゝ度しとて我れを訪ふ、和文讀本四册を相談す、同人より駒下駄一足貰ふ、此方より花むけとでもなけれど有合せの半ゑり一かけ送る、夜に入るまでものがたりして歸る。

十四日　連日の雨はれ渡りぬ。野々宮ぬしの出立午前に成りしと聞くに早朝より家を出づ、國子と共に先づ途すがら安達君の病氣を訪ふ、ようといふ腫物にて切斷せられしなり、老たる人の心細ければにや涙ほろ〳〵とこぼして物がたりせる、こゝを出でステーションに行きしは十一時ちかゝりき、野々宮ぬしに逢ふ、送る人も十人斗あり、毛利すま子とて大島みどりぬしが知人もありけり、初對面の禮をなす、車の動き出るほど何とはなしに心細し、これより根岸邊を少し見物す、道路雨あがりにていと六ツかしかりき、歸路は國子よわりによわりて大學のうら門あたりまで來し時はあしも上がらぬ景色なりし、からくして歸る。

十五日　晴天。小石川稽古に久し振にてゆく、櫛原家の令姫今日より通學し給ふ。

十六日　晴天。田邊君のもとを訪ふ。

十七日　雨天。上野房藏君來訪。

十八日　おなじく。野々宮君より安蕾の報來る。

十九日　好天氣なり。西村君來訪。母君小林君及び菊地君を訪ふ。都の花に載すべき筈にて金港堂へ廻し置たる小說もはや一ケ月斗にも成れるをいまだ其價は我が手に入らず、さりとて催促すべき處もなければ、日々首をのばして便を待ばかり、母君よりは手元の苦しさをしば〳〵訴へ給ふ、それも道理なり、此月中に是非入金の道なくばと頭を惱ます、甲陽新報へも六回斗の物差出し置きし夫さへ何の便りもなく、日々に送り越す新聞さへ此兩三日は如何にしけん發送もなし、彼れ是れと煩はしくて夜に入れどねむり難く、書見に二時すぐるまで更したり。

廿日　好天氣。よべ夜更しをなしたるに少し朝寢をしたりし枕もとに早くも郵便にて甲陽新報つき居

たり、邦子いちはやくくり腐げてあゝ今朝より經づくゑ出たりとさけぶ、我れもあわたゞしく起出てみれば實にぞしかなりき、此月の六日斗にさし出し置しのなりけん、此分にては更に著作し送るとも沒書にも成るまじと安心す、おもへば我ながら恥かしき心なり、智識たらず學事とゝのはずとは萬も二萬も承知なしながら、文學中ことに六つかしゝと聞く小說をかきて一家三人の衣食をなさんなど大たんといはんか身知らずと云はんか、人知らぬよ半の寐覺に背に汗のいと心くるし。

廿一日　圖書館に行く、此留守に金港堂編輯人藤本藤陰來る、うもれ木原稿料十一圓七十五錢送る、猶たのみ度ことあるよし言置たりと聞くに、さらば明日早朝に同人方を訪はんとおもふ。

廿二日　小石川稽古なれど藤本に約したることあれば早朝車を猿樂町に寄す、初めて對面す、種々ものがたる、都の花明年の初ずり附錄に松竹梅の三幅對を田邊君及び我と外一人の婦人に著作し貰ひ度し、依てこのことを花圃女史にも依賴なしたるに何れ考へてとのことなりしが、何とぞ相談の上に兩君にて一つづゝ題を定め給り度し、其殘りたるを佐々木竹柏園にか坪井秋香にか廻すべければと成けり、少時にて歸宅直に小石川へ行く、大雨成しが歸宅後には止みたり。

廿三日　母君三枝へ參り給ふ。都の花より受とりたる金のうち六圓を同君に返へさんとてなり、同君もいたく喜ばれたるよし。

廿四日　大雨。午後より田邊君を番町に訪ふ、留守にて母君としばし談る、歸路半井君下婢に逢ふ、同氏の近狀を聞く、萬感萬歎この夜眠ることかたし。

廿五日　晴天。母君田部井を訪ふ。西村常女來る、家にはりもの板なければ我家にて張り度となり。

道しばのつゆ

（廿五年十一月—十二月）

九日は萩のやの納會なり、二日三日前より時のけにやいたくなやみてかしらもあがらず、出席むづかしかるべしと思ひしも、今朝より俄に心すがゝしく此ほどならばと行、髪などもはかゞゝしくもとりあげず手あしなどもあかつきたるまゝ成し、田中、鳥尾、中村などの人々は我より先成けり、さはいへど常の樣にもあらねば歌もえよまずものうげなるを人々みあつかひてさまゞゝに介抱さるゝいと嬉し、來會者は三十人にあまりぬ、龍子の君の田中ぬしにことづけて我と伊東君に文あり、この廿日までに嫁入り給ふべきよし、今日の會をおもひやりて歌あり、

むれ遊ぶ澤邊のさまをおもひやりて心そらにもたづぞ鳴なる

なくねもしどろなるみだり心地をゆるさせ給ひてよなど例のうるはしうみだれ書給へるうつくしくさやかなる紙に遠山のかたかすかにかすませて田鶴鳴渡る松ばらのけしき繪もをかしかりし、我には又別に十五日前にいま一度おどろかし給てよ、あたらしき家居には誰も居ごゝちよからぬものにて今よりのちしばらくはゆるゝ〳〵御ものがたりもかたかるべくいかで〳〵などありけり、これがかへしはと人々いふものからさわがしさにまぎれてやみぬ、夕すぐるほどかしら俄になやましう成りしを人めにもしか

みえけん、まだ殘る人いと多かりしかど、我はくるまたまはりて家に歸りぬ。

十一日　雲のあしさだまらず雨にやなどいへど、龍子ぬしよりの文もあり、今一度はいかでと思へば、今日をすぎて又よき日あらざりけり、さるはかの三崎町のうしに有しのちの物語も聞こえ、今の身のありさまもものの隔てずつげまほしきをふりはへてはいかゞ人めの關のわづらはしきはさてものがるべし、母君妹などもゆるしなうの給なすを、しのぶの山のしたの通路もとめんには何ごとのうきかあるべき、たゞ誠のゆるしを得てとおもふほどに、折もよし此廿日よりはみやこの花にわが名かゝげられんとす、むさしのゝゆかりあるかの大人にこの事つげずばいかゞなど母君はまづの給ひ出にける、さらば龍子ぬしがり參らせ給ふ道すがらこそよけれと妹もいふ、ありし文には、

十一日か十三日おどろかしたまへとなるに、十三日は日曜なり、大人のもとにも友など多くつどひ居らん中々にものうるさしとて、今日は龍子ぬしも訪ふ成けり、祝ひのものどももてゆく道にて三崎町への文は出しぬ、君は何ごとの心がまへもなきやうに例のあされ居給へり、何某新聞の評したらんやうに大雅堂の夫妻おぼゆらんかし、三宅雄次郎といへば世にはたゞ木のはなしなどのやうにおもひて仙人とさへいふめり、さるをこの君のよにめづらしきまで才たかきをむかへたまふなる、猶たゞ人にはあらずとて目をおどろかす人々多し、みやこの花の松竹梅のことといかに成りし哉、われもいよ〳〵十九日には鬼界がしまに移らんとするを中々いとまなきしも心のどかなればにや短編のものかゝばやの心ぐみあり、さるはほんやくといふほどならねど意やくなどいはゞいふべし、伊太利の小說を英にやくせしその物語

を父より聞たるなり、是れを今金港堂に出さば大方は松竹梅に加へんとやする、新年の附ろくといふさへ花々しきを女斗三人などいさゝか目だつふしなきにもあらず、かしこにもさるけざやかなることを好まぬほんしようなるに、とつぎてほどもなくいかにぞや、それも君とわれと坪井の秋香ぬしなどならばまだ少しはよし、坪井の家は三宅とはいさゝか縁しのなきにもあらず、此十三日に小石川の植物園にて披露をなすべき筈なれば夫よりは迫々にしたしみを重ぬる道理なればなり、聞くところにては竹柏園や遇みに當りけんそれにては少し不都合なればとて笑ふ、おなじうは君のと共にして一冊のものよに出さばや金港堂ならで春陽堂にてもよし、何かお作はなくやと問はる、我れ例の遲筆なれば是れぞとおもふものもあらず、されどもかねてものしかけしがしばしにしてまとまらんとするをあはれ諸ともにせさせ給はゞ嬉しなど語り合ふ、ひる飯たまはりてしばしして出ぬ、二時にも成けん、番町より車にて三崎町にいそぐ、北風いとつよく身をさす樣也、月日隔てゝものくるほしきまでおもひみだれたるを君はさしもおぼさじかし、心にもあらぬやうなる別れのその折はさま〴〵いひさわがれたる人ごとのつらさに何ごとをおもひ分くるいとまもなかりしを今さらにとりかへさまほしうおぼゆるぞかひなき、はじめよりにくからざりし人のしかも情ふかうおもひやりのなみ成らざりしなどおもひ出るまゝに、何故にかく成けん、身はよしやさは犬かたのよにつまはじきされなんとも朝夕なれ聞こえなましかば中々にいけるよのかひなるべきをなど取あつむれば、人も我もよの中さへもいとにくしかし、まづ何ごとをいはゞや、かの君がみ心もしらずうちつけならんやうに月日の隔てをかこたんもいかゞ、さりとて都の花のこ

とよりせんもいとわびしかしなど思ひつゞくる間に車は大人が店につきたり、いま更に心おくるれば雪なうもしばしとたゆたはれぬ、此處は新開の町のはな〳〵敷にいとゞみがきそへたる茶だなにしあればいでいりの人行來の人見おはすらん目ざし心がらにやいとつゝましくおぼゆ、こゝには早く文のとゞきて大人やしかの給ひおきけん、かしこげなるこものゝいそぎはしり迎へてこなたへといふ、店と奥の暖簾口にたちてさしまねくは見しれるはしたなり、ものつゝましういざり入れば六疊敷斗の處に机おきてゆたかに大人は寄りかゝり居たまへり、ふとあふげばものいはず打笑み給へる嬉しなどはよのつねたゞ胸のみおどりぬ、といはん角いはんなどおもひつゞけしことは何かにかはかくしけん、さらに〳〵いはるべくもあらず、からうじて月日いかゞすぐし給ひけん心には忘るゝ間もなきをおもひよらずもの隔てゝのみなんありし、御なやみの後はさしも御なごりなうとこそおもへりしに、此ほど御めしつかひよりそこはかとなくよわげになど承りしは誠にやなどほのかなるものがたりに景色心みれば、たゞにこやかに灯笑みてこと少なうなるしも底に物ありげにていとくるし、都の花のことかたるに、そはいとよき事成かし、何方にまれ筆とりておはしまさばよろこばしき事ぞかし、我がしれる友などもみな惜しみ合ひてありしものをなどかたらる、さる頃明治女學校の教師なる何某といふ人我がむさし野へ君のこと頼みに來たり、女學雜誌に執筆あり度しといひたれど、さしつかへおはします頃にてしばし筆とり給ふことあたふまじと斷りたるは我が潜越の所爲成けん、もしこれに出したしなどのぞみ給はゞいつにもあれ申給へ、我れ其人に紹介し參らせんにすこしも君が名のけがれには成るべくも非らずなどいふ、我も言はま

ほしきことといと多かれど人めあればぶつもいであへず、君もの給ふことありげなれど口つぐみ給へり、畑島の老母一昨日俄かにうせしかばこの一日二日常に通ひて世話をなし居たりといふ、さるは我が郵便のとゞきたるより歸りおはしたる成るべし、氣の毒なることおもふ、商ひのいといそがはしくして大人のしばしも落付給ふいとまなく立はたらきおはすさま何とはなくかなし、ありし病ひの後はいといたうやせてさしも見あぐる樣成し人の細々と成ぬるに、出入につけてものはかなきみづしめ樣のものにさへ客といへばかしら下げ給ふことのいたましさこれをなりわひとすれば身にはつらしとも覺さゞめるを見る目はいと佗しかし、今日は例に似ずいと商ひの多きは君のおはしたるに依りてなるべし、かゝる福ひの神おはしたるに何かおもてなしせずはあらじとて、みづしめ呼びて菓子などかひにやる、かく隔てなげにものし給ふものから何故とはしらずありしに替りし心地してたゞひたすらに心ぼそし、新開町のならひ何品といへどよきものうる家なく菓子も何もかゝるものゝみなれどゆるし給へかし、かゝる中なれば人は我がみせをもこのたぐひと見てさしも珍重には思はざるを、もしもこゝに來て一度かふ人あればおもひがけずおどろきて、三崎町にもかゝる家ありと夫よりは常に買に來たるなん中々我家の繁昌はまさるべしとうち笑ひつゝ例のおどけ給ふに、夫れは道理ぞかし御店のみならず御あるじがら庭鳥のむれに鶴のうち交り給ふたぐひなればと僅にいへば、そは過賞ぞかしとて大笑し給ふ、人なきを見てつと御身ぢかくさし寄りつゝ何は置て御目にかゝることのいとはるかなるが口をしうこそ、何事もうき世に申合す人なき樣にて心ぼそさ堪がたしと言へば、何かは我などの御助けにも成る節あんらや、されどもしこゝ

に申ことありとも覺さば、此うら道のいとさびしく人めといふものふつにあらねば此處より立寄給はんに誰かは見とがめ申べきとさゝやき給ふ、いでや其しのびたるたぐひを厭へばこそ、こゝにかく心くるしきをと言はまほしけれど申さず來りぬ、何も〳〵殘したる樣にて別れぬる也。

十二月の七日　大人より文あり、朝日新聞にかねてのせたる小說こさふく風更に一本にまとめて世に出さんとするを、いかで御歌一首めぐませ給はらずや、御都合にてしらぬ人のつもりにてもよく、又は御匿名にてもよし、これは參上願ふべき筈ながら例のはゞかりの關ある身中々御さわりにもやとて斯くはとあり、直にかへしたゝめて、歌は一首、よからねども林正元をよめるの成けり、かゝる折ふしの音づれいと嬉し。

八日　ありし去歲をおもひ出るにまことに今日成けり、かの大人より俄かにいふべきことあり人前にてはいといひにくきを夜るなりとも參らせ給はらずや、御歸りは車にて送らすべしとありしに、母君中中にゆるし給ふべくもあらで、この早朝に平河町を訪ひにき、さしてのことにもあらで何かあやしきもの語りにほのめかし給ひしことありきなど、ふとかぞふる折しも龍田君參り給へり、かの歌のはし書をもとめ給ふ成けり、少しものがたりす、菓子など參らせたるを心よく喰ふ、ゆかりある人とおもへば何方かにくかるべき、歸らんといふに母君菓子をつゝみて兄君のみやげにと出す、龍田君よりは我がよろこばしさ上もなかりき、かゝる折ふしのはかなごと中々にかひつけばやとおもへど、猶いさゝかは心地まぎるゝ樣にてなん、あはれはかなしかし。

南佐久間町二丁目一番地
さる樂町二丁目二番地河合直方

宵木虎一
山下直一

よもぎふにつ記

（廿五年十二月—廿六年二月）

かけじとおもへど實に貧は諸道の妨成けり、すでに今年も師走の廿四日に成ぬ、こんとしのまうけ身のほど〳〵にはいそがるゝを、此月の始三枝君よりかりたるかねの今ははや殘り少なにて奥田の利金を拂はゞ誠に手拂ひに成ぬべし、餅は何としてつくべき、家賃は何とせん歳暮の進物は何とせん、曉月夜の原稿料もいまだ手に入らず外に一錢入金の當もなきを、今日は稽古納めとて小石川に福引の催しいと心ぐるし、朝より立まじりて引當しはまどの月の折づめ成けり、家に歸れば國子待つけて、これ御覽ぜよ龍子樣より此お文只今參りぬ喜び給とて見するははがきなり、來新年早々女學雜誌社より文學會といふ雜誌發兌に成らんとす、君に是非短篇の小說かきて頂きたく彼社より賴まれて此御願と有けり、種種お物語もあれば御寸暇にて御入をと末にかゝれしかば直に返事書て、明後日參らんといふ、家にては斯く雜誌社などより賴まるゝ樣に成りしはもはや一事業の基かたまりしにおなじとて喜こばる、此ごろの早稻田文學に文學と糊口といふ一欄ありしを思ひ出れば面てあからわ業なり。

廿六日　早ひるにて番町にゆく、三宅君には始めて參るなれば何か土產持たずばなどいひしが、いざや虛飾は無きこそよけれ、是れをしか〳〵咎め給はゞ哲學者の妻とはいはじと笑ひて行く、田邊君より

は一町斗手前にて女學雜誌社の通に少し引入りたる格子作りなり、向ひ合せに一二軒の隣あり、いはゞ裏屋めきたれど、座敷の數は十間ほどありて家のうちもさまで見にくからぬはおもひしより異成けり、志賀重昂君一あし先に有りて襖一重其方に三宅君と物がたる聲あり〳〵と聞ゆ、此處にもしきりに金を言ひて、五百圓何とやら宮崎が今必死なり、君何ほどとやらを出さば其餘は我何ともすべし、我れに手もとの無きは無論なれど、夫こそ何とかして才覺すべしといふは志賀君の樣なり、あるじは聲低からねど詞吃ればにや、よくも聞とれずと切れ〳〵のもの語り、窮鬼は何方をもおそふものかとをかし、龍子君は木綿の着初めを此處になして憂しとせぬ顏內心ほころぶあれば成るべし、志賀君歸られて後、三宅ぬしも我が席に來給ふ、彼れにこと葉なしこれに訶なし、初對面は窮屈なるものにて、はては困じて次の間に入られぬ、雜誌は女學雜誌社の北村湧谷、星野天知子兩人の創立にて、はじめ葛衣と名付けしを文學會と改ためぬ、夫にはいはれありとて龍子君が異見の用ひられしを語らる、我れに和歌の一欄を受持くれよとの賴み成りしかば、もとよりさる力も非らず且つは暇なきみの中々にうるさければ我一人ならば御免蒙り度し、今一人相役あらば兎も角もとて少し潛越成しが君の事をいひたるに、和歌は何方とも御心まかせ成るべく、一葉女史の事はしもかねて女學生に論じたる如くその妙想に感じ居れば是非小說の著作を依賴したく其方樣より依賴して給はれと星野君より手紙來たりぬ、其女學生の評は見給ひしやと問はる、否しらずと言へば龍子君もまだ見ず見度ものなり、兎角は是非かきて給はれかし、一ッは御名譽にも成り此のちのお爲にも成るべければなどいはる、三十一日までにとの約束にて暇乞して出し

が、さりとては覺束なきこと成けらし。歸宅直に机に向ひて硯をならせど趣向中々にうかばず、いたづらに今日も暮れぬ。

廿七日　亡兄淸光院祥月の命日なり、茶めし焚きて久保木の姉君をまねく、芝の兄君も來臨の筈成しが如何しけん來らず、上野の房藏、奧田の老人など來たりしかば是れを振舞ふ。金港堂の晉づれいまだに非らず、さりとも明日は廿八日なり、餅つかせずばとて二圓斗あつらへぬ、是れは奧田に拂ふべき利金をしばし餅のかたに廻すべき心ぐみ成しなれども今宵この老人の來しに待てよと言はんも苦るしと手もとにあるほどを集めて二圓やる、さるはまだ二圓五十錢斗渡すべきながら夫れは利金ならずして元金の方なればしばしの猶豫を賴みて斯くはせしなり、扨も明日岡野より持こみし時何といはん、榛原へあつらへ置し醬油も酒も明日は來ん、其拂ひは何とせんとみ合す顏に吐息呑込むもつらし、奧田の老人いざとて歸らんとする時郵便とて屆きしは何、あわたゞしく見れば、藤陰隱士より曉月夜の原稿料明廿八日兩替町の編輯處にて御渡し申さん午前の內に參らせ給へとなり、自然は斯くも圓滑なるものか。

廿八日　夕べより野々宮君泊りて今朝もまだ歸らず。家にては餅つきの祝ひにしる粉をこしらへんなど勝手に母君の手いそがし、我れも岡野やより持こむに先立て金港堂より金うけ取來たらんとて十時といふに家を出ぬ、野々宮君もさらば諸共にとて眞砂町まで伴ふ、伊東夏子ぬしにも借たる金あり、何時とかぎりの定めもなけれど投やりにては如何とて、通り路なれば駿河臺に立寄りて其いひ譯をなす、彼

方にも語ることいと多しといふ、我れよりもいふことあれど又こそとて別る、此處より車にて本兩替町の書籍會社にゆく、直に藤陰に會ひて曉月夜三十八枚の原稿料十一圓四十錢をうけとる、十六斗の時成し、九十五の銀行に處用ありて此前を通りしに、洋服出立の若き男立派なる車に乘りて引こませしを見し時、天晴れ美ごとや彼れは大方若手の小說家などにて著作ものゝことに付き此家に出入する人なるべし、三寸の筆に本來の數寄を盡して人に尊まれ身にきらをかざり上もない職業かなと思ひし愚かさよ、我れも辻車なれど美くしき毛皮の前掛に車夫が背縫ひの片かなもじ我が姓かあらぬか知らぬ人のしることならねば、まして古ものなれど絹布の上下着、手に持つ頭巾の僅かに紺屋を口說きて覺束なしと斷られし染めを賴み、しんしの張りの出來がたければ家に只今火のしの力かりあぶらずとも、頭巾なしにて此寒天に見すぼらしければと母君の趣向の苦しがりとは人も知らじ、我れも昔しは思はざりし、此あさましき文學者家に歸りし時は餅も共に來たりぬ、酒も來たりぬ、醬油も一樽來たりぬ、拂ひは出來たり、和風家の内に吹くこそさてもはかなき、いざとて午後より師君へ歲暮に趣く、中村君より我れへの歲暮に帶上げのちりめんを送られしとて取次がる、師に賴まれて小出君に歲暮もの持ゆく、歸路かねての心組に曉月夜の原稿料十圓のつもり成しをおもふに越えたれば、彼の稻葉のほなみ風にもまれて枯々なるも哀なるに、昔しは我れも睦びし人の是れよりは何ごとも賴まねど流石に仇の間には非らず、理を押せば五本の指の血筋ならねど、さりとておなじ乳房にすがりし身の言はゞ姉ともいふべきを、いでや嘉びは諸共にとて柳町の裏やに貧苦の體を見舞ひて金子少し歲暮にやる、昔しは三千石の姫と呼ばれて白

き肌に綾羅を斷たざりし人の髪は唯かれの〻薄の樣にていつ取あげけん油氣もあらず、袖無しの羽織見すぼらしげに着て、流石に我れを恥ぢればにやうつむき勝に、さても見苦るしき住居にて茶を參らせんも中々に無禮なればとて打詫るぞことに涙の種なり、疊は六疊斗にて切れもきれたり唯わらごみの樣なるに、障子は一處として紙の續きたる處もなく、見し昔しの形見と殘るものは卯の毛におく露ほどもなし、夜具蒲團もなかるべし、手道具もなかるべし、淺ましき形の火桶に土瓶かけて小鍋だての面かげ何處にかある、あるじは是れより仕事に出る處とて筒袖の法被肌寒げにあんかを抱きて夜食の膳に向ひ居るもはかなし、正朔君の我が土產を喜こびて紅葉の樣なる手に持しまゝ少時も放たず、御佛前に御覽に入給へと母君に言はれて佛だんめきたる處に備ふ、何事も時世にて又めぐり來る春もあらんを正朔君だにかくてあらば夢力を落し給ふな、かよはき御身に胸をいためて病氣などを起し給はゞ夫こそ取かへしのあることならねばとて慰むるに、聞き給へ此子の成長くならば陸軍の技師に成りて銀行よりいくらも金を持ち來りて父も母も安樂にすぐさせんと常々威張りて申すことゝ流石に賴もし氣に笑みて語る、又こそとて此家を出れば夕風袂に吹きて大路すでに闇く成ぬ。

廿九卅の兩日必死と著作に從事す、曉がたしばしまどろむのみにて一意に三十一日までに間に合せんとするほどいと苦るし。三十日には上野の伯父君歲暮にとて參られぬ、一日筆をとること叶はずして暮しき、其夜十一時まで燈下にありしが國子しばし我れを諫めて名譽もほまれも命ありてにこそ、斯くまでに瞋をつかひ心を勞して煩ひ給はゞ何とかすべき、見る目もいと苦るしきに何卒これは斷りてもは

や今宵は休み給へとくり返しいさむ、實に夫も道理なりとて筆をさしおけば、心共につかれて俄に睡くさへ成ぬ。

卅一日　早朝三宅君に斷りのはがきを出す、一日家の中を掃除などして日沒前に何ごともなし終りたり、いざとて國子と共に買物がてら下町の景氣見に行く、本郷通りより明神坂を下り多町にものを買ひて小川町の景氣を眺め、三崎町に半井君の店先を眺めぬ、年わかき女の美くしく髮などもかざりて下女にては有るまじき振舞は大方大人の妻君なるべしと國子のかたる、大阪の例の富豪家の娘大人に執心ふかしと聞きしが持參金にて嫁入せしにあらずや、扨もいかに働きある人とてこれほどの店無手にて成るべきならねば出金の穴何方にかあるべきは定なり、世は斯かる物とうめきて歸路富坂下に國子ものをひらふ、いとのどかなる大晦日にて母君家を持ちし以來この暮ほど樂に心を持しことなしとていたく喜こばる、九時といふに表をとざして寢たり。

廿六年の一月一日　はいとのどかなる日かげにあらはれて、門松のみどり千歳といはひて例の雜煮もたべ終りぬ、昔しは元三のほど年頭客に勝手元の暇なく羽根つく間もあらずと恨みしが、引かはりて更に來る人もなし、母君近傍に年禮廻りをなし給へば、彼方よりも老母、内室など答禮はすべて女なりけり、芦澤芳太郎早朝より來る、陸軍にて賜はりし料理を持參す、一日遊びて三時ごろ營中にかへりぬ、今日年始狀のとどきしは野尻理作、穴澤小三郎、山下信志の人々なり、これより出せしは十五軒斗成き。

二日　もいと長閑し、三枝、藤林、山下、安達など親類めきたる年頭客あり、兄君も來らる、久保木の姉君を呼びて此夜歌留多の催しいとにぎやかなり、姉君は三十七、兄君廿八、我は廿二、國子廿いづれも子供にてすむまじき年齡なるを、打寄れば斯くまでおさなきかとて母君炬燵に寄り居て見給ふさま何事の憂きもあるまじく樂しげなるが勿體なくうれし、ことにまぎれてかき殘しぬ稻葉の正朔君も年禮とて今日遊びに來たりしなり。

三日　田中みの子君年頭に來る。

四日　大島みどり子君來る。

八日　にはじめて年頭に出る、猿樂町藤本君、西小川町大島君、下二番町にて田邊君、三宅君、歸路師の君に參る、車夫が廻り順のかゝる都合成しなり、田中君にも參るべき心組成しを三宅君のもとにて逢ひて、今日は留守なるにおなじくは又の日といふ、三宅君と共にしばし語る、文學界の小說是非出し給はれ、初號は廿日に發行のはづなれど、これに間に合はずば二號にてもよし、是非にといふ、少しかたりて別れたり、去歲のこの日は半井ぬしを平河町に訪ひて逢はず、小田君のもとに行、かくれ家に行こゝろあわたゞしかりしを思ひ出るに、何ごととはなしに胸いとくるほし、昨是今非の世、今日はあしたの何なるべきか、思へば喜憂は無差別なり。

十三日　の夜宮塚ぬし來訪、上海に越きしは五年の前なり、昔しながらの物がたりに懷舊のおもひたえがたし、羽根つきて共に遊びし春は君が十七の頃なりし、さても變りにける身哉、かゝれとてしもお

もはざりしを、涙たゞこぼれにこぼれて戀しきはそのいにしへなりけり。

十四日　小石川稽古はじめなり、風流の俗事少し斗の點取に暮して、日沒後かへる。

十五日　上野の清次母と共に來る、菊池の武治母と共に來る、田部井の清三父と共に來る、榊原家の少孃乳母と共に來る、これは中島師のもとに仕へたる女の今は榊原家にあるなり。

十六日　早朝秀太郎藪入に來たりて我家にも寄る、西村君來訪、ひる飯を馳走す。

十七日　龍子ぬしのもとより文學界に出す小說うながし來るいとものうし。

十八日　芝兄君に文を出す、議會傍聽券のことにつきてなり。

下院議會は昨十七日河野廣中君發議により政府の反省を求むる爲自ら五日間の休會と決しぬ、そは豫算案の政府に容れられざりしに依れり、廿三日の開會こそ天下分めなれ、議會解散せらるべきか、內閣大臣總辭職に致らんか、この所いと六ツかし、こゝ兩三日間市中警戒夥敷よし。

廿日　兄君に廿三日の傍聽券を送る、西村君を依賴なして飯村丈三郎君より貰ひたりなり。此夜まで に小說雪の日したゝめ終る。

廿一日　小石川稽古なり、午前より行く、小說雪の日今日は郵便に托して三宅君に送る、師君は錦輝館に何某君の初會ありて趣き給ふ、我れは人々に手ならひなどをしへて、日沒ごろ歸る。

廿二日　藤本君を猿樂町に訪ふ、都の花のかりたるをかへし更に又其あとをかり來る、今後の著作につきてしばし物がたる、此日野々宮君、吉田君來訪、野々宮君は一度岩手に歸りて又今日來たられしな

り、龍京直になりとて行李など携へたり、結婚の事などにやとかたぶかれぬ、みちのくよりなりとて雉子の〇を一羽送らる、此日西北の風いとはげしきに此人々歸りし後淺草より出火あり、西鳥越とか聞くに三枝君は如何など一同心をなやます。

廿三日　晴天。母君小林君に金かりに行給ふ、菊池君の老母來訪、新年はじめてなれば有合せにて酒を出す、母君一寸立かへりて直に三枝に火事見舞にと趣く、か成の大火にて百何十戶とか燒たれど三枝にはことゝもなかりし、この火事に又鳥越座も烏有に成りぬ、此夜新聞號外かしましく賣來る、我が改進新聞も號外を發しぬ、議會は停會に成ぬるなり。

廿三日　より向ふ十五日間二月の六日までなり。

廿五日　雪ふる、いさゝかづゝはしば〳〵降りしがつもるほどなるは今日ぞ初雪成ける、中村禮子ぬしのもとに數よみの催しある日なれど此頃は歌にいたく心も入らず人々とものがたりなどするがいと物うければ物にかこつけて斷りしが、此雪にて他の人々も來會しけんか如何になど流石に思ひやらる、三寸斗はつもりけるなり、樹々の姿大路のさまいとおもしろし、四時ごろには降やみけり。

廿八日　小石川稽古なり、正午よりゆく、伊東君教會のことにつきて少しものがたりあり、中村君のもとに聞たることゝて怪しき言葉をいひ聞かせられしが其心よくわからず、師君は養子のこと取定まりて今日は其方へとて稽古後直に支度し給ふ、此處すべて書つゞくべきにあらず。

廿九日　曉より雪ふる、今日はさきの日のにも增りて勢ひよく降りに降る。蘆澤來る、今日は九段に

大村卿の銅像落成式あるべきながら此雪故延に成しなど語る、安部川もちなどこしらへて打よりてくふほどに、いや降しきる雪つもりにつもりて蘆澤師宅ごろには五寸にも成りぬ、日沒少し前にやみぬるなり、夜いたう更けて雨だりのおとの間ゆるは雪のとくるにやとねやの戸をして見出せば、庭もまがきもたゞしろかねの砂子をしきたるやうにきら〳〵敷、見渡しの右京山たゞこゝもとに浮出たらん樣にて夜目ともいはずいとしろく見ゆるは月に成ぬる成るべし、こゝら思ふことをみながら捨てゝ有無の境をはなれんと思ふ身に猶しのびがたきは此雪のけしきなり、とさまかうさまに思ひつゞくるほど胸のうち熱して堪がたければやをらをりて雪をたなぞこにすくはんとすれば我がかげ落てあり〳〵と見ゆ、月はわが軒の上にのぼりて闇ながらは見えざりしぞかし、空はたゞみがける鏡の樣にて星斗の雲もとゞめず、何方まで照るらん、そゞろに詠むるもさびし。

降る雪にうもれもやらでみし人のおもかげうかぶ月ぞかなしき

わがおもひなど降ゆきのつもりけんつひにとくべき中にもあらぬを

三十日　淺みどりの空に村鳥の囀づりいとのどかなり、家々に雪かきすとてわらべなどのはしりさわぐもいとをかしげなり、この隣なる處にわかき娘二人ある家あり、その軒並びにやもめなる男のすめるが當に追從しありきてこの雪などをも唯かきにかく、この娘も共に立出てをかし氣にものかたらひうち笑ひなどしつゝかたはらいたきまでに睦つるゝは哀れ歎きの種をまかんとするにや、人ごとながらにいとあさまし。

三月三日　母君上野に年頭として趣き給ふ。

四日　佐藤梅吉へ同じく、この夜姉君誘ひて母君を寄席に伴ふ。

五日　梅吉より母君を誘ひて共に水天宮に參詣を爲す、歸路うなぎの馳走に成りしとて母君よろこび給ふ、此日日曜なればあし澤來る。

「戀はあさましきもの成けれ、心をつくし身をつくして成りぬべき中ならばこそあらめ、この戀成るまじき物と我からさだめてさても猶わすれがたく、ぬば玉の夢うつゝおもひわづらふらんよ、もとよりその人の目はな、おとがひさては手あしの何方におもひつきたりともなく、手かき文つゞる類ひ、ものいひ聲づかひ、たてたる心いづくいづくといふべきにも非らず、たゞ其人のこひしきなれば、常に我がおもふにも違ひてひとつ〳〵にいへば戀しき處もあらじかし、ものゝ心なくあさはかなる人は一時の戀に身をあやまつたぐひ、かゝる所にこそおこれ、少しものおもひしりて靜まりたるはこの戀にまけじとすまひて、身の中はたゞもえる樣にこがるゝも心地はしぬべくわづらふも猶ま事の迷ひには入らでつひに夢の覺めぬるもあり、女などは心のほそきものなればあらそひまけて狂氣がるたぐひもあめり、されどこれは横さまなる戀にて、誠のつま女といはんに是ほどの中ならましかばいかゞは人もうらやみ世のほめものにも成らぬことか、貞女節婦などいへるはかうやうなる心を中にふくみて人のよのつとめをおもてにせし成るべし、親子の中か君と臣の間いづ方にも此心のあらまほしきをものゝ端にはしりては片おもりするものにて、したがひては害に成りぬることもぞある。この頃見る處開くところあるまじき人に

あるまじき行ひなどの交るらんよ猶この類ひにておなじうはまめやかなる道にともなひまほしきを。」

六日　空はくもれり又雨なるべしと人々いふ、著作のことこゝろのまゝにならず、かしらはたゞいたみに痛みて何事の思慮もみなきえたり、こゝろざすは完全無瑕の一美人をつくらんの外なく、目をとぢて壁にむかひ、耳をふさぎて机に寄り、幽玄の間に理想の美人をもとめんとすれば、天地みなくら〳〵成りてそのうつくしき花の姿もその愛らしきびんがの聲も心のかゞみにうつりきたらず、からく見とむれば紫は朱をうばひ白は黒にうつり表には裏あり善には悪ともなひわが筆によそほひて世にともなふべきあたひなく、しば〳〵うれひしば〳〵うらみかしこをけづりこゝをそぎやゝわが心にみてりとおもへば黒のうせぬる時しろもうせ悪をしりぞけし時に善も又みえず成りぬ、かくまでに我戀わぶる美人はまさしく世の中にあり得べからざるか、もしは我れに宿世の縁なくして凡俗の花紅葉ならでは我心の目にうつらざるか、もしは天地の間に誠の美といふものあらざるか、もしは我が眼に美ならずとみるものまことの美かもしは天地の自然が則ち美か、もしは誠の美といふもの描くべきものならず筆すべきものならず口にも心にもつくしがたきものにて、天地の間にみち〳〵たる空氣の眼にも見えず手にも取りがたくしてしかもこれあればこそ世に生るがごとく、斯く我がいふも則ち美か、人の見る目則ち美か、我が悪と見とめて筆にしたるをも又ある人は善と見るか、さらば我が悪とみとむるもの則ち美成るべし、おもひおもひて心は天地の間をかけめぐり、身は苦惱の汗しとゞに成りぬ、思慮につかれてはひる猶夢の如く、覺めたりとも覺えず眠れりとも覺えず、さしも求むる美の本體まさしくありぬべきものともなかるべきものとも定かに見とむるは何時の曉かも、我れは福利の爲に筆をとるか、さらば何が故にかくまでにおもひをこらす、得る所は文字の數四百をもて三十錢にあたひせんのみ、家は貧苦せまりにせまりて口に魚肉をくらはず、身に新衣をつけず、老たる母あり妹あり、一日一夜やすらかなる暇なけれど、こゝろのほかに文をうることのなげかはしさ、いたづらにかみくだく筆のさやの哀れうしやよの中。

二月七日　晴に成ぬ。一日机に寄くらして日沒より摩利支天に參詣し、荻野ぬしのもとに新聞をかりぬ、今日は議會開會の日なり模樣いかになど人々いふめる、歸路切通し坂のあたりけしきいふべくもあらず、何よりも高きは號外賣くる新聞賣子の聲さてはそこ〳〵の辻にたちて壯士とかいふ樣なる人の今の世のさまを文につくりて鐵石心とかあやしきふしつけてうたふらんよ、郵便局の燈かゞやきて脚夫の行來織るよりしげく、電話交換所のいそがはしげなる、警察に出入る人の二重廻し深々とゑりを立てしは探偵と覺しく、金ぼたん角帽子の二人三人づれに立入る寄席は女義太夫なり、身なりいでたち斗は何方の姫奥方かと覺ゆる人の夫にはあるまじき人に手を取られてをかしげにものがたり行ことばを聞けば、みそこしさげて豆腐屋にはしるそれめきたり、文明開化か、百鬼夜行か筆こゝろにしたがはゞ材料は山ともいふべし、家に歸りつきし時に我新聞も號外來たれり、議會は解散にもあらず內閣總辭職にもあらず、無期停會に成ぬるなり、伊藤首相病後はじめての出席に例のなめらかなる詞豐かなる姿よく上下を說き又さとし、此おだやかなるおさまりには成りぬ、此夜朝日新聞の小說五十回斗のものよむ、

我が桃水師のもありけり、雪達摩とてたんてい小説なりき。十二時斗床に入りにき。

八日　空くもれりいと寒し、炬燵を昨日よりやめにせしかば、一しほに寒し。

九日　起出でみれば空ははれたれど垣根のもと草の葉のうへしろ〳〵と雪をいたゞきぬ、むべこそ夜の間の寒かりきなどかたる、朝の間しばし小説のこと國子とかたる、風少しあれど今日はあたゝかなり、いでやつとめて今十日斗の間にこの一小説つゞり終らばやとおもふ、金港堂よりの注文に歌よむ人の優美なるを出し給へといふこそはいとくるしけれ、さしも其社會にたち交りてあさましくいとはしきことを見聞きなれぬる身には、歌よむ人とさへいへばみだりがはしくねぢけたる人の樣におもはれて、誠のみやびなるをかゝんとせば人しらぬむぐらやに世をせばめたるなどをこそ引出て來つべけれ、玉だれの奥にうちしめりかひゝそまりたる令姫などにも歌よむ人なしといひがたけれどそれらはすべて我眼にうつり來らずかし、さてもならはしのさり難きをこれにしれば教へといふものゝゆるかせになしがたきは道理ぞかし、心をあらひ目をぬぐひて誠の天地を見出んことこそ筆とるものゝ本意なれ、いさゝかの井のうちにひそまりてこれより外に世はなしとさとりがほなるを人より見んにいか斗をかしからめ、我もそのたぐひにて我ながらしもをかしきを此眼ひらきがたきは其ならひ性と成りしぞかし、やみぬべき哉。

敷島のうたのあらす田あれぬれどにごらぬかたもあるべきものを

ことは歌にはあらずかし。

この日午後塙道忠來る、兄君の代理になり、少時ものがたりす。

十日　晴なり、やう〳〵腹稿だけは成ぬるに今日より筆を下ろさんとす、午前のうちなすことありて遊びたり。

十一日　小石川稽古にゆく、あらたに入門の人二人三人あり、渡瀬よね子、坪内何某、白根何某とか聞けり、この人々に習字をしへなどす、三宅龍子ぬし來る、文學界の初號郵送申べきながら怠りにけり廿六日の發會までゆるし給へなどいふ、顔丼びは誰々なりやと問へば、初號は透谷などやうの人にて格別におもしろくも非ず、二號の豫告を見れば大和田建樹、井上通泰などの諸大家に我れと君との名前の居たり、君の雪の日は例の出來よりわろき樣におもへど世の評はいかなるかしらずといふ、我もしか思ひしことなり、されどそは腦の仕業にて我が罪には非らずと笑ふ、龍子ぬし今日は御待町の會堂に岩本善次君の父君と會葬するなりといふ、空色濱ちりの裾もやうに同じ色あられ小紋の二枚した着きて、帶はゑび茶繻珍、羽織は小豆色なゝ子なりけり、かき鼠の地に八重櫻二輪ばかり水色の糸に縫ひて、景色斗金絲の入りたる襦袢のゑり見えぬ斗甲斐絹の首まき深くなしゝは咽になやみ處ありとてなり、髪は何のかざりもなく英吉利むすびとかに束かねて、打見には十六七とのみ見ゆめり、はじめより人とは異なりたる人なりしが三宅ぬしがりとつぎてよりいとゞしく異樣をまねぶか、何としてもつねの人とは覺えられず、此きるものもたゞ引あげに引あげてきしかば腰のあたりたぐまりて唯大きなる袋をまとひつけたる樣なり、みの子ぬし詞をつくして見ぐるし着かへ給へと切にいふに、我も傍よりそゝのかせ

ば、うち笑みつゝさらば母様の仰せにしたがはんとて田中ぬしに支度しかへてもらふ、我れと伊東ぬしと左右にありてそを見つゝこゝはかくせし方よしなど詞をそゆれば、あなかしましいひ給ふな、お筆を取りては樋口夏子様お上手なれど、御身みづからのよそほひは我と姉妹の間ぞかし、かにかくとの給ひながら我姿を胸中の鏡にうつして谷田の醜婦はあの景狀をかくべし、腰のほとりに浮袋をつけてなどゝ今繪様まで考へて居給ふべしと笑へば、我も人もたえずして笑ふ、おそく成るべしおそく成るべしさらばさらばとて馳せ出す時に、二つ三つかしらを下げしが一同への挨拶なりしが、あとは大風の後の樣にて俄に淋しくさへ成りぬ。中村禮子ぬし十六日に歌留多とりをなせば參り給ひてんやといふ、いかゞかむつかしからんと答へれば、君は我家を嫌ひ給ふにこそととてむつかる、かずよみの連中四五人殘らず參んとて約束なりにき、一同家に歸りしは四時なり。まこと江崎まき子ぬし昨日出産あり女子なりしとて報のありしなり。此夜國子と共に九段に遊ぶ、夜くらくして風あらく三崎町あたりは家々戸をおろしていと淋し、半井ぬしのもとには龍田君斗みえしと國子のかたるに、

みるめなきうらみはおきてよる波のたゞこゝよりぞたちかへらまし

いとおろか成りや、人にいふべきにもあらぬを。九段に行きし頃はるか南の空ほの〳〵赤く闇をこがしてやう〳〵濃くなるは火事成るべし、小川町にくる頃人々さわぎ立ちて此風にてはかならず大火に成るべしといふ、交番處につきて電報を見れば本芝四丁目邊よりなり、あやしきは去歳の天長節に國子と二人九段に遊びて其かへるさこのほとりにて錦町よりの火事に逢ひし、さぞは母君の案じおはすらめいそがんにはとてかけ出す、小川町より萬代橋をへて明神坂に母君の土産にあめをかふ、こは母君の好物の一ツにてしかも何處のよりこゝのを好み給へばなり、歸るさはいよ〳〵風吹あれておもてをむくる方もなく、露店などは大方ともし火を吹消されてうちつぶやきつゝ家路にいそぐめり、殘れるも買人なければそゞろ寒げにうちしほれてほと〳〵泣きも出しぬべく見ゆ、家に歸るまで火事はたゞもえにもゆるとみえしが程なくしめりためる。